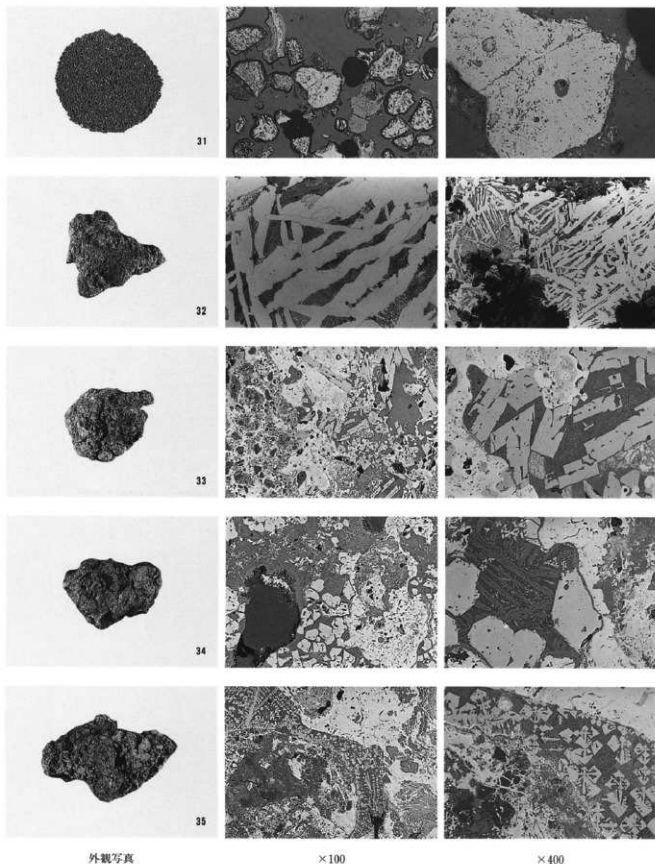
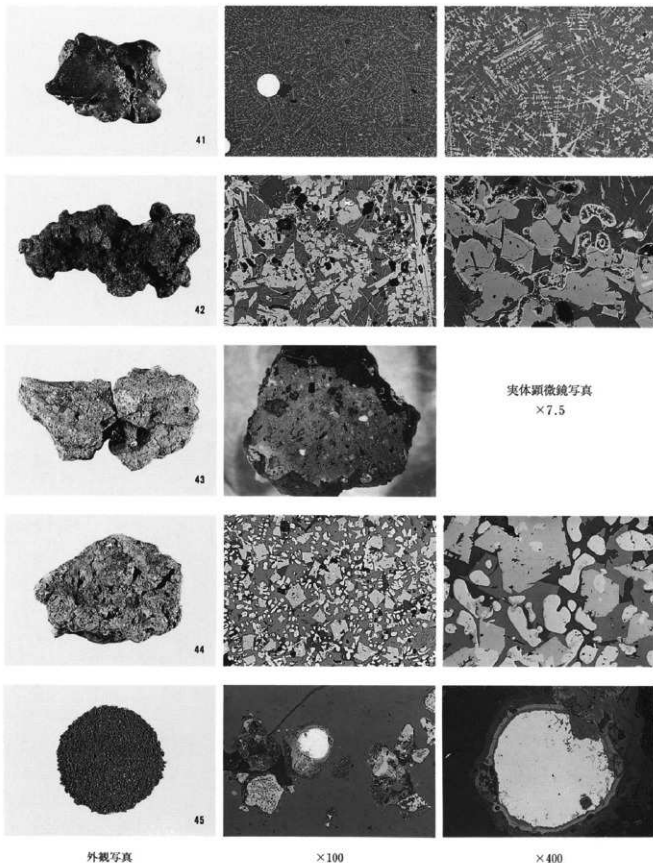


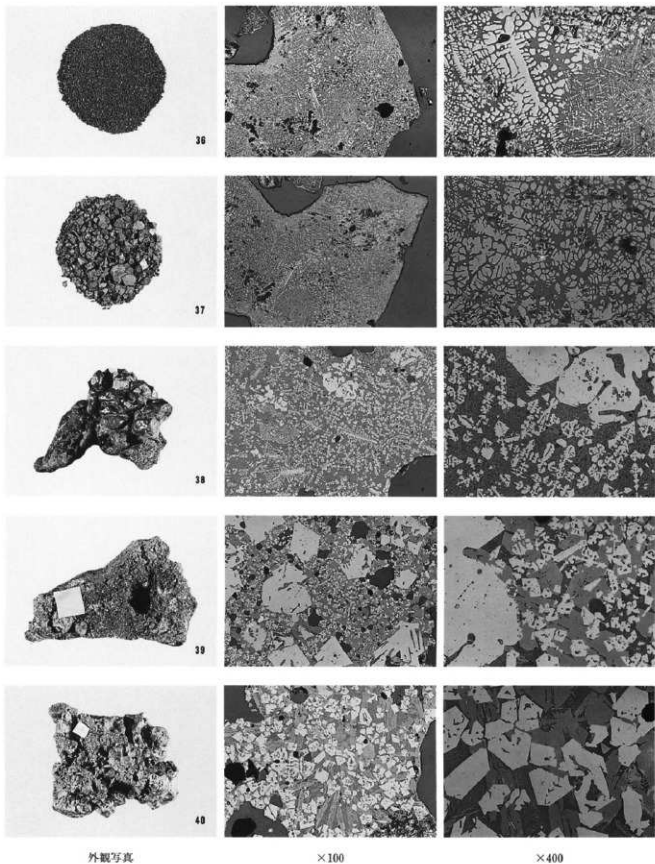
26 : S F13 製煉鉄塊系渣物 27 : S F13 製煉鉄塊系渣物 28 : S F13 炉内滓 29 : S F13 流動滓 30 : S F13 炉壁



31: S F13 被熱砂鉄 32: S F17 鉄塊系遺物 33: S F17 鉄塊系遺物 34: S F17 鉄塊系遺物
 35: S F17 鉄塊系遺物



41: S F17 流動滓 42: S F17 炉内滓 43: S F17 炉壁 44: S F17 含鉄橢形滓 45: S F17 被熱砂鉄



外観写真

×100

×400

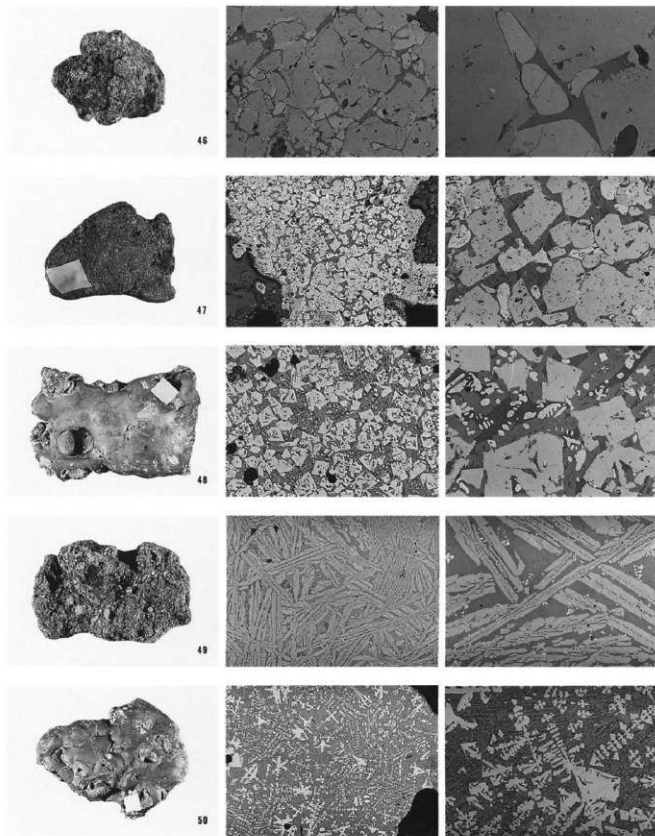
36: S F17 砂鉄+鍛造剥片

37: S F17 鍛造剥片

38: S F18 炉内流動滓

39: S F18 炉内滓

40: S F18 炉内滓



外觀写真

×100

×400

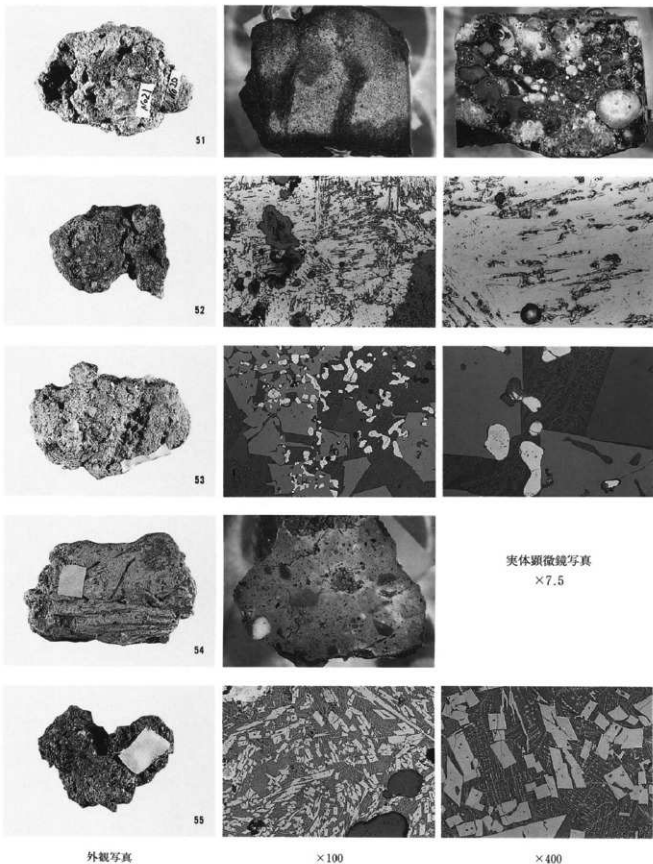
46 : S F 18 鉄塊

47 : S F 18 焼結砂鉄塊

48 : S F 19 流動滓

49 : S F 19 含鉄梳形滓

50 : S F 20 流動滓



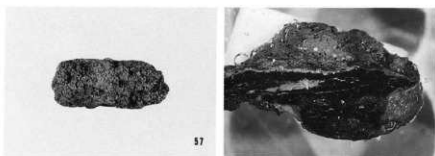
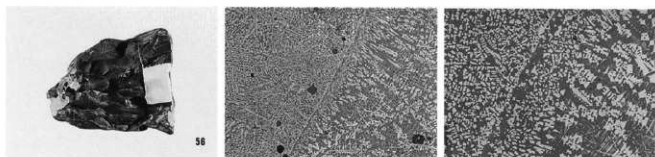
外觀写真

×100

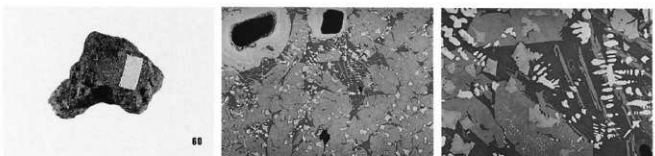
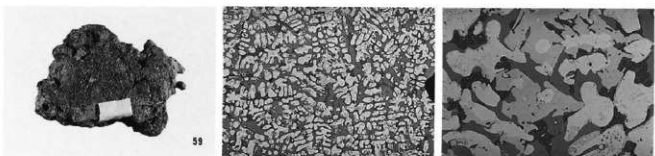
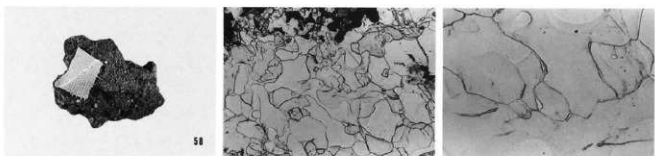
×400

51: S F 26 鐵冶炉底部粘土碗形滓
55: S F 35 鐵塊系遺物

52: S F 34 鐵塊系遺物 53: S F 34 鉄凝(?) 54: S F 34 炉壁



実体顕微鏡写真
×7.5

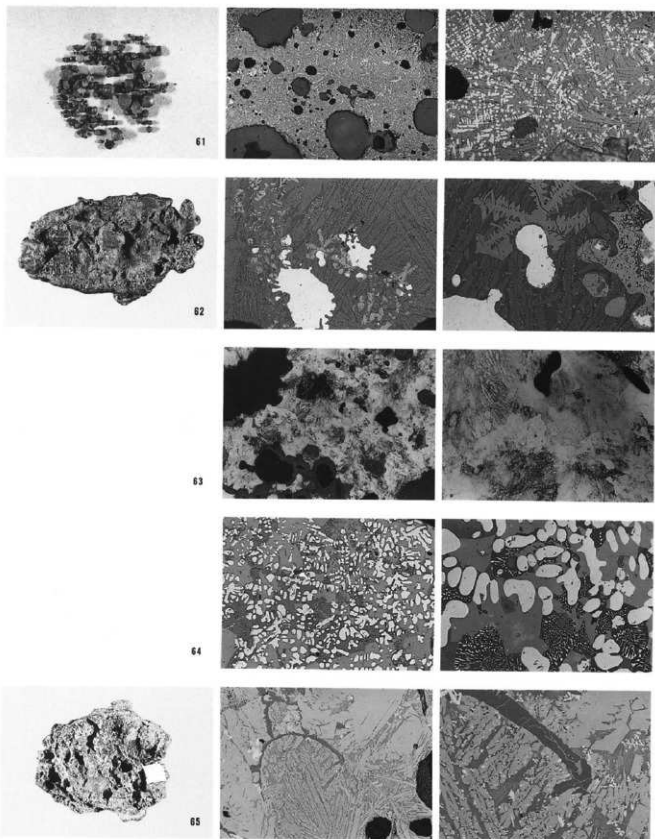


外観写真

×100

×400

56: S F 35 流動滓 57: SK 1 鉄製品 58: SK 1 鍛冶鉄塊系遺物 59: SK 1 含鉄椀形滓 60: SK 1 椀形滓



外観写真

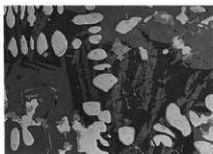
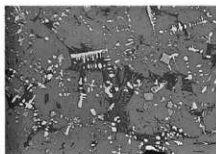
×100

×400

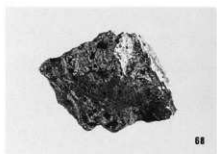
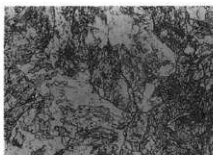
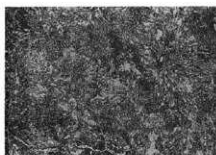
61: SK1 粒状体 62: SK28 含鉄楕形体 63: SK28 含鉄楕形体 64: SK28 含鉄楕形体 65: SK28 楕形体



66



67



68



実体顕微鏡写真
×7.5



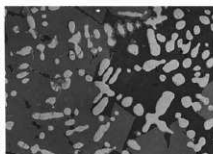
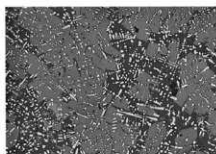
69



実体顕微鏡写真
×7.5



70

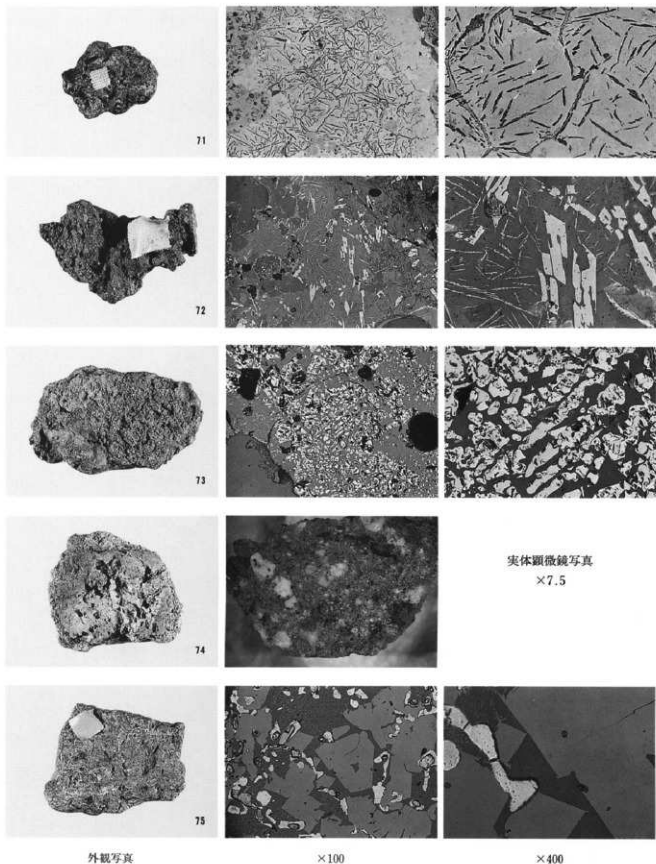


外觀写真

×100

×400

66 : S K 28 椀形洋 67 : S K 28 鉄塊采遺物 68 : S K 29 礫 69 : S K 28 羽口 70 : S K 37 含鉄椀形洋



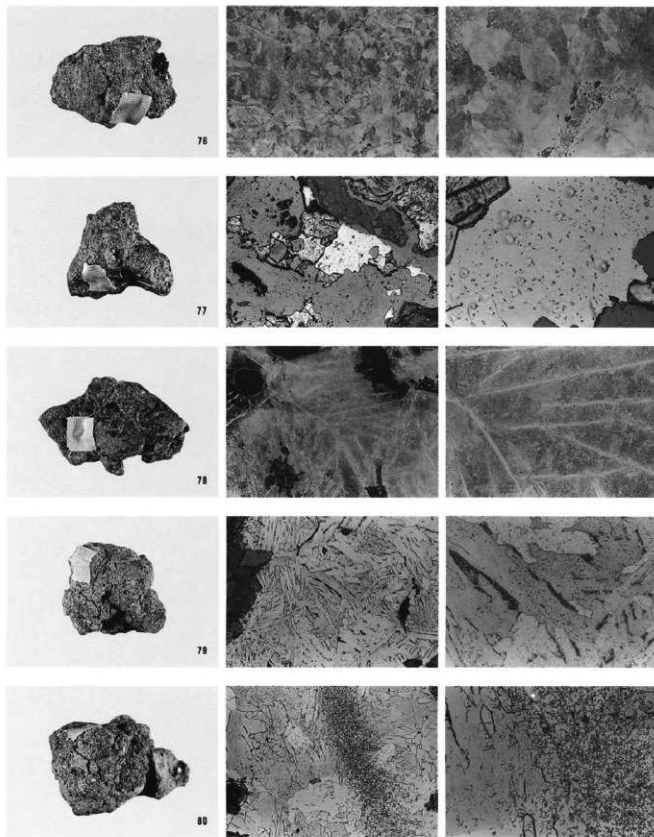
実体顕微鏡写真
×7.5

外観写真

×100

×400

71: SK37 鉄塊 72: 開成 炉内滓 73: 開成 炉壁溶解部分 74: 開成 炉壁 75: SX9 鉄錠

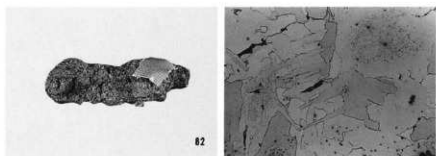
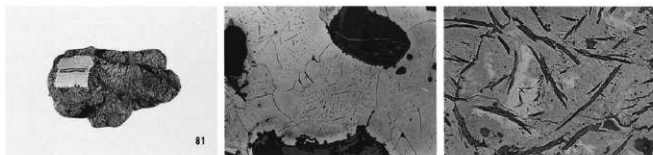


外觀写真

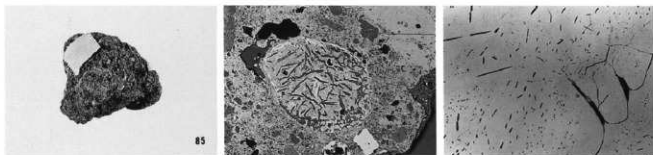
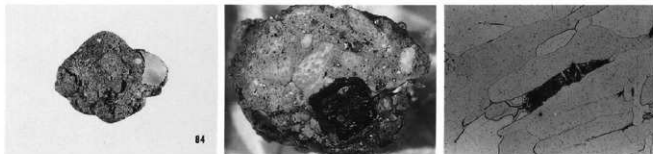
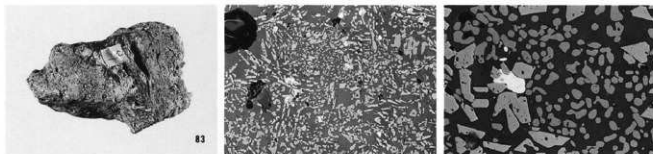
×100

×400

76: SX 9 精鍊鉄塊 77: SX 9 精鍊鉄塊 78: SX 9 精鍊鉄塊 79: SX 9 精鍊鉄塊 80: SX 9 精鍊鉄塊



实体顯微鏡写真
×7.5

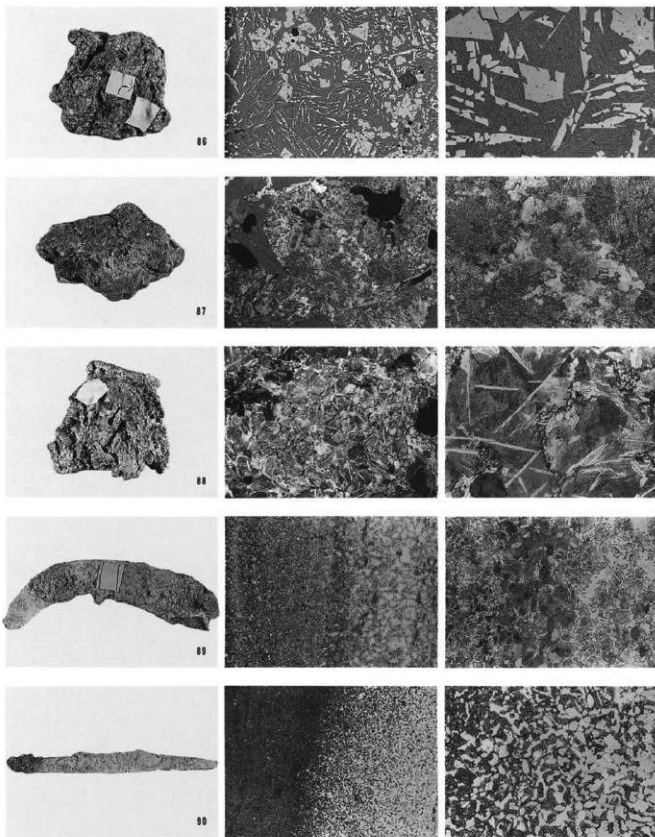


外觀写真

×100

×400

81: SX 9 精鍊鉄塊 82: SX 9 鉄器片 83: SX 9 含鉄桶形滓 84: SX 9 精鍊鉄塊 85: SX 9 (銹化)鉄塊

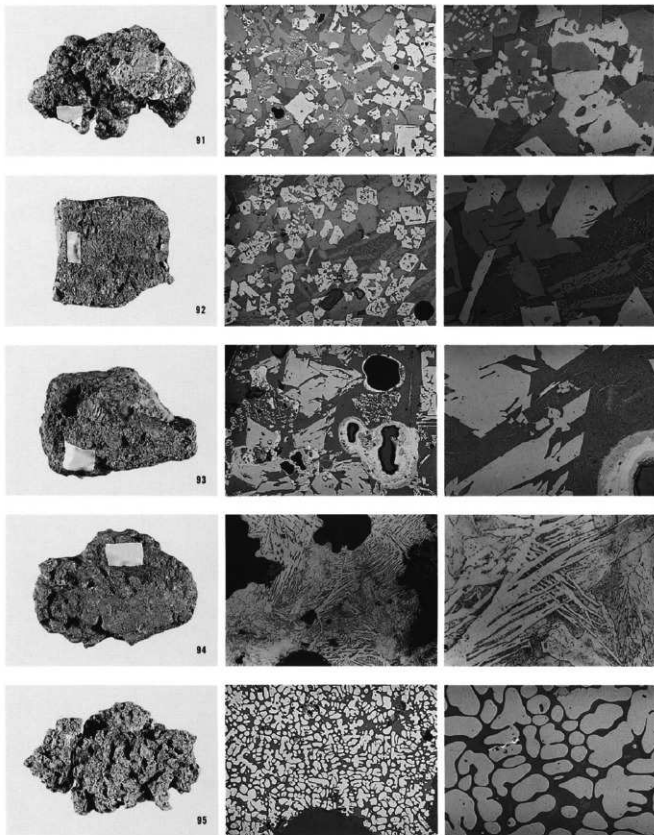


外觀写真

×100

×400

86 : S X 9 鉄塊 87 : S X 9 鉄塊 88 : S X 10 含鉄楕形滓 89 : S X 10 鉄器(鎌) 90 : S X 10 鉄器(刀子)

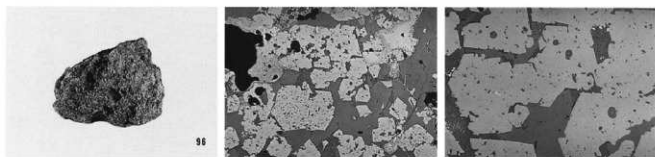


外觀写真

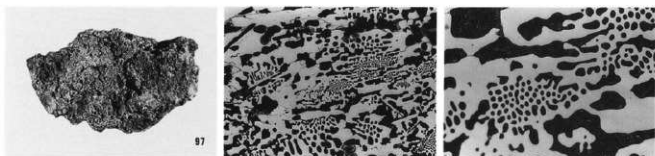
×100

×400

91: SX10 製鍊炉内滓 92: SX10 製鍊滓 93: SX10 精鍊滓 94: SX10 含鉄梔形滓 95: SX10 梔形滓



96



97

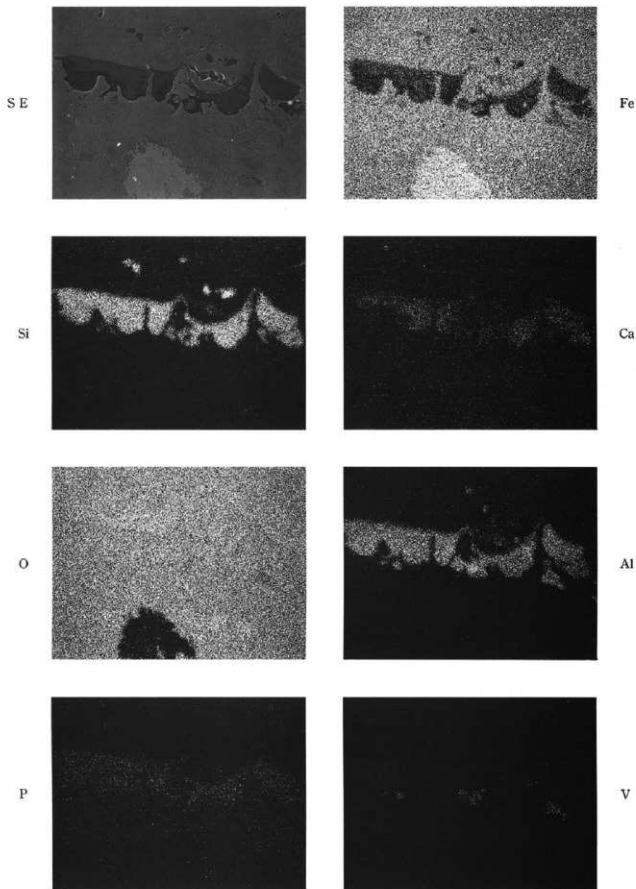
外観写真

×100

×400

96: SX10 鉄塊系遺物 97: SM1 鉄塊

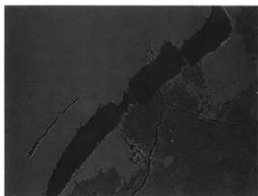
顕微鏡写真 (a)



SB5 鉄塊

EPMA写真 (1)

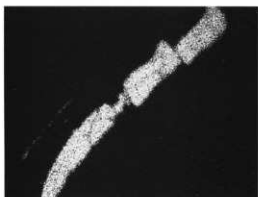
SE



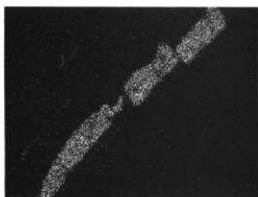
Fe



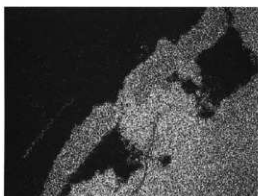
Si



Ca



O



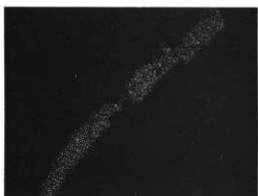
Al



S

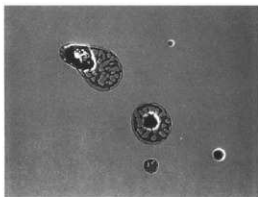


Mg



SB8 鉄器(釘)

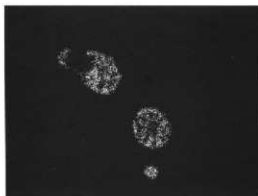
SE



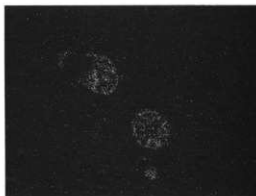
Fe



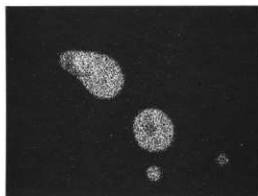
Si



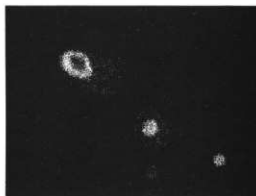
Ca



O



Al



Ti

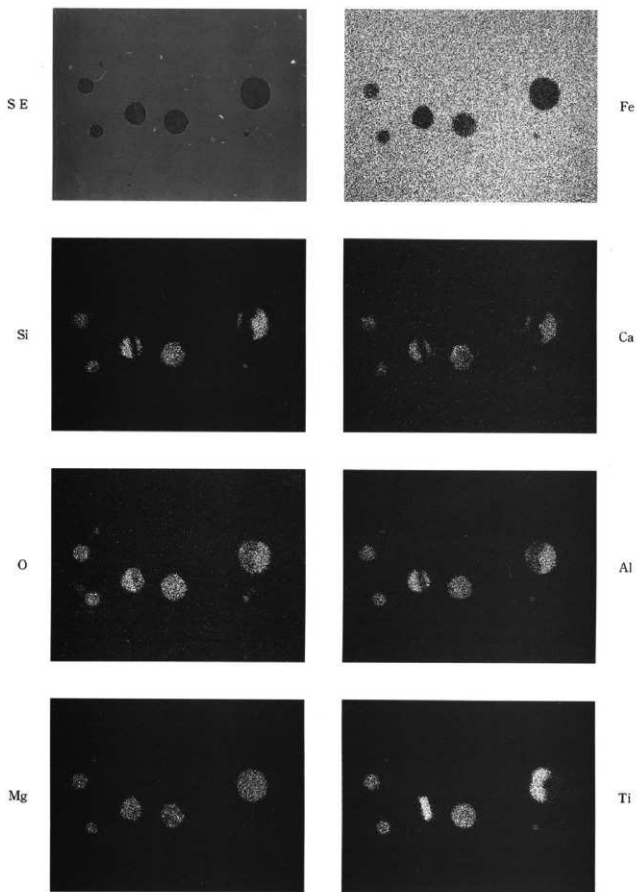


P

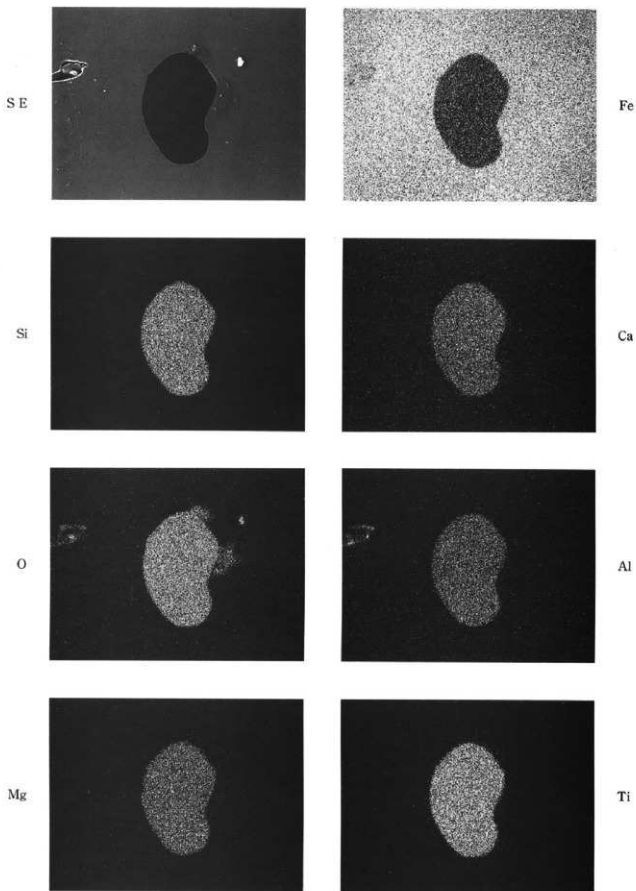


S B10 鉄塊

EPMA写真 (3)



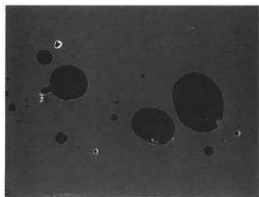
S F10 鉄製品



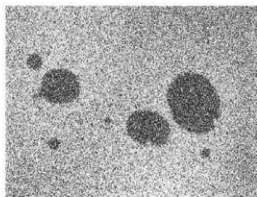
S F 17 鉄塊系遺物

EPMA写真 (5)

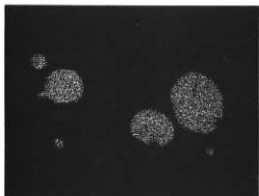
SE



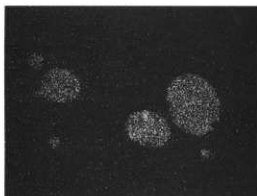
Fe



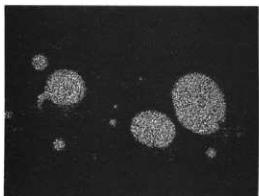
Si



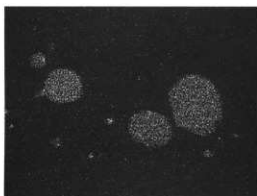
Ca



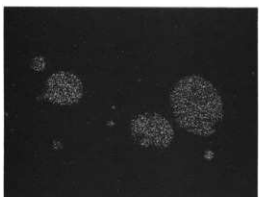
O



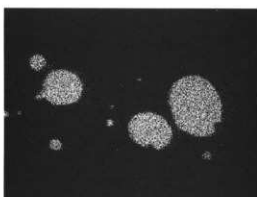
Al



Mg

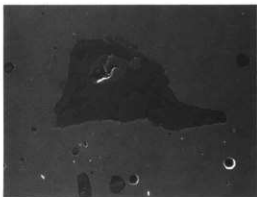


Ti



S F17 鉄塊系遺物

SE



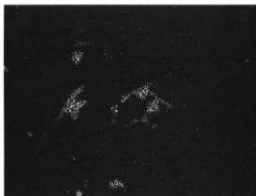
Fe



Si



Ca



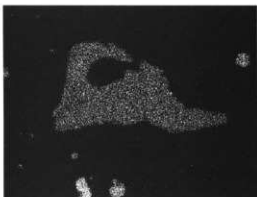
O



Al



Mg



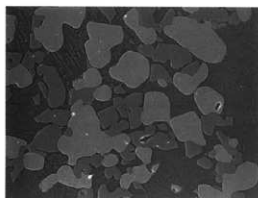
Ti



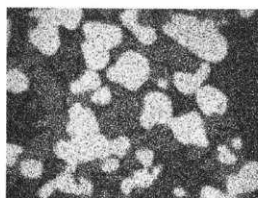
S F34 鉄塊采遺物

EPMA写真 (7)

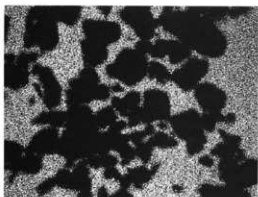
SE



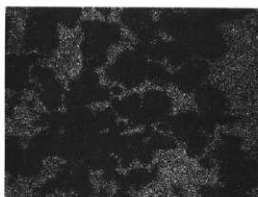
Fe



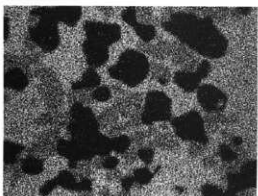
Si



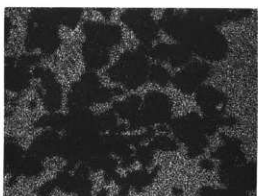
Ca



O



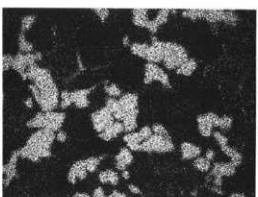
Al



Mg

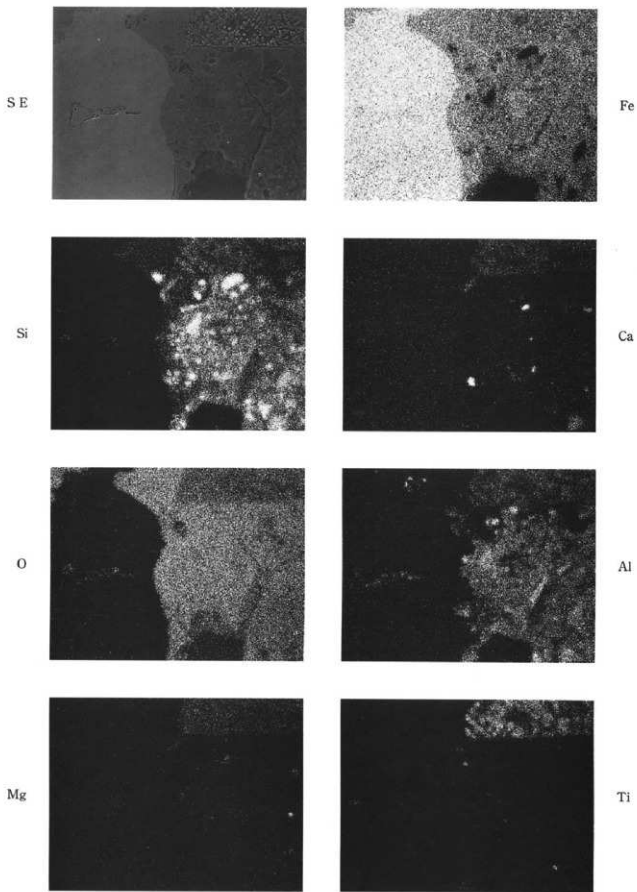


Ti

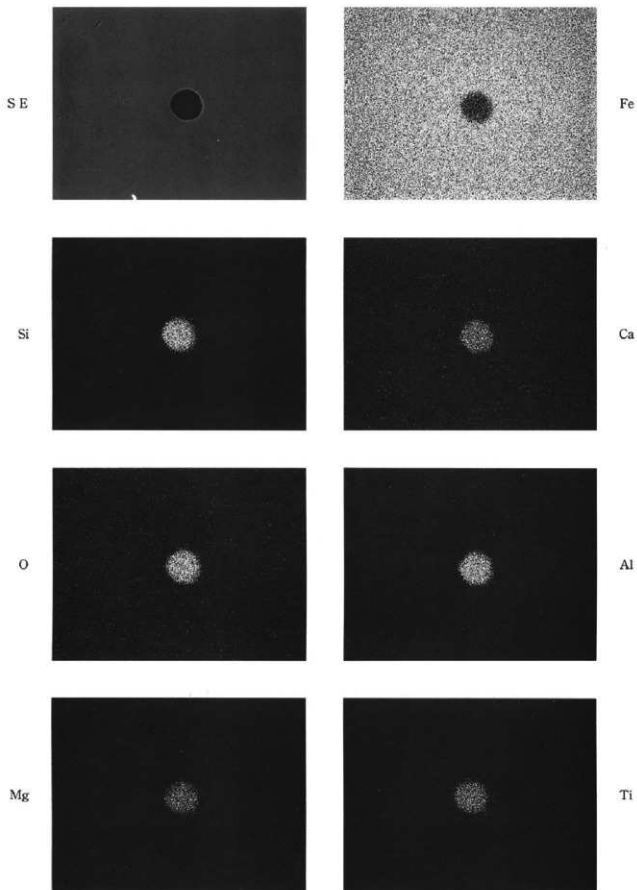


S F34 鉄屑(?)

EPMA写真 (8)

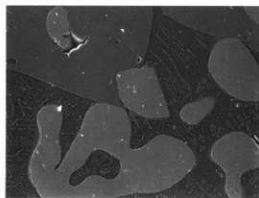


SK1 鍛造切片



SK1 粒状粉

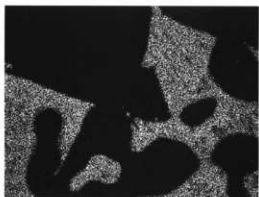
SE



Fe



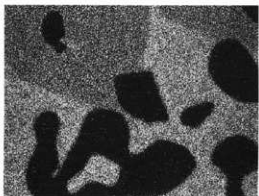
Si



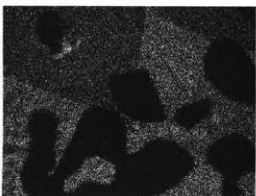
Ca



O



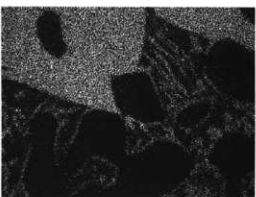
Al



Mg

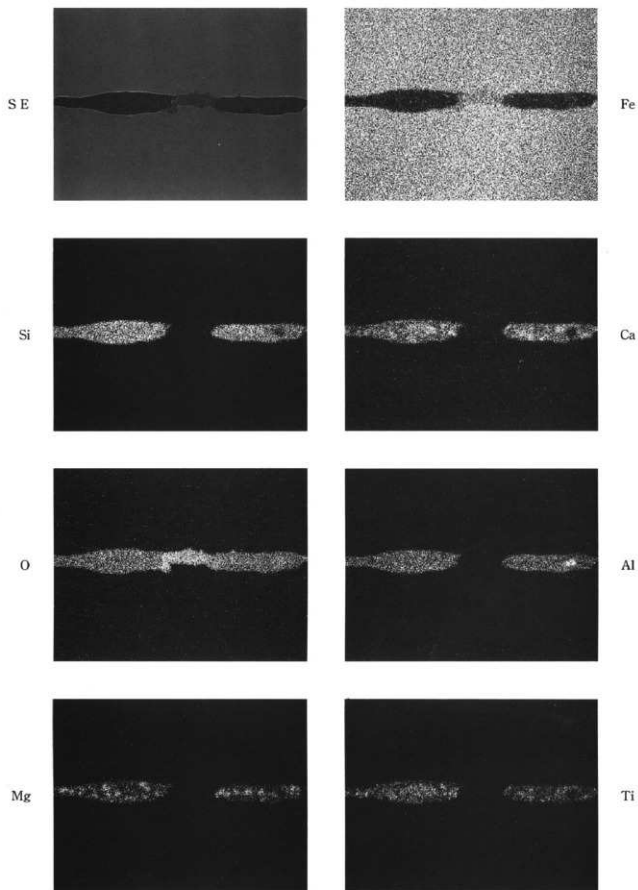


Ti



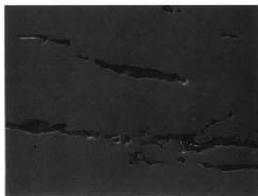
SX9 鉄錠

EPMA写真 (1)



S X10 鉄器(鎌)

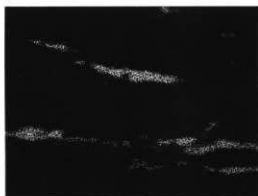
SE



Fe



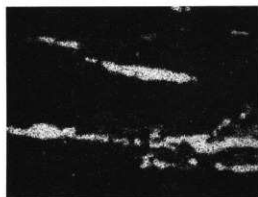
Si



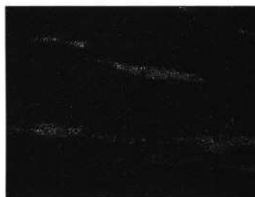
Ca



O



Al



Mg



P

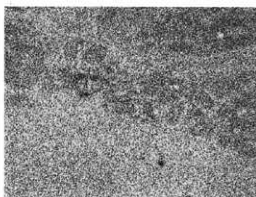


S X10 鉄器(刀子)

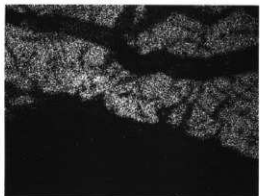
SE



Fe



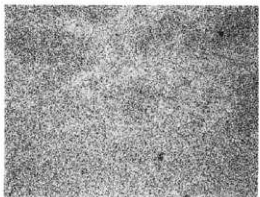
Si



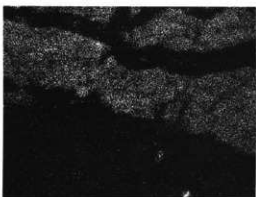
Ca



O



Al



Mg



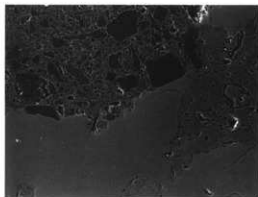
Ti



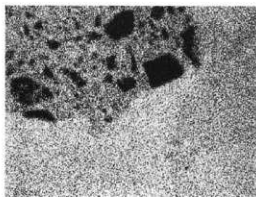
S X10 鉄器(刀子?)

EPMA写真 00

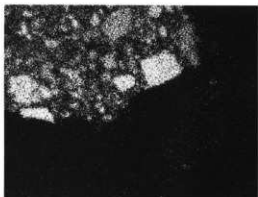
SE



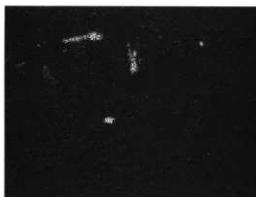
Fe



Si



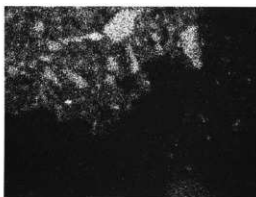
Ca



O



Al



Mg



Ti



SM1北上 鉄塊

EPMA写真 (国)



第 3 章

大 穴 遺 跡



大穴遺跡3号墳調査風景

第3章 大穴遺跡

第1節 調査の概要

1 調査の概要

県埋文センターが大穴遺跡における受託調査を行うまでの経過については、「例言」を参照されたい。

試掘調査は平成4年12月にトレンチ調査総面積664㎡を行い、発掘調査は平成5年度に調査面積約8000㎡を実施した。報告書作成のための整理作業はほかの遺跡との調査工程の絡みから年度をまたいだ平成7年度の1年間を充てている。平成8年度の本報告書の刊行をもって本遺跡に係わる作業を終了する。

2 調査の経過

平成4年度

12月14日～18日 試掘調査。古墳2基、その他の遺構を確認する。

平成5年度

4月1日 発掘調査計画書の作成。
4月8日 発掘調査開始。表土剥ぎ開始。
4月19日 森嶋 稔理事（長野県考古学会会長）視察。
4月22日 神村 達理事、宮坂光昭長野県遺跡調査指導委員視察。
5月13日 気球による1号墳の空中写真測量実施。
5月20日 長野市立博物館遺跡見学会の一行二十数名見学。
5月23日 発掘調査現地説明会（参加者171名）。
6月8日 気球による空中写真測量実施。
6月17日 ラジコンヘリによる空中写真撮影、空中写真測量実施。
6月25日 旧農道の表土剥ぎ開始。
7月29日 発掘調査終了。
1月5日 本年度の整理作業開始。
3月31日 本年度の整理作業終了。

平成7年度

4月10日 報告書作成のための整理作業開始。

土器石器などの洗浄、注記、選別、接合、実測作業を開始する。
6月5日 遺構の図版作成作業開始。
7月18日 茂原信生教授（京都大学）による人骨および獣骨の鑑定に係る調整（第1回目）。
7月31日 土器の復元および着色作業を開始。
9月11日 原稿執筆、編集作業開始。
10月12日 穴澤義功氏（国立歴史民俗博物館共同研究員）による鉄器に係る指導。
10月23日 写真図版組作業開始。
11月8日 遺物図版組作業開始。
12月5日 松本市安塚・秋葉原古墳群出土資料等の調査（松本市立考古博物館）。
12月11日 図版組トレース作業、遺物の写真撮影開始。
12月20日～22日 茂原信生教授による人骨および獣骨分析鑑定（第2回目）。
3月31日 報告書作成のための整理作業終了。

平成8年度

11月20日 入札。
3月31日 刊行。



2号墳発掘風景



整理作業風景

3 調査の体制

(1) 調査の組織

調査主体 県埋文センター

平成4年度（試掘調査）

事務局	事務局長	峯村忠司	長野調査事務所	所長	岡田正彦
	総務部長	神林幹生		調査第一課長	百瀬長秀
	調査部長	小林秀夫		調査研究員	出河裕典・山極 充

平成5年度（発掘調査）

事務局	事務局長	峯村忠司	長野調査事務所	所長	岡田正彦
	総務部長	神林幹生		調査第一課長	百瀬長秀
	調査部長	小林秀夫		調査研究員	青木一男・伊藤友久 山中 健・依田 茂

平成7年度（整理作業）

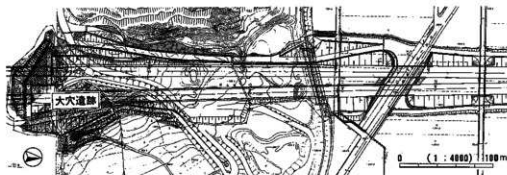
事務局	事務局長	峯村忠司	上田調査事務所	所長	小林秀夫（兼務）
	総務部長	西尾紀雄		調査第一課長	白田武正
	調査部長	小林秀夫		調査研究員	伊藤友久・依田 茂

(2) 発掘調査および整理作業参加者

（敬称略・順不同）

発掘調査：池内今子、内山清子、内山けさみ、内山怜子、北沢郷子、北沢久枝、窪田千代子、熊井公子、倉島よきの、志津きよい、竹内夏美、田中文子、所いづみ、中島まさる、中村菊美、広田文子、藤井峰子、三澤喜代人、待井すみ江、待井たけ子、待井と志江、松島あき子、松島房江、丸山 基、宮沢つきみ、宮沢ふじ江、宮沢 勝、山崎長高、山崎高子、吉原さつき、吉原たけ子、吉原俊子、吉原十美枝、青木けさ江、石坂けさみ、市川しづ江、入 秀子、内山けさ江、内山光男、太田けさい、太田里子、大矢 米、笠井重義、唐木寅雄、小林修一、小林幸雄、高野 明、高野幸子、中村美智子、日詰貞子、藤島とみ子、松峯芳子、村田章雄、柳沢松江、柳澤正子、山崎清江、山崎敬子、義家重治、岡田暁子、北原かず子、齋田美代子、小林英子、神戸富子、北原尚子、南沢信子、涌井恭江、国光一穂

整理作業：徳永勝子、佐藤桂子、佐藤弘子、竹内幸子、戸谷栄子、樋口かほる、梅沢淳子、唐沢裕子、小山内玲子、熊井麻美、清水明日香



第3-1図 大穴遺跡調査範囲図

4 調査の方法

以下、調査の方法を発掘調査と整理作業とに分け、簡略に説明する。

発掘調査：大穴遺跡の試掘調査は、重機を使用し、また古墳と思われる箇所は手掘りによるトレンチ調査とした。本調査においては、試掘調査の結果を踏まえ、特に古墳の現状を保護しながら重機による全面表土剥ぎをし、面的調査を実施した。しかしこの面的調査は、排土処理の点から調査区域を数箇所に分割し折り返し調査となった。調査区は、北側よりA・B・C・D地区の名称により便宜をはかっている。

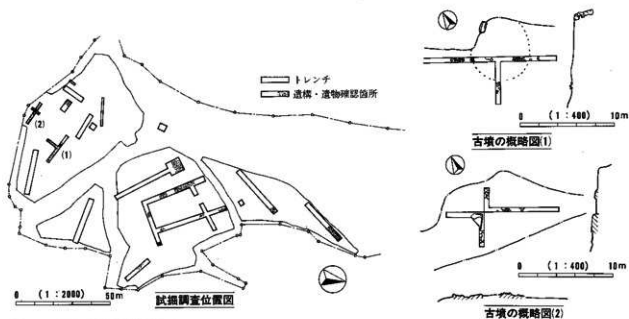
検出された遺構の図化にあたっては、座標に係わる測量を主に測量業者に委託した。その測量方法は、基本的には「埋文庫標」による大地区・中地区および小地区を設定するものであるが、現場においてはこの埋文庫標（凡例参照）の基準測量杭をあえて設定せず、光波測量により個々の測点の座標を読み取り図に落とす「トータルステーション」を導入している。このため古墳敷石等の詳細図については任意の基準杭を仮に設定し、手書きの図の中にこのポイントを落とす方法を取った。このため遺構図は「遺跡調査の方針と手順」（県埋文センター）による「測量基準線に載るもの」の割付原則には基づかない個別遺構図を採用したことになる。

整理作業：整理作業においては、まず個々の遺構の個別遺構図（平面図とセクション図）を照合し修正加筆を行い第二原図を作成している。さらにこの第二原図とともに遺構の所見を記載する「遺構所見整理カード」を一括した「遺構カード」を作成した。また、写真整理については、現場で作成した写真台帳を基に各種ベタおよびフィルムを撮影順に並べ必要事項を注記している。本報告書作成にあたっては、これらを基礎的な記録資料として活用した。

出土遺物の整理は、まず洗浄をし、脆弱な土器や土製品については硬化剤を浸透させて補強し、骨類はクリーニング処理を施している。その上で遺物台帳より必要事項を遺物に注記し、接合し（含樹脂による補強）実測を経て、必要なものは、写真用復元を行った。

注および参考文献

「大穴遺跡」『長野県埋文庫文化財センター年報』9・10 1993・1994 財長野県埋文庫文化財センター
トータルステーションの手順については御写真測図研究所のコーディックシステムを参照した。



第3-2図 試掘調査状況図

第2節 遺跡の地形と基本層序

1 地形

大穴遺跡は普光寺平南部に位置し、東部（河東）山地の最西端の有明山山系の尾根と尾根に挟まれた崖雑性扇状地の緩斜面上に立地する。五里ヶ峯山系は、北方部に有明山、一重山が連なり、千曲川に向かって岬状に突き出す。また、これより東側対岸には鏡台山から天城山に連なる山並みがやはり千曲川に向かって迫り出している。双方の山系に挟まれ、さらに大峯山によって二分される谷地形は現森・倉科地籍から出る沢山川、三滝川により扇状地を形成し現集落がその上に営まれている。大穴地帯側から両宮へと広がる水田地帯は千曲川の旧河道とこの内湾部域の氾濫原として考えられる。1号墳側は大穴地帯独自に形成した扇状地と位置付けられ、森・倉科からの扇状地形成の影響は後背湿地側のみで、遺跡の立地する地域は辛うじて免れている。各遺構を検出した基盤を成す層は、別所層で黒色泥岩質を主体とし、一部に変朽安山岩（プロピライト）が認められる。

2 基本層序

近年の畑地化は斜面の上側を削り取り、その下側に盛る段々畑として造成されている。このため、畑境の石積内側で約40cmと耕土層が厚くなる反面、畑境の外側ではII層を掘り抜き一部III層の基盤層にまで影響をおよぼしている。この影響はD地区ほど顕著である。II層は遺物包含層で、小角礫が多数混じる。この包含層上は旧地表を形成し、この層を剥ぐと大型角礫を含む基盤層となる。本遺跡はこのような状況下に置かれている。

調査区域内においてA～D地区の各土層を観察した。その基本層序の内容は以下のとおりである。

I層……現耕土層。褐色土（10YR4/6）を基調とする。

II層……黒褐色土（10YR3/2）。角礫多く、粘性あり。広範囲の時期にわたる土器を含む包含層。検出面はこの層を剥いだIII層上面としている。

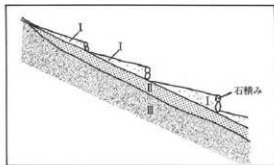
III層……オリブ褐色土（2.5Y4/3）。基盤層。

主要参考文献

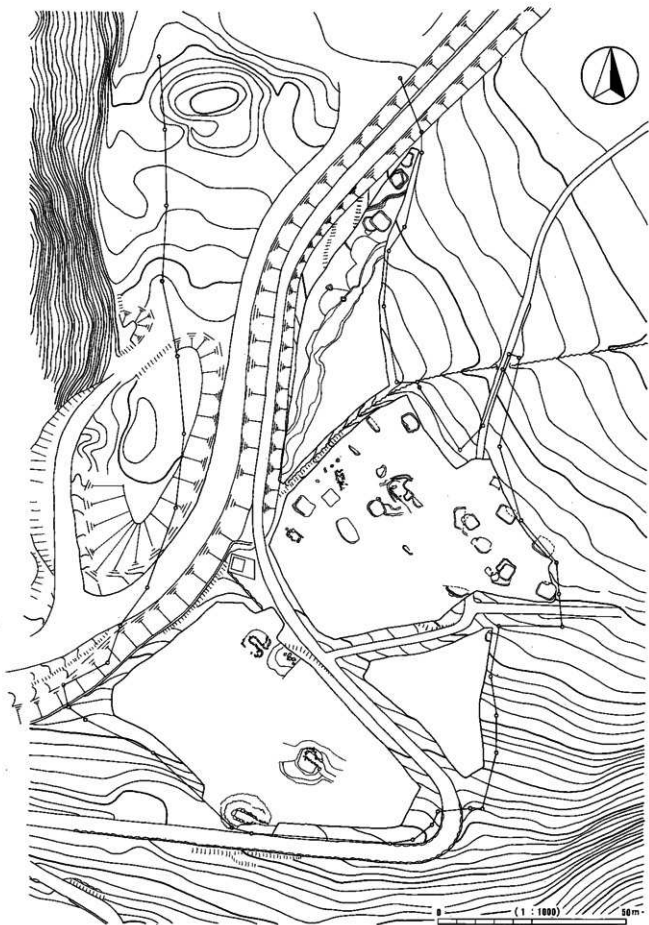
東城市教育委員会 1992 『史跡森將軍塚古墳』



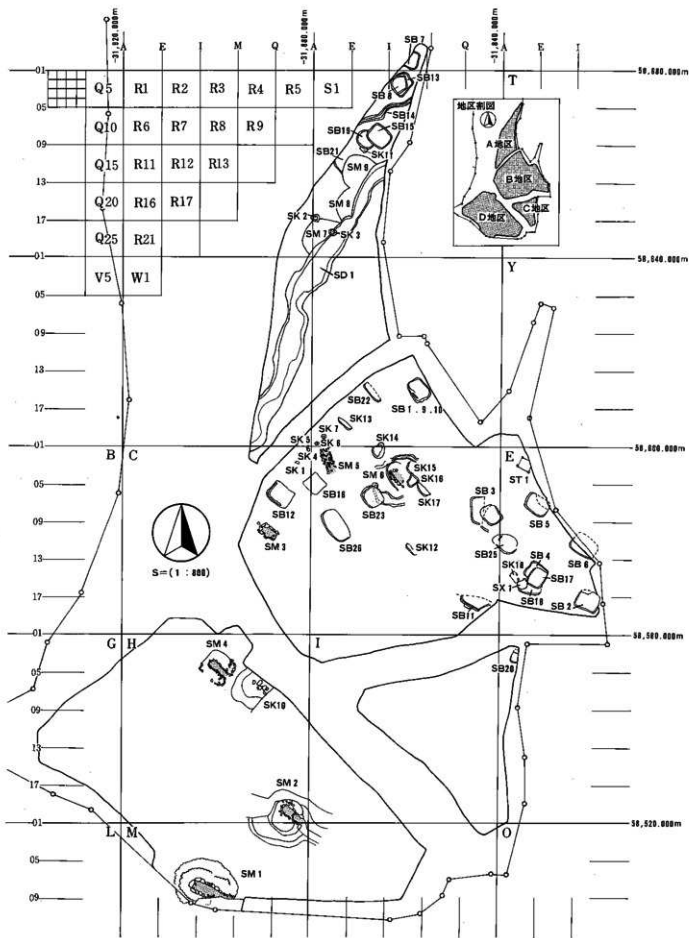
古墳試掘風景



第3-3図 地積状況概念図



第3-4図 大穴遺跡地形および遺構分布図



第3-5図 大穴遺跡調査区域内グリッド配置図

第3節 弥生時代前期までの遺物

1 遺構・遺物

本遺跡の調査範囲内には、弥生時代中期以前の遺構は存在していない。遺構外あるいは遺構内の混入遺物とされる出土遺物は下記に示すとおりである。

(1) 出土土器 (第3-6図, 図版15)

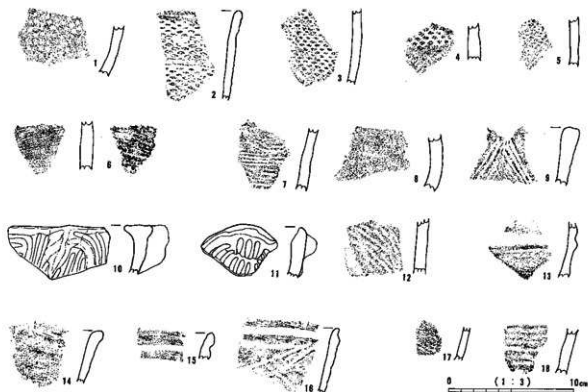
縄文時代早期の遺物は、押型文系土器胴部片(1)が2号住居址から、楕円押型文細久保式(5・3)が19号住居址と1号溝址から、細久保式押型文土器の口縁部片に外面横位密接(若干の無文部を開ける)が3号墳の南南西7m(2)よりと11号住居址(4)より、また、条痕文系土器が1号墳(6)より出土している。

縄文時代前期の遺物は、前半および末の土器が4号墳(7・8)より、諸磯C式土器口縁部片が3号墳の南10m(9)より出土している。

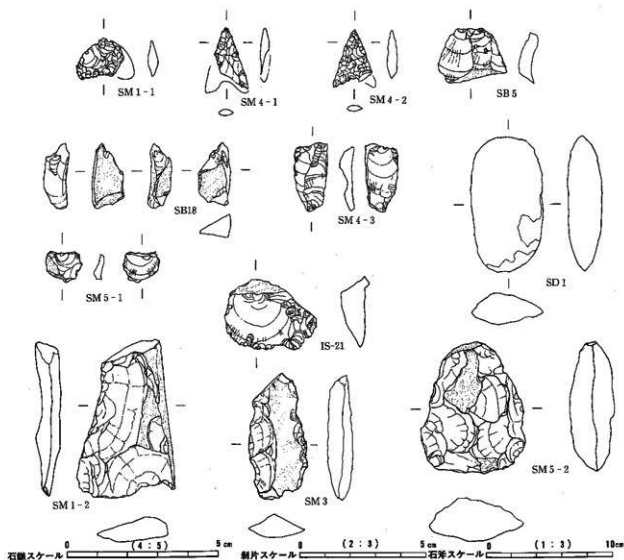
縄文時代中期の遺物は、中葉深鉢口縁部の破片が26号住居址(10)から、中葉焼町式土器の胴部の隆線裝飾破片が6号墳(11)から、さらに中期末の加曾利E4式土器の胴部片が4号墳(12)より出土している。

縄文時代晩期の遺物は、氷式土器(16・13・14・15)が、5号住居址・21号住居址・1号墳墳丘盛り土内・4号墳より出土している。

また、条痕文土器(17・18)は、21号住居址と1号墳より認められた。



第3-6図 弥生時代前期までの土器実測・拓影図



第3-7図 縄文時代の石器実測図

(2) 出土石器 (第3-7図, 図版15)

石器はいずれも遺構外出土と認められている。その内容は下記のとおりである。なお、石質鑑定は光学顕微鏡および肉眼により観察し判断したものである。

石鏃：1号墳丘内と3号墳丘内および4号墳丘内鏡石左側より石鏃が各々1点出土している。1号・4号墳のものは黒曜石製で、3号墳のものはチャートである。いずれも基部にあたる一方の脚部が欠損しており完形品ではない。先端部に使用痕跡は伴わず、付着物や装着痕跡は認められない。

剥離片：住居址の覆土中として、5号住居址内と18号住居址内より黒曜石製の剥離片が出土している。また古墳では、4号墳支室奥左墳丘内と5号墳支室内より出土する。このほか、検出面上のグリッドIS-21より出土する。

磨製石斧：1号溝址より出土しているのみ。石質は頁岩である。基部に欠損はないが、刃部に損傷らしき痕跡を認める。

打製石斧：1号墳より墳丘内と3号墳および5号墳前庭より出土している。これら石斧の石質はいずれも頁岩である。1号墳のものは刃部に欠損を認める。基部に装着痕跡、付着物および敲打痕跡はわからない。

第4節 弥生時代中期の遺構と遺物

1 遺構

(1) 竪穴住居址

2号住居址 (SB2、グリッドII E-18・22・23) (第3-8図、図版2)

検出遺構：本址はB地区最東端部に位置している。平面形状は隅丸方形で約4.9×4.2mの規模の竪穴住居址である。北側隅(谷側)の一部は前年(1992年)に行われた試掘調査による影響を受けている。覆土は暗褐色細粒砂土一層で土器片を含んでいた。床は貼り床ではないものの、中央部が堅かった。壁は北側隅を除いて明瞭で、ほぼ垂直に立ち上がる。炉は中央部やや東寄りに検出された。掘り方を持たない地床炉である。炉の周辺に焼土や炭の分布は見られず、その範囲は極めて小規模なものであった。ピットは7箇所から検出されている。P1・P2・P4(あるいはP5)・P7が4本柱による主柱穴で、P3・P6は補助穴であろう(P1・P2・P3・P4・P5・P6・P7のピットの床面からの深さは、18・33・22・47・42・19・28cm)。なお、周溝等の施設は検出されなかった。

出土遺物：出土土器の量はほかの遺構と比較して多い。細頸壺、台付甕形土器、有孔浅鉢形土器、甕形土器や壺形土器のほぼ完形品が出土している。このほか、縄文時代早期押型土器片も1点出土しているが混入したものと思われる。

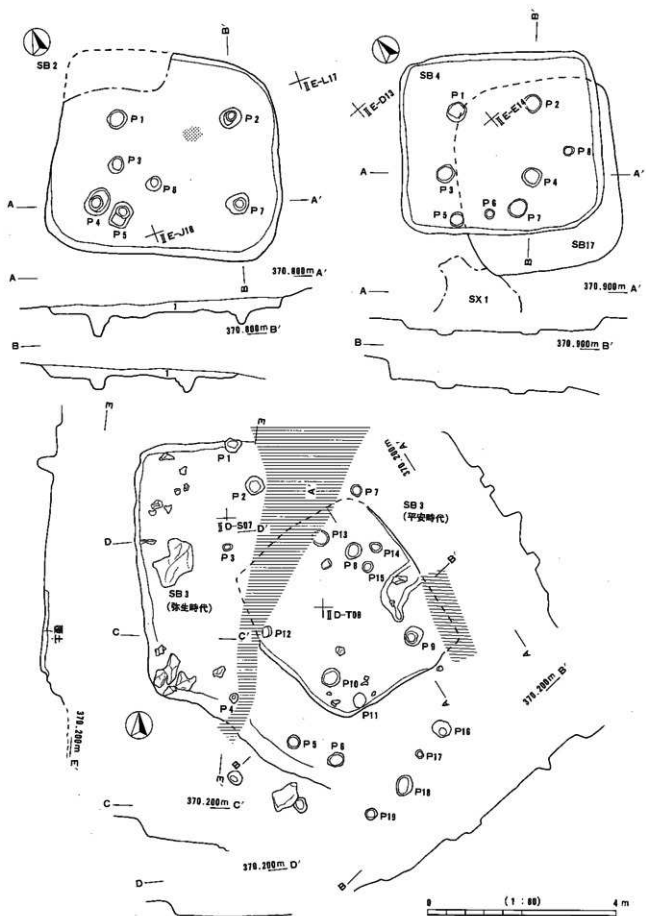
3号住居址 (SB3、グリッドII E-6, II D-10・15) (第3-8図、図版2)

検出遺構：本址はB地区中央やや東寄りの緩斜面中位に位置している。農道が遺構の東側部分を覆うためまず西側部分を調査し、農道の切り替え工事後に東側部分を調査した。一部に未調査区域が生じたのは切り返しによる新旧の農道が重なる箇所が生じたためである。図上に双方を合わせると、平安時代の住居址の外周に弥生時代の住居址の輪郭が認められたため、弥生時代の住居址を平安時代の住居址が切る重複関係にあると判断した。重複を考慮したピットは大小7つ、P1とP2はそれぞれ床面から25cm、32cmの深さで柱穴であったと思われる。P16~19については南東部に隣接する25号住居址との境に検出されているが、本址に伴うかは不明である(P18は床面からの深さ20cmで、4つの中では最深であった)。床面は堅く、壁面は緩やかに立ち上がっていた。炉、周溝ともに確認されていない。

出土遺物：西側覆土中よりその大半が出土している。主に細頸壺・甕形土器など弥生式土器片で、P11からは弥生時代中期赤色塗彩の浅鉢形土器が出土している。

4号住居址 (SB4、グリッドII E-16・17) (第3-8図、図版2)

検出遺構：本址はB地区東側の緩斜面中位に位置している。17号住居址(平安時代)によって上部が切られ、また18号住居址(弥生時代)を切る。平面形状は隅丸方形で、規模は約4.2×3.9mである。検出プランは不明確だったものの、土器片を多く含む暗褐色細粒砂土の覆土を手掛かりにその範囲を確定した。床は一部堅い所が見られたが貼り床ではなく、全体として不明確である。壁は4辺とも残存しており、谷側(北側)の一部の壁以外はほぼ垂直に立ち上がっていた。炉は検出されなかった。ピットは8箇所から検出されており、P1~P4は不整形であるもののいわゆる4本柱の主柱穴である。床面からの深さはいずれもほぼ10cmで、柱痕は検出されていない。このほか、P5~P8は深さ6~9cmで上屋の構造にかかれ補助穴の可能性が持たれる。なお、周溝等ほかの施設は検出されていない。本址と重複する住居址床面高の相違は、18号住居址で絶対標高370.400~370.500m、17号住居址370.300m、4号住居址で370.100



第3-8図 住居址平面およびセクション図(1)

mである。

出土遺物：覆土中より細頸壺口縁部・頸部、無文の胴部片や甕形土器が出土している。

5号住居址 (SB5、グリッドII E-6・7) (第3-9図、図版3)

検出遺構：本址はB地区東側の緩斜面中位に位置している。北東隅は後世の攪乱を受け削平されている。規模は約5.0×3.8mの隅丸長方形の竪穴住居址である。覆土はやや粘性のある暗褐色土一層で、土器の破片が多く混入していた。この覆土を取り除いた床面は平垣ではなく不明確で、焼土や炭の分布は認められない。また、壁も一部を除いてあまりはつきりしていない。ピットは5個を検出している。中央付近のP1は円形で直径は70cmと大きく、床面より44cmと深く、貯蔵穴だった可能性がある。残りのピット4つの内、P2～P4は直線上に並び、P5はP4に近接する。いずれも直径20～30cm、深さは10～18cmの規模で、P5とともにその性格は不明である。周溝その他の施設は検出されなかった。なお、本址の南西隅より延びる浅い溝(幅15～20cm、長さ2.7cm)状の筋を2条認めるが、本址の施設あるいはほかの遺構として判断していない。

出土遺物：台付甕形土器の口縁部・壺の頸部や有孔浅鉢形土器(甑)底部片などがある。ほかに、古墳・平安時代の土器は検出面上で採取され、縄文時代晩期水式土器も出土したが、混入したものとして判断した。土器以外では黒曜石製剝離片が1点出土している。これも混入品として処理した。

6号住居址 (SB6、グリッドII E-12-13) (第3-9図、図版3)

検出遺構：本址はB地区最東端部に位置している。北側は3分の2ほどが調査区域外に延びており、その全容は不明と言わざるを得ない。検出された南側より東西方向に長軸を持つ一辺約6.0mの隅丸長方形の竪穴住居址と推定される。床面は中央から北西方向にかけて酸化鉄により硬化している部分が明確に認められた。この硬化部分は赤茶けており焼土痕跡と類似するものの、炉とは断定していない。壁は明確でほぼ垂直に立ち上がっていた。ピットは調査部分からは検出されなかった。周溝その他の施設も検出されていない。覆土は暗褐色土一層である。

出土遺物：遺物は床面からも出土しているものの極めて少量で、時代を確定する遺物は乏しかった。

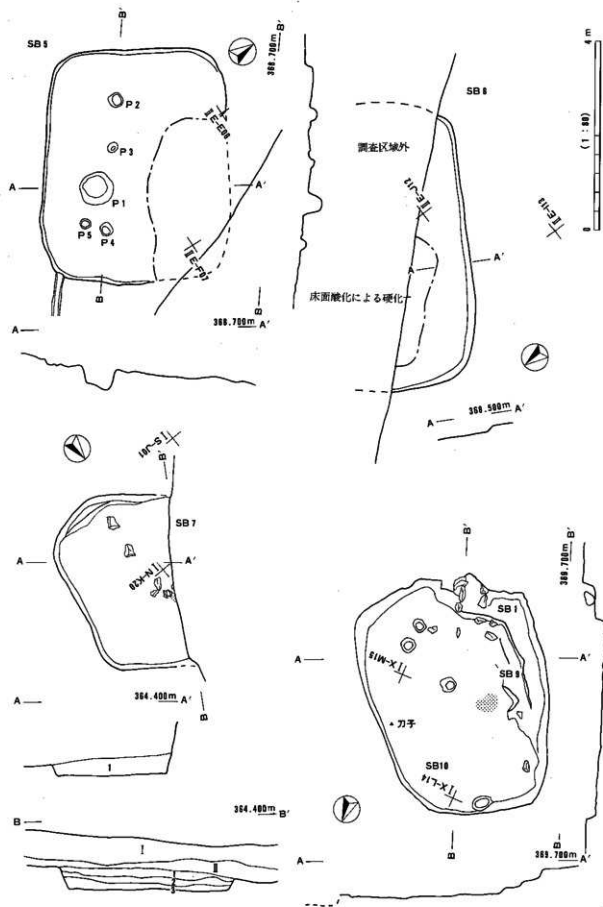
7号住居址 (SB7、グリッドI N-23, I S-3) (第3-9図、図版3)

検出遺構：本址はA地区最北端の住居址で、崖錐地形の末端部に近い位置にある。北西側は調査区域外(私道直下)に延びている。調査区域内での重複関係はない。地形および炉の位置等より、本住居址の形状は等高線沿いに長軸を持つものと想定される。また東側前後のコーナーより四隅は隅丸といえる。南壁は崩落の影響をとどめたものか、不整形である。覆土は3層からなるものの自然埋没である。床は全面的に堅いが、貼り床ではなかった。壁は明確でほぼ垂直に立ち上がる。炉は調査区域外との境に1箇所あり、焼土が面的に検出されている。柱穴、周溝とも検出されていない。

出土遺物：覆土中より甕形土器・細頸壺口縁部・台付甕形土器などが出土する。このほか、太型蛤刃石斧の転用磨り石1点が南壁沿いの床直上より出土している。また、古墳時代の埴や平安時代の土器は検出面での採取で、縄文土器の出土は少量で、混入したもの判断した。

10号住居址 (SB10、グリッドI X-18-19) (第3-9図、図版13)

検出遺構：本址はB地区最北端部の緩斜面中位に位置する。重複関係は、本址にほぼ重なる様な状態で9号住居址に切られ、さらに1号住居址に切り込まれる。これら重複する住居址は、時代が下るにしたが



第3-9図 住居址平面およびセクション図(2)

って拡張され、床面は浅くなる傾向にある。したがって、完掘時には階段状の様相を呈する。このため本址の床面は最も良好に残存するものの、この床面上より検出された4箇所の柱穴が重複するなどの住居址のものかは不明と言わざるを得ない。炉は西側壁沿い付近とその周辺以外からも所々に見られたもののいずれの住居址に属するものか、また影響されたのか若干疑問が残される。なお、覆土は本址埋没後、上層を切り込む2軒の住居址の影響が考えられるが、暗褐色土で1~2cm大の炭化物を含んでいた。

出土遺物：全体的に遺物は少量である。覆土中より太頸壺・甕形土器などが出土している。なお、本址の出土遺物として取り上げられた鉄製の刀子は9号住居址に属するものである。

11号住居址 (SB11、グリッドI D-19・20・24・25) (第3-10図、図版3)

検出遺構：本址はB地区南側の緩斜面中位に位置している。3号住居址と同様に農道部にかかるため最初西側部分を、農道の切り替え工事後東側部分を調査した。遺構の遺存状態は、耕作地造成に伴う石垣の設置によって破壊されていた。本住居址の南西壁(山側)の1辺は約5mを測るものの、それと直交する方向の規模は不明である。覆土は自然埋没による一層で、褐色土。床面は全面的に堅く拳大の礫が床面上に点在し炭化物も出土する。柱穴と思われるピットは5箇所に検出されるが、いずれにも柱痕は認められていない。周溝は南西側の壁沿いに検出された。壁はやや傾斜して立ち上がる。炉は中央やや西寄りに1箇所検出され、その周辺に焼土が若干散乱していた。

なお、南西壁面沿いの張り出しは、検出時に古墳時代に属する遺物の出土により本址と切り合う土坑としたが、結果として遺構との判断には至らず、本址への混入として処理している。

出土遺物：本址に伴う遺物は、細頸壺の口縁部、頸部、底部・甕形土器・有孔浅鉢形土器(甕)・蓋形土器等と幅広い。不明鉄製品(鉄板の破片)1点が本址の北側検出面から出土。このほか、縄文時代早期押型文土器・古墳・平安・近世の土器も出土しているが、いずれも少量で混入したものでか上層部や検出面付近での出土品と思われる。ほかに、検出面北側より混入品とした板状鉄製品が出土する。

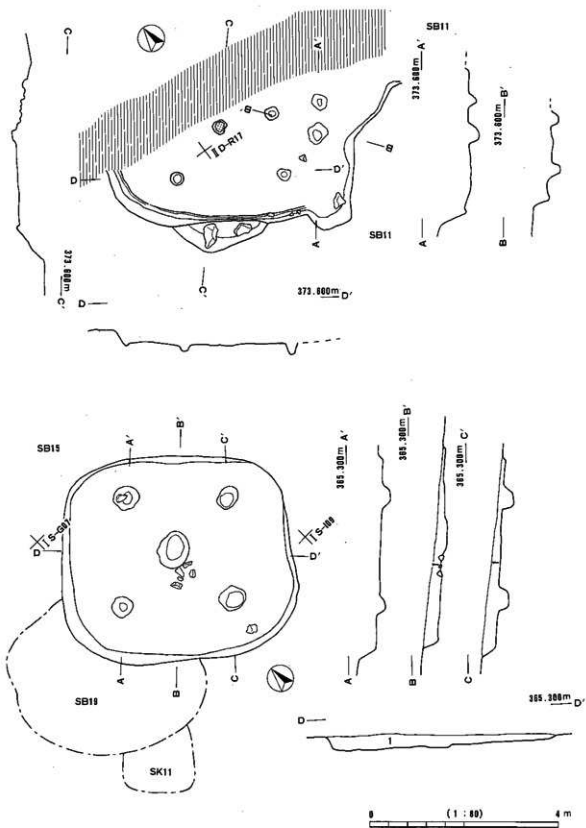
15号住居址 (SB15、グリッドI S-7・8・12) (第3-10図、図版3)

検出遺構：本址はA地区北側の緩斜面下部に位置している。約4.8×4.4mの隅丸方形の竪穴住居址で、その状況はほかの住居址と比較し良好といえる。重複関係は本址西側が19号住居址(弥生時代中期)を床面まで切り込んでいる状態にある。覆土は褐色(7.5YR)粘質土一層で、小角礫を多量に含む。自然埋没したものと思われる。床は全面的に堅いものの貼り床ではなかった。壁は東隅を除いて明確に検出され、谷側に向かってやや傾斜面を形成する。炉は床面上ほぼ中央に検出された。焼土を伴う浅い掘り込みから地床炉と判断される。ピットは4箇所から検出された。4本柱と解釈され、各々床面から20cm前後の深さを測るが、柱痕は認められない。周溝等の施設は検出されていない。

出土遺物：覆土中より細頸壺・太頸壺・甕形土器などが出土する。

18号住居址 (SB18、グリッドII E-16-17) (第3-11図、図版3, 14)

検出遺構：本址はB地区南東側の緩斜面中位に位置している。北側は17号住居址(平安時代)に切られ、また西側上層の1号集石址を切り、さらに後世の削平を受けている。覆土は暗褐色土一層で、拳大の礫を少量含んでいた。床面高は、17号住居址が絶対標高約370.3m、本址が370.4~370.5mで、この差の床面を切り込まれていることが分かる。本址の形態は、残存部分から約5.4×3.5mの楕円形の竪穴住居址であると判断した。床は貼り床ではないものの全面的に堅い。壁は東西壁についてはほぼ垂直に、南壁はやや緩やかに立ち上がる。南壁外側の削り込みは、壁の崩れと判断した。炉は検出されていない。ピットは2



第3-10図 住居址平面およびセクション図(3)

偶検出された。西壁近くのP3は30×20cmの楕円形であり、柱痕が検出されたため柱穴であると解釈した。南壁側のP4はP3より規模の大きな三角形を呈している。性格は不明である。周溝は南西隅と南東隅の壁側から検出された。

出土遺物：覆土中からも床面上からも出土遺物の量は多い。床面直上から台付注口土器が出土している。ほかに細頸壺・甕形土器・有孔浅鉢形土器（甗）・蓋形土器などがある。黒曜石製品一点は混入品であろう。

19号住居址 (SB19、グリッド I S-7・12) (第3-11図、図版3)

検出遺構：本址はA地区北側の緩斜面下部に位置している。南壁側では11号土坑を切り込み、東側は15号住居址(弥生時代中期)によって四分の一ほど切り込まれている。しかし、残存部より全体的な形状の復元は可能で、長軸が約4m、短軸が約3.2mの楕円形の竪穴住居址であることが想定される。また、覆土は自然埋没で黒褐色(7.5YR3/1)粘質土であり、床面直上には炭化物が層をなして集中しており、焼失家屋の可能性が持たれる。床面直上の炭の塊は放射状をなしており、屋根の垂木材を思わせる状態が見られたものの、上屋に係る建築部材で形状を留めたものは皆無であった。後世の乾湿の繰り返しが少ないから影響をおよぼしているかもしれない。この炭化物が層を成しており、これを剥ぐと床面が検出された。床は全面的に堅く、貼り床ではなかった。壁は明確でほぼ垂直に立ち上がる。炉は、検出されないが、15号住居址に切り込まれた可能性がある。柱穴は認められていない。このほか周溝等の施設も存在していない。

出土遺物：出土土器が比較的少量の点は焼失家屋に起因するものであろうか。主に細頸壺の口縁部や胴部を少量とその底部が出土している。その他、縄文時代早期楕円型土器片も出土しているが混入したものと解釈した。

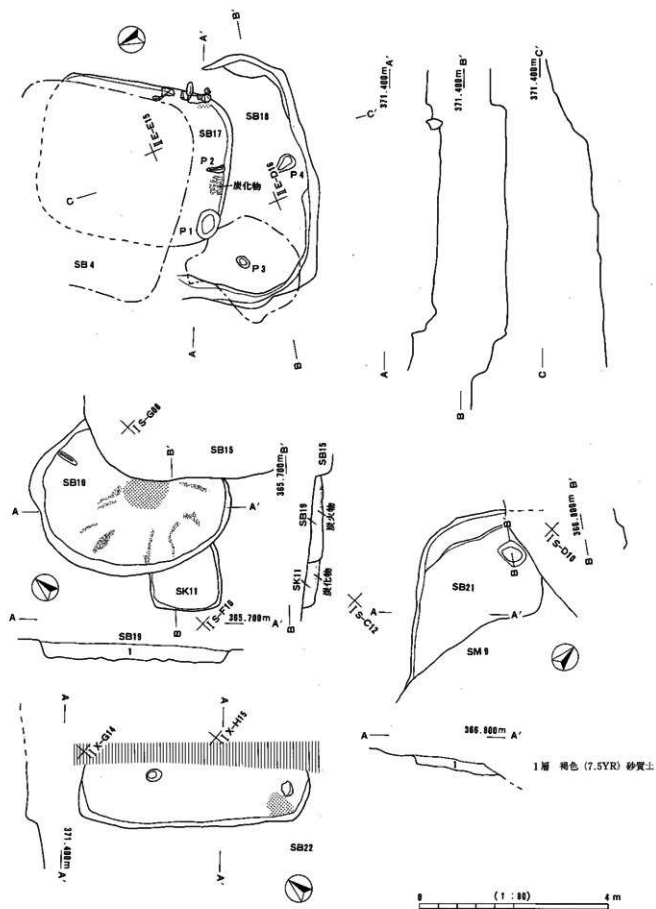
21号住居址 (SB21、グリッド I S-11) (第3-11図、図版4)

検出遺構：本址はA地区北側の緩斜面下部に位置している。東側は9号集石址の掘り方に切られ、北側は大半が削平されている。このため本址の形状や規模などは不明である。覆土は一層、褐色砂質土で自然埋没している。床は全面的に堅い。炉、溝とも確認されていない。壁はほぼ垂直に立ち上がっていた。楕円形のピットが1個検出されたが柱痕はない。住居址内北側の壁沿いにいわゆる「テラス状」施設が見られた。

出土遺物：本址に属するものは細頸壺・甕形土器が出土している。石製品では磨製石庖丁片1点と土製紡錘車片1点が出土している。その他、縄文時代晩期水式土器および平安時代の土器が検出面付近などから少量出土しており、混入と思われる。

22号住居址 (SB22、グリッド I X-17) (第3-11図、図版4)

検出遺構：本址はB地区北端部の緩斜面中位に位置している。重複関係にはない。北東側は削平されており、残存部は半分にも満たないものと思われる。残存する一辺が約4.8mを測り、これと直交する辺は不明である。覆土は南西側壁沿いに留まるのみであるが小礫混じりの暗褐色土一層で、自然埋没と思われる。床面には貼り床は施されておらず、黄褐色土で3~5cmの小礫が多く、谷側(北側)には拳大の礫が多かった。石質は石英斑岩や泥岩であった。壁は残存部分よりほぼ垂直に立ち上がっていた。本址の南隅床面上から硬化していない焼土と人頭大の礫等が認められたが、炉ではない。柱穴と思われる楕円形のピット(床面からの深さは23cm)が1個検出されたが、柱痕はない。ほかに柱穴は検出されていない。また、



第3-11図 住居址平面およびセクション図(4)

炉も周溝も認められていない。

出土遺物：壺形土器や甕形土器、「コの字」重ね文胴部片が出土している。全体として遺物量は少なかった。

25号住居址 (SB25、グリッドIID-15, IIE-11) (第3-12図, 図版4)

検出遺構：本址はB地区の中央東寄りの緩斜面中位に位置する。切り合い関係はないが谷側は削平されている。南側(山側)の残存状況より、南北方向に長軸を取り西側にいわゆるテラス面を持つ楕円形の竪穴住居址と推定される。覆土は暗褐色土一層で、拳大の礫がやや多く含まれていた。床は全面的に堅いが、貼り床ではない。壁は南側において明瞭ではほぼ垂直に立ち上がっていた。西側のテラス面は、床面より10cmほど高く設けられていた。炉は検出されていない。ピットは9基検出されている。直径20~58cmの円形もしくは楕円形で、床面からの深さが5cmのP6以外は17~32cmの深さがあった。これらのピットに規則性は認められなかった。P2・P3・P8の周辺には炭化物が点在していた。柱穴はP2・P8と思われる。特にP8は検出面より30cmほど深く、この南側に位置するP9も同性格で付随する可能性がある。北側削平箇所からは、これらの柱穴に対応するピットは検出されていない。テラス面上のピットP1は、住居址床面上の柱穴とは性格が異なる(参考値：P1・P2・P3・P4・P5・P7・P8・P9の深さは、30・22・25・20・18・17・30・32cm)。このほか、周溝は南東隅の壁沿いにわずかに見られた。なお、本址の北西側に位置する3号住居址との間にピットが6基検出されている。平面形状や検出面からの深さが2~20cmと規則性はなく、性格は不明である。

出土遺物：出土土器の量は多い方である。主に細頸壺の口縁部や甕形土器の口縁部などが出土する。

26号住居址 (SB26、グリッドIID-6・II-12) (第3-12図, 図版4)

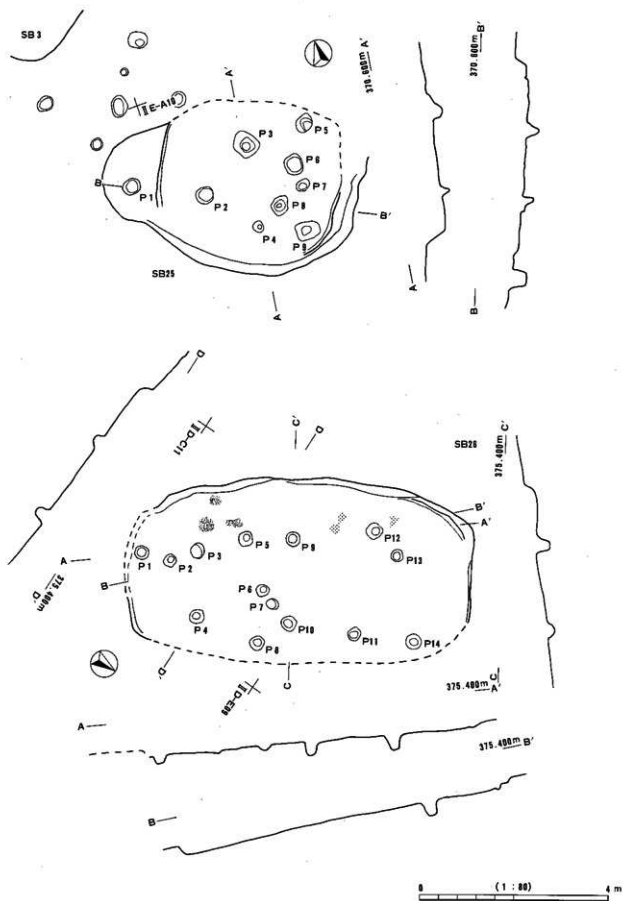
検出遺構：本址はB地区の中央西寄りの緩斜面中位に位置する。本址の北東部(谷側)は、削平されている。残存部分より約7.3×3.9mの規模の隅丸長方形の竪穴住居址であると推定される。重複関係はない。覆土は暗褐色土一層で覆土中に炭化物を多く含むところもあった。拳大の礫が北西隅近くの床面上から多く出土している。壁面は山側(南西部分)は明瞭で、緩やかに立ち上がる。床は貼り床ではない。床面は谷側に向かって緩やかに傾斜する。谷側の段台盛土の流失によるものか。炉は住居址内中央付近にはなく、北西隅の壁近くで焼土の広がりを見出している。また、床面直上の所々に焼土や炭化物が検出され炭化した建築部材らしき痕跡が認められる。ピットは14基検出される。山側壁沿いに並ぶP1・P2・P3・P5・P9・P12とそれに対応する谷側のP4・P10・P11・P14の列を想定されようがその平面形状は不整形となり、また柱痕が認められたピットはなく推定の域を出ない。ピットの平面形状はいずれも円形で規模は直径22~32cmを測る。(参考値：ピット、P1・P2・P3・P4・P5・P6・P7・P8・P9・P10・P12・P13・P14は、床面から18・7・8・36・15・24・30・54・28・46・32・32・62cmの深さを測る)周溝は北西隅の壁際に見られた。

出土遺物：出土土器は全般的に脆く、遺存状態は悪い。主な土器は、細頸壺の底部・甕形土器胴部・「コの字」重ね文土器片・小型土器などである。その他、縄文時代中期中葉深鉢口縁部は混入によるもの、また平安時代の土器・近世陶器の出土は耕作土に伴う攪乱によるものと判断した。

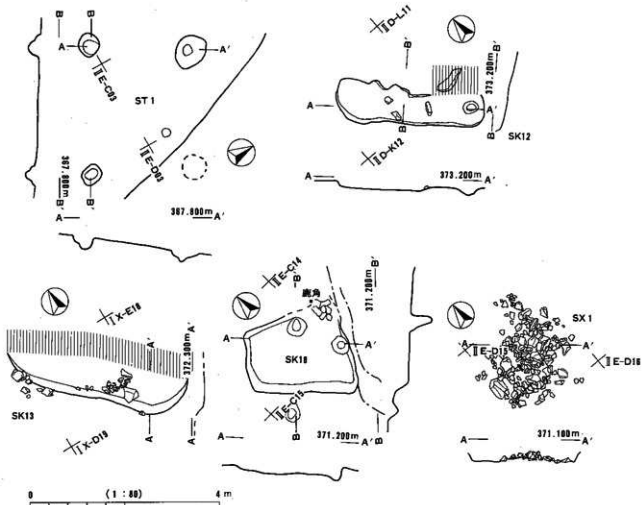
(2) 掘立柱建物址

1号掘立柱建物址 (ST1、グリッドIIE-1) (第3-13図, 図版4)

検出遺構：本址はB地区北東端に位置している。4本柱で構成する最小単位の間一間の掘立柱建物址



第3-12図 住居址平面およびセクション図(5)



第3-13図 独立柱遺物・土坑・集石址実測図

である。主軸は北西方向、長軸は約2.8m、短軸は約2mを測る。一角を成す柱穴は調査区域外に位置していると想定される。確認された3つのピットは検出面からP1が24cm、P2が28cm、P3が24cmの深さを持つ。柱痕はそのどれからも認められない。なお、本址の輪郭を構成する主要ピット以外に内側よりP5が検出されている。このピットは検出面からの深さが6cmと浅く、主要ピットとは異なる補助的な性格も持たれようが、本址との関係は不明である。柱穴の規模および平面形態からと隣接遺構より弥生時代中期の遺構と推定した。また本址に近接する住居址(5号・3号・25号)は弥生時代中期に属するため、本址も同時期とした。

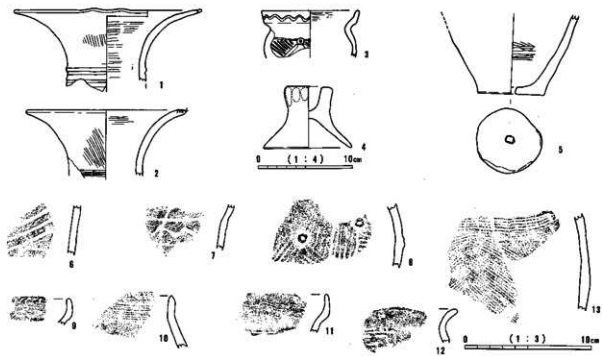
出土遺物：遺物は認められていない。

(3) 土坑

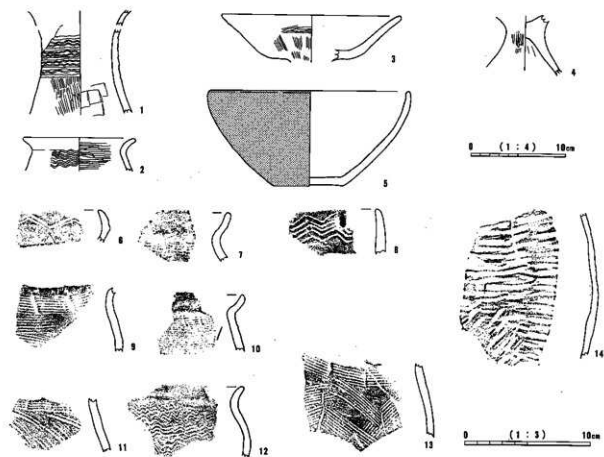
11号土坑 (SK11、グリッド I S-12) (第3-11図、図版5)

検出遺構：本址はA地区北部側の緩斜面末端部近くに位置する。北側は19号住居址(弥生時代)により切られているため、正確な形状は不明である。現状寸法は1.5×1.4mで、隅丸方形あるいは南北に長軸を持つ長方形の平面形を呈すると思われる。底面は西から東方向へ緩やかに傾斜面を持ち、この緩斜面面上には炭化物が一面に広がっていた。

出土遺物：遺物量は極めて少量であり、どれも摩耗が甚だしかった。弥生土器片が数点出土している。



第3-14图 2号住居址出土土器实测·拓影图



第3-15图 3号住居址出土土器实测·拓影图

12号土坑 (SK12、グリッドIID-13) (第3-13図、図版5)

検出遺構：本址はB地区中央やや南寄りの緩斜面中位に位置する。重複関係にはない。遺構は北東側(谷側)が削平されており、正確な形状は不明である。現状寸法は約3.1×0.8mで等高線に沿った細長い落ち込みを呈する。覆土は暗褐色土で、底面上から拳大の礫が数点出土している。底面は安定しておらず、南東隅に約32×25cmの規模の楕円形のピット1基が検出されている。底面からの深さは10cmほどであった。

出土遺物：出土量は極めて少ない。弥生式土器片を認めるものの摩耗が甚だしい。

13号土坑 (SK13、グリッドIX-21・22) (第3-13図、図版5)

検出遺構：本址はB地区北西部の緩斜面中位に位置し、南西側(山側)には5号墳が隣接している。本址の北東側(谷側)は後世の削平を受け、正確な形状は不明である。現状で約3.8×0.9mの細長い平面形を呈する。底部面は平坦であり、竪穴住居址が想定されるが残存率が極めて低いため土坑として処理している。覆土は小礫混じりの黒色土一層で、炭化物若干と土器片が含まれていた。なお、本址の底面が途切れる北東側には小礫が面的に広く散在していた。

出土遺物：出土量は極めて少ない。甕口縁部の小片が数点摩耗した状態で出土している。

18号土坑 (SK18、グリッドIIE-16) (第3-13図、図版5)

検出遺構：本址はB地区東側に位置し、南東側に18号住居址(弥生時代)が隣接する。平面形状は台形状で、北東部の一部は削平されている。底部はほぼ平坦面で焼土や炭化物は検出されていない。この底面上にはピットが2つある。この内、南東側壁沿いにかかるものは西側に隣接する土坑との関連が考えられるが結論には至らない。覆土は暗褐色土で、拳大の礫を少量含む。

出土遺物：弥生式土器片が少量出土している。その他、東隅の礫付近から鹿の角が出土している点は特筆される。

(4) その他の遺構**1号集石址 (SX1、グリッドIIE-16) (第3-13図、図版5)**

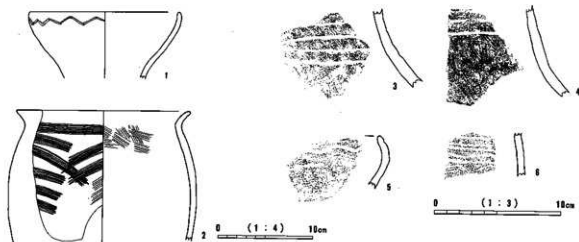
検出遺構：本址はB地区の東側の緩斜面の中位に位置している。18号住居址(弥生時代)の西壁を切り込む重複関係にある。遺構内には5cm角から人頭大の角礫が200点以上集められ、人為的な集石と思われるが、その意図したところは不明である。なお、この礫を取り除いた直下の重複箇所より18号住居址の床面が露出した。

出土遺物：礫の隙間から櫛掻文の甕の破片が出土している。ほかに、壺・高杯の破片も出土している。

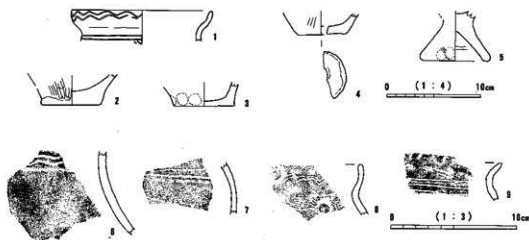
2 遺物**(1) 土器 (第3-14~29図、図版16~18)**

この地が集落として最初に営まれるのは、住居址(本項内、以下「住」とする)等からの出土遺物より弥生時代中期である。出土土器は主に弥生時代中期後半に位置付けられ、器種は、壺形土器・甕形土器・台付甕形土器・蓋形土器・浅鉢形土器・有孔浅鉢形土器・高杯形土器とその他に大別される¹⁾。

壺形土器：この土器の器形には細頸形・太頸形の壺がある。細頸形の口縁部は朝顔状に開くものと内湾せず直線的に開くものや受口状のものがある。朝顔状口縁部を持つものは2号住1・2で、文様は上頸部



第3-16図 4号住居址出土土器実測・拓影図

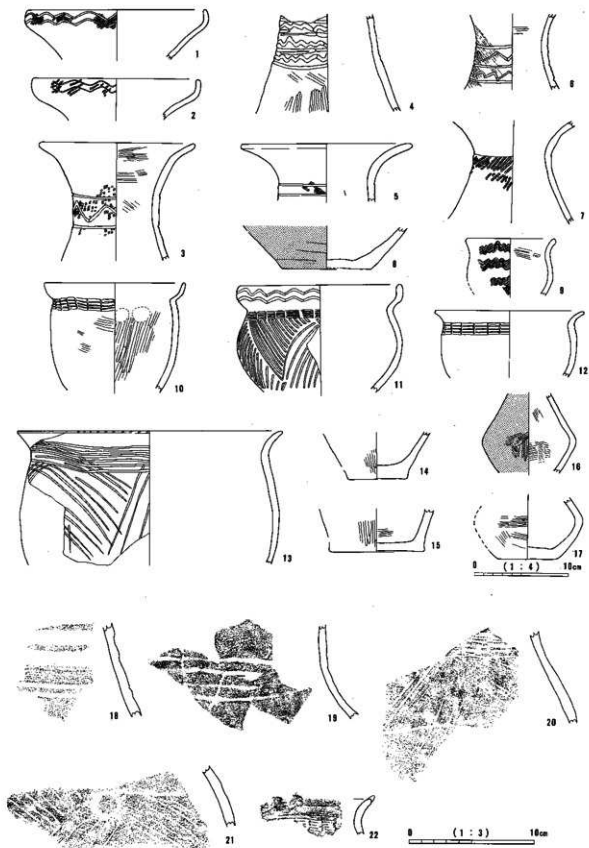


第3-17図 5号住居址出土土器実測・拓影図

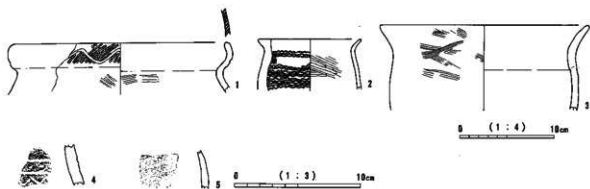
に沈線と簾状文の2種類である。7号住3は頸部に縄文を地文として沈線と山形文を付加する。7号住5のものは縄文を地文として沈線を施す。21号住1は口縁部より底部まで一括して回転復元可能で、このため器形の全容はこの遺跡で唯一明らかである。胴部の最大径部は胴部上下を区分することがそれほど明確ではないものである。この張り出しは頸部からの胴部にかけて緩やかな反りを見せているタイプである。ただ文様は胴部に見られず、頸部中心に施されるのみである。

内湾せず直線的に開くタイプは15号住1で頸部に縄文を地文として沈線を入れる。また、1号溝址1は沈線で緩やかな曲線の横線文、器形は口縁部の開きが少ない特徴がある。ほかに18号住11・12の小型の細頸壺が含まれるかもしれない。

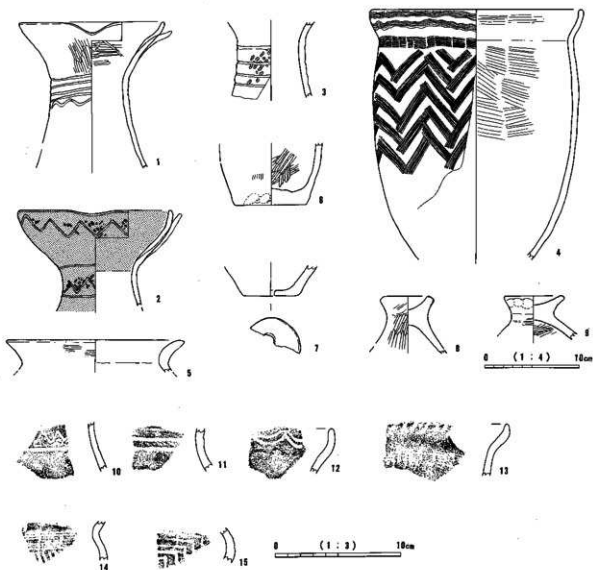
受口状口縁部を持つものは7号住1・2である。4号住1は口縁部が受口状に分類されるが、内湾の表現が適切であると思われる器形である。ただ、全体の形態を知ることはできない。また、受口状の口縁部に液体の注口を一箇所に持つ片口形土器がある。この片口形土器は、11号住2では口縁部に縄文を地文として山形沈線文を、頸部に縄文を地文とし山形沈線文、同じく1は内湾が弱く頸部のみ沈線文を施文するタイプである。ともに同住居址のもので、受口状口縁となるが、口縁部から頸部にかけての膨らみに相違がある。



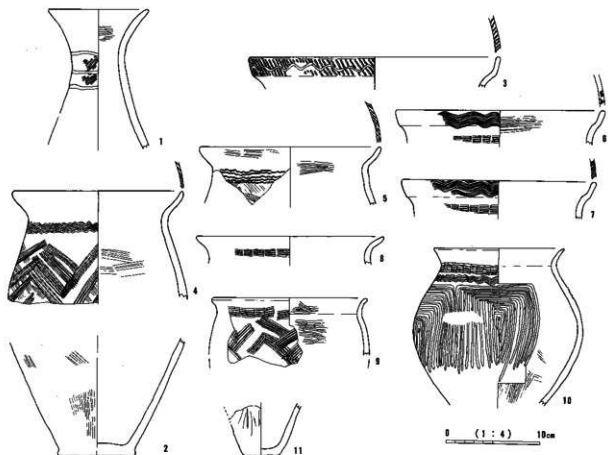
第3-18図 7号住居址出土土器実測・拓影図



第3-19图 10号住居址出土土器实测·拓影图



第3-20图 11号住居址出土土器实测·拓影图



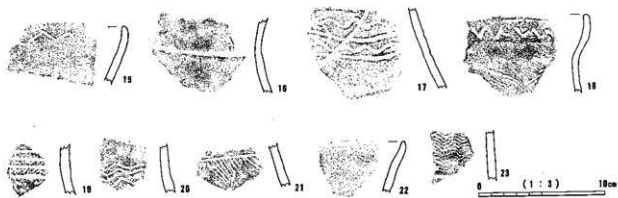
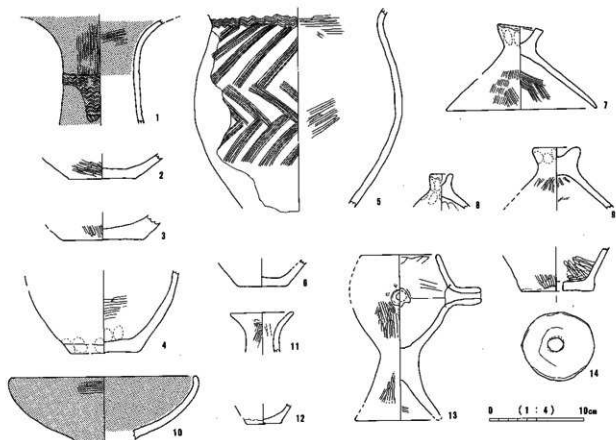
第3-21図 15号住居址出土土器実測図

このほか口縁部が明らかでない3号住1と7号住4・6の頸部には沈線波状文。7号住7と18号住1は頸部文様帯上に段を持ち区分している。7号住7は縄文を地文とするのみだが、18号住1は沈線による波状文の下部に横線文、斜線文を施文する。24号住1も頸部のみで、縄文を地文として沈線に横線文が施される。

なお、細頸壺の底部としては7号住8、15号住2、18号住2・3、19号住1、21号住1・5、22号住1、25号住1、26号住1などがある。この内21号住の1は口縁部から底部まで器形の全容が明らかである。

太頸壺は前述の細頸壺に対し頸部が幅広となり胴部からの立ち上がりにはアクセントを付け口縁部を形作っている。口縁部には受口状とそれ以外の外へ開くタイプがある。また太頸壺と甕の区分には器形のほか文様体、調整、胎土等による。10号住1は受口状の口縁部に縄文を地文として沈線波状文を施す。1号溝址2は受口状の口縁部に無文で頸部に簾状文を施す。15号住3は口縁部が外側へ開き同様の文様体が施されるが、さらに口唇部に縄文を付ける。このほか7号住10は12と比較し、甕の器形であると思われるが文様体の構成要素と磨きによる調整、さらに胎土から太頸壺に分類した。

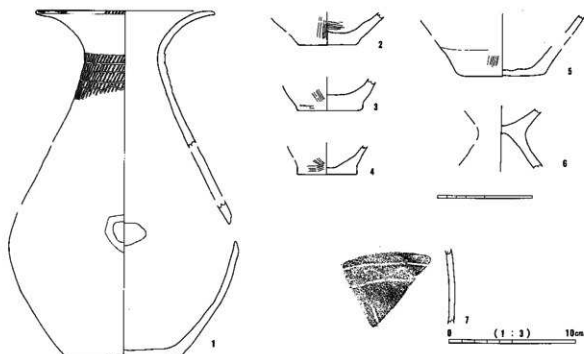
甕形土器：口縁部によりやや受口状に内湾するものと素直に外側へ開くものがある。7号住の13は外側へ開くタイプとしては最大径を持ち、文様体は非常に粗雑である。25号住3と同様に口唇部が刻目となる。基本的な文様体は4号住2と1号溝址4の頸部に簾状文で胴部に羽状文や口縁部が欠けるが18号住5の頸部に櫛描波状文、胴部にまばらの櫛描羽状文の2種がある。このほか、1号溝址3は全体に占める口縁部の割合が大きい。小型化が原因であろうか。やや受口状のものは11号住4、15号住4・5・6・7、22号住3と25号住2のタイプに見られる。11号住4は底部を除く胴部の器形が明らかとなる。口縁部に櫛描波



第3-22图 18号住居址出土土器尖測・拓影圖



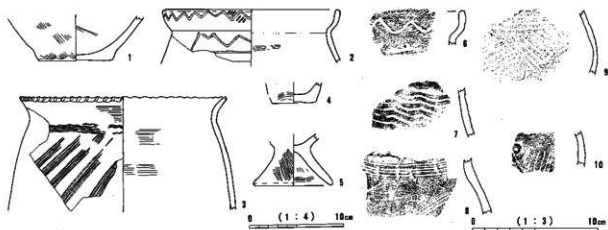
第3-23图 19号住居址出土土器尖測・拓影圖



第3-24図 21号住居址出土土器実測・拓影図



第3-25図 22号住居址出土土器実測・拓影図



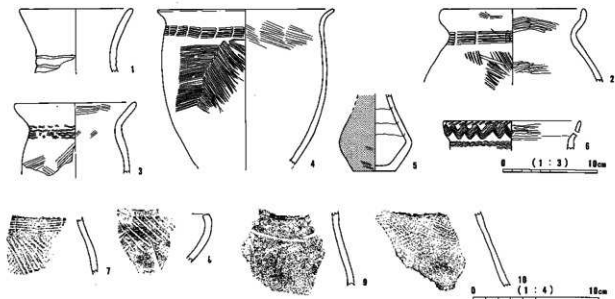
第3-26図 25号住居址出土土器実測・拓影図



第3-27図 26号住居址出土土器実測・拓影図



第3-28図 土坑出土土器実測・拓影図



第3-29図 1号溝址出土弥生時代土器実測・拓影図

状文。頸部に簾状文。胴部に櫛描羽状文が施文されている。15号住4・5は口縁部は無文で、頸部に波状文、胴部に櫛描羽状文の文様体となる。25号住2は口縁部に縄文を地文として、沈線山形文、胴部には不規則な山形文が付く。15号住居址の10は胴部に「コの字」重文が施される。

1号溝址では口縁部は受口状とそうでないタイプの2種に分けられる。ともに口縁部に文様はない。頸部の位置に簾状文、胴部に櫛描羽状文を密に施文する。

台付甕形土器：いずれも口縁部から胴部までをとどめるものの、底部以下不明のため台付甕形に相当する器形として推定したものを取り上げている。2号住3は口縁部に沈線の波状文で胴部に三角形のモチーフで文様体を構成する。7号住出土の11は頸部に簾状文が施され胴部に三角形モチーフの構成はやや大きくなる。1号溝址6は口縁部に縄文を地文にして櫛描波状文。なお、5号住5は台付甕形土器の脚台部と思われる。

壺形土器：2号住4と11号住8、16号土坑1は割と肉厚の楕部に對し下部の笠状の開きが少ないタイプ

である。2号住4はその全容のほぼ半分を摘部が占める。これに対して18号住7はその全容から摘部に對して笠状の開きが大半を占めている。このタイプはほかに18号住9と11号住9がある。11号住9は摘部の返りが広く、笠状の開きが大きくなる。摘部に指頭圧痕が残る。このほか、18号住8は小型蓋となる。

浅鉢形土器：3号住5は口縁部が内湾し無文で赤色塗彩を施している。このほかに浅鉢形土器は認められていない。

有孔浅鉢形土器（飯）：2号住5・5号住4・11号住7・18号住14・17号土坑1が見られる。いずれも底部のみであり、その全容は不明である。

高坏形土器：3号住3は坏部のみ、4は脚部のみ。この脚部は裾部まで山形に広がるタイプで、このほか21号住6に見られる。

その他の器種：18号住13の器形は台付注口土器としその用途は実用性に欠けるもので興味深い。26号住3は小型土器で無文で粗雑な作り。用途は不明。7号住16・1号溝址5は小型壺で外面に赤色塗彩とする。

遺構外土器（第3-30～32図、図版17）

大穴遺跡調査区域内で出土した弥生時代の土器の内、遺構に伴わない土器がある。以下に遺構外遺物として処理した土器を記す。

23号住1は、細頸壺の底部。3号墳からは、小型細頸壺1・2の2点。双方頸部のみ文様を施し、1は朝顔状口縁部で外面に赤色塗彩を胴部に付けるタイプで、沈線を横線文とする。2は赤色塗彩を施さず、簾状の文様を施文する。5号墳1は、台付甕形土器で胴部に「コ」字重文を、頸部の位置に波状文を施文する。6号墳1は細頸壺で、口縁部に舌状の突起を付ける。文様は頸部に沈線を横線文で、列点状文をほぼ一列に施している。外面赤色塗彩とする。

(2) 石製品・土製品（第3-33図、図版18）

石製（土製）品には農具・工具・紡織具が認められており、その詳細を以下に示す。なお、石質鑑定は光学顕微鏡および肉眼により観察し判断したものである。

農具

磨製石庖丁：3号と11号住居址のほぼ中間地点の基本土層Ⅲ層上面より出土したものは、一方の紐孔より先端部にかけて約三分の一ほど欠ける。双方の紐孔中心を結びその中心点より全長11cmと推定され、直行する最大幅は3.4cmと狭い。また21号住居址覆土内より出土したものは、両先端部が欠けた状態でその全容は不明である。最大幅は5.2cmを測る。双方の磨製石庖丁は石質が凝灰岩で、「刃部直線式でその全体の形状は直線刃半月型態」に分類される。千曲川流域の磨製石庖丁の変遷からすれば弥生時代初頭～後期前半にかかるまで使用されているタイプである。この直線刃部接触部における使用痕については、金属顕微鏡による使用痕分析が可能と思われるが、穀物光沢の発達の場合は判断できていない。

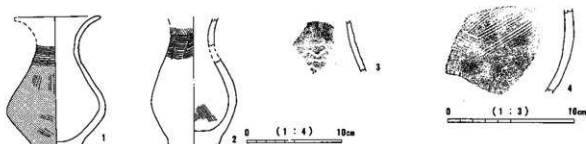
工具

大型蛤刃石斧の転用磨り石：7号住居址および19号住居址周辺より出土したものは、大型蛤刃石斧を磨り石に転用としたものである。7号住居址出土のものは全長8.6cm、最大幅5.7cmで、切断面の両面とも磨られているが、19号住居址のものは全長5.7cm、最大幅7.2cmで片面のみ、他片面は大きく欠けその全容はわからない。この双方の磨り石の石質は、斑岩である。

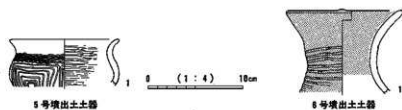
中型磨製石斧の転用磨り石：5号墳築道側壁の隙間より出土している。切断面の両面とも磨られており磨り石へ転用している。石斧としては中型品であり、特に名称は付加されていないタイプである。この中型磨製石斧の石質は斑岩で、その用途は不明である。全長10cm、最大幅7.6cm、厚さ2.3cmを測る。上



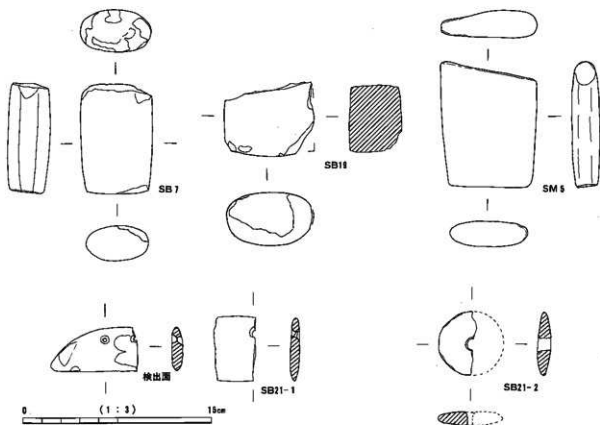
第3-30図 23号住居址出土土器実測図



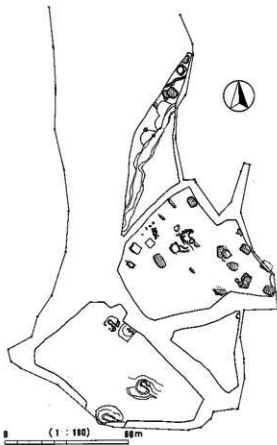
第3-31図 3号墳出土弥生時代土器実測・拓影図



第3-32図 5・6号墳出土弥生時代土器実測図



第3-33図 弥生時代の石製品と土製品実測図



第3-34図 弥生時代遺構分布図（網掛け遺構）

上記は、いずれも弥生時代中期に属する石製品あるいは土製品と判断している。

3 小 結

本集落は有明山の崖面の緩斜面に立地し、標高375m以上では遺構は検出されていない。竪穴住居址15軒の分布状況は、B地区（緩斜面中部）の東半分には8軒、A地区（緩斜面下部）の北端部に4軒が集中し、3軒はB地区の中程に点在する。どの住居址もおおむね等高線沿い（北西—南東方向）に長軸を持ち、その平面形状は隅丸長方形もしくは隅丸方形を呈し、楕円形状の住居址は3軒存在する。住居の規模は長軸が7.3mの26号住居址が最大と思われ、最小は19号住居址の4×3.2mであった。重複関係より2時期は認められる。テラス状の段状面を持つ住居址は2例あり、焼失家屋の可能性が持たれる住居址は2軒を認めた。

覆土はA地区とB地区では違いが見られた。B地区の住居址は1例（11号住居址・褐色土）を除いてすべてが暗褐色土一層であった。一方、A地区の住居址の場合は褐色粘質土・黒褐色粘質土・褐色砂質土ときまぎまで、7号住居址は上層から黒褐色粘質土、暗赤褐色土、黒褐色土の3層であった。

炉跡が検出できた住居址は5軒。炉は住居の中央もしくは中央やや西寄りに位置していた。地床炉と断定できたのは2例であった。ほかに、床面上から焼土や炭化物がわずかな検出から炉の存在が推定された例も3例あった。これらは、後世の削平が大きく影響していると思われる。

周溝が検出された例は4例であった。完全なものは一つもなく、部分的に存在しただけであった。柱穴は三分の二の遺構で確認できた。中には貯蔵穴の可能性を思わせる大きなピットを持つ5号住居址もあった。柱痕が確認できた例は18号住居址のみであった。

記転用磨り石同様に磨面は縦軸に対して垂直に保つ。

大型蛤刃石斧は縦斧の伐採石斧とされ、石槌は叩きあるいはつおす道具である。本遺跡内で出土したものは、その規格性のない形状より2点とも本来の目的から磨り面を持つ石へ転用したものとと思われる。なお、中型磨製石斧も磨り面を持つ石として転用していることにより当初から石槌との解釈は取らない。これらの石斧はいずれも転用品とされることから、石斧から鉄斧への移行期の産物との解釈もできようが、鉄斧の出土を見ないためそのような結論には達していない。このほか、工具としての扁平片刃石斧などは出土していない。

紡織具

紡錘車：21号住居址覆土内より出土した紡錘車は土器破片の転用ではない土製品である。形状は円板形のもが半欠け状態となっている。この紡錘車（紡輪）は中心に糸を巻く軸（紡莖）をはめ込む孔があく。最大径は5.1cmを測る。この軸は出土していない。

第3章 大穴遺跡

弥生時代の竪穴住居址以外の遺構は、掘立柱建物址が1棟、土坑が4基、集石址が1基であった。1号掘立柱建物址はB地区東半分に検出された8軒の竪穴住居址より低い位置に存在した。この掘立柱建物址が集落の中央に位置するものと推定すれば調査区域外に集落が広がることになる。なお、1号集石址の用途は不明と言わざるを得ない。

周辺遺跡との係わりでは、屋代清水遺跡は本遺跡に近接しており平地に立地する弥生時代中期の集落である。集落密度の高い塩崎遺跡群は自然堤防上に立地している。長野市篠ノ井下石川の湯の入上遺跡は山頂に弥生時代中期の住居址が検出されたむしろ珍しい例である。いずれにせよ、この扇状地に立地する集落にとって緩斜面上を流れる沢の水と眼下の後背湿地は集落成立の第一条件であったことは想像に難くない¹⁴⁾。

註

- (1) 文様は施文原体による基本を下記文献を参考として表現している。
飯田市教育委員会 1986 『恒川遺跡群』遺物編
- (2) 長野県埋蔵文化財センター 1991 『長野県埋蔵文化財センター年報8』p.41、43

主要参考文献

- 長野県埋蔵文化財センター 1994 『栗林遺跡・七瀬遺跡』発掘調査報告書19
酒井龍一 1985 『磨製石庖丁』『弥生文化の研究』5 道具と技術I 雄山閣出版

第5節 古墳時代～奈良時代の遺構と遺物

1 集落域

(1) 遺構

14号溝址 (SB14、グリッド I S-2・3・7・8) (第3-35図, 図版5)

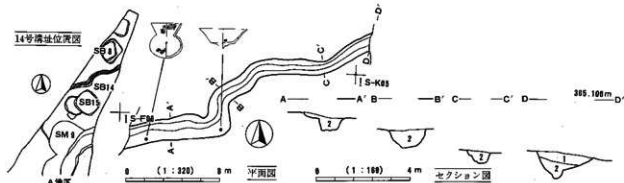
検出遺構：本址はA地区最北端側に位置している。西側調査区域外との境にトレンチを設定し下層を掘った結果、傾斜地を段状に切り開いた住居址とそれに切られた溝の存在を想定した。しかし、全面発掘調査によりこの平坦面は溝のための造成とわかった。溝は全体的に蛇行しており、部分的には直角に近く折れ曲がる箇所があり、その断面形は上端が幅広くV字形を持ち、調査区を西から東へ延びる。このためその全容は不明である。

出土遺物：出土土器内容は、高坏の全体に占める割合が高い。この高坏は5世紀第3四半期から第4四半期に属すると考えられる。このほか、溝の上端縁より大型の埴の完形品が出土している。この埴は胴部1箇所二次的な穿孔があり、祿の代用と思われる。

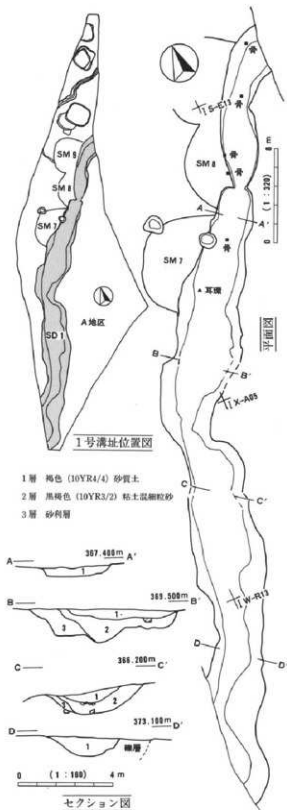
1号溝址 (SD1、グリッド I S-12-16-17-21-22, IW-5・10-15-19-20-24-25, IX-1, II C-4) (第3-36図, 図版1-5)

検出遺構：本址はA地区の最北端より西側の調査区境に沿うように延び、両端が調査区域外へ抜ける。このためその全容は不明である。検出された全長は64m、幅は最大で約6m、最小で約1mで、検出面からの深さは0.4～1.4mを測る。覆土は所により砂利が層を成し、分層は比較的容易にできた。重複関係は、隣接して並ぶ7号・8号・9号集石址の廃絶時期にその東側を本址が横断するようにして切り込む。また2号・3号土坑は、中世以降に属する遺構であり、本址と8号集石址を切り込む状態にある。この溝址は形状も7号から8号集石址にかかる所で収束する変化を示し、9号集石址を過ぎた地点で東側に急に折れ曲がる。

出土遺物：土器については本址が溝という性格上、重複する集石址群に属する土器の破片が混入している可能性があり、このため出土位置と区分がはっきりとしたものを資料とする。覆土初層からの出土量は少ないものの須恵器坏・甕・内黒土器や灰釉陶器の破片が見られる。このほか、下層部においては弥生式土器が内容量としては比較的多いものの須恵器坏や甕破片も若干含まれているためこれらの弥生式土器は混入と思われる。が、弥生時代以前から平安時代まで形態を変化させながらも継続していた可能性は捨てきれない。その場合、7号・8号・9号集石址の構築に伴いその様相を大きく変化させたことになる。し



第3-35図 14号溝址実測図



第3-36図 1号溝址実測図



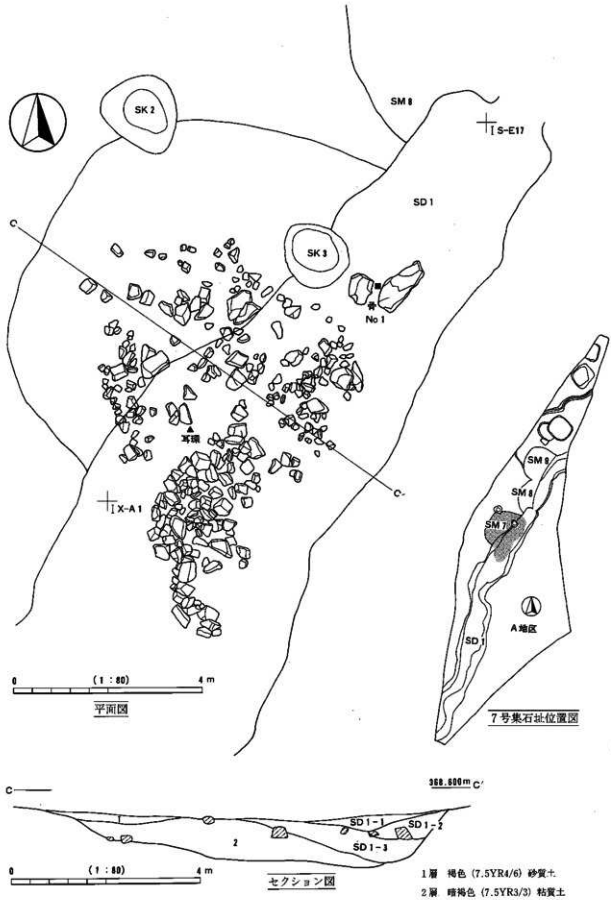
調査中の1号溝址

たがって、尾根沿いの沢から流入したものが含まれている可能性は無視できない。土器以外には用途不明の鉄製品が2点出土している。この内1点は板状のもので、1点は砂利を多く含む鉄滓である。このほか、骸骨としてウマの骨が7号・8号・9号集石址より出土している。なお、これらはいずれも本溝址の取り上げ番号が付される。混入品として縄文時代早期の楕円押型文土器と磨製石斧が出土している。

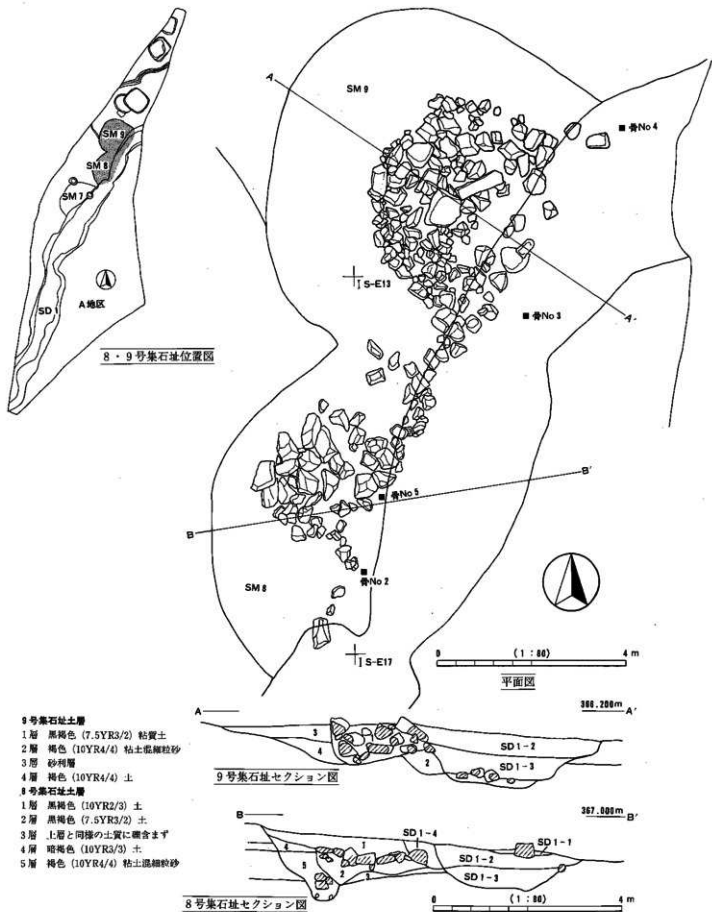
7号集石址 (SM 7、グリッド I R-25, I S-21) (第3-37図、図版6)

検出遺構：本址はA地区最北端側に位置している。重複関係は、東側の1号溝址の覆土堆積状況により北側に位置する8号・9号集石址と同様に1号溝址に切り込まれる状態を示す。さらにその後、2号・3号土坑により北側を切り込まれている。集石の状態は東西方向に長軸を持つ楕円形状を呈するままとりその南側を一塊としたように読み取れる。しかし後者の方は完全に1号溝址の中に納まる。

出土遺物：土器は楕円形状に並ぶ礫の内側より出土している。さらにこの下部層巨礫直下より内黒の高坏が出土した。このほかに底面寛削りの須恵器坏Aと坏蓋の破片、横瓶の胴部破片、長頸瓶の頸部片、四耳壺の破片が礫と礫の隙間より出土している。なお、摩耗する弥生式土器破片については8号・9号集石址と同様に1号溝址より混入品として処理している。出土獣骨はウマで、中央北寄りの1号溝址側の1箇所より確認されている。特筆される遺物として銅製の耳環が1点、集石中央付近より出土している。この耳環には一



第3-37図 7号集石址実測図



第3-36図 8・9号集石址実測図



1号溝址・8号集石址セクション



8号集石址セクション

部鍍金が残っていた。

8号集石址 (SM8、グリッドI S-16-17-21) (第3-38図, 図版6)

検出遺構：本址はA地区最北端側に位置している。重複関係は、7号集石址と同様に東側に重複して位置する1号溝址の覆土堆積状況により1号溝址に切り込まれた状態を示す。また、本址構築時に設けた掘り方は、その堆積土より9号集石址と同時期と考えられ、さらに8号と9号集石址の間を連絡するような礎の並びが窺える。このため双方は一連を成す可能性がある。

出土遺物：土器は、底面糸切りの須恵器環Aの完形品が巨礫群を取り除いた直下より出土している。このことより本址および9号集石の構築年代はこの土器の属する時代と推定される。また巨礫間の隙間より須恵器環蓋と須恵器甕の破片が1点ずつ出土しているためさらに特定されることになる。なお、本集石址と9号集石址の間を連絡する礎の箇所からはいずれも確認されていない。獣骨は2箇所より出土している。ともにウマで、1号溝址側寄りより確認された。このほか、弥生式土器等は摩滅が甚だしいものが多く、1号溝址よりの混入として処理した。

9号集石址 (SM9、グリッドI S-11-12-16-17) (第3-38図, 図版6)

検出遺構：本址はA地区最北端側、8号集石址の北側に隣接して位置している。重複関係は、8号集石址と同様に東側に位置する1号溝址の覆土堆積状況により1号溝址に切り込まれた状態を示す。残存する西側の平面形は礎の配置が半円形を呈していることがわかる。その中央付近には平らな巨礫を積み上げた状態が窺える。本址構築時の掘り方は、前述の通り8号集石址と同様、その構築方法も形状も類似性が強い。遺存状態は本址の方が良いものと解釈できる。

出土遺物：底面糸切りの土器器環Aの破片が数点出土している。また、石組中に砥石が含まれていた。ほかに弥生式土器については8号集石址同様の内容で、1号溝址よりの混入として処理した。獣骨はウマ、1号溝址側（溝内）の2箇所より確認されている。いずれも1号溝址寄りである。

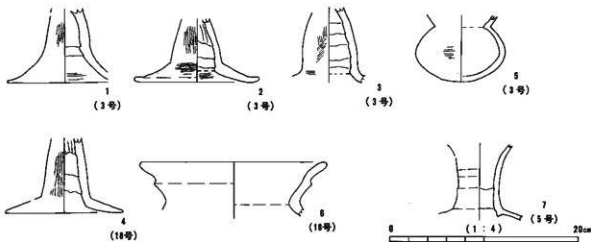
(2) 遺構外遺物について

古墳時代に属する遺物は極めて少ない。遺構内混入遺物として処理したものの内、図化できたものを第3-39図・第3-40図に掲載する。また、この時期に属する遺構は調査区域内の1条の溝址のみである。このため、古墳時代の人為的な影響は極めて限られていたことになる。

(3) 小 結

古墳群を除く集落域内で古墳時代に属する遺構として検出されたものは、14号溝址1条のみである。この溝址は調査区の最北端の西側の調査区域外から東側調査区域外へ延びる。このためその全容は明らかではない。このほか、調査区内からは同時期に属する遺構は認められず、また遺構外からの遺物散布も極めて少ない。したがってこの地域における古墳時代の位置付けは、唯一の遺構出土遺物の内容からしても特異な性格であることが窺える。しかし現状は限られたものであり結論付けるまでには至らない。

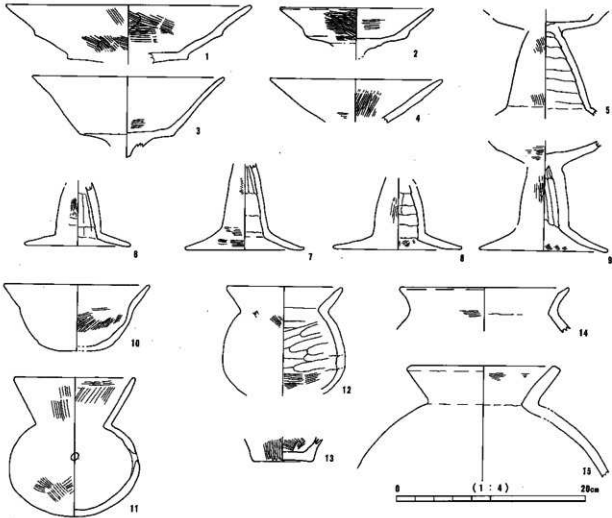
続く奈良平安時代の遺構としては、7号・8号・9号集石址が認められた。発掘調査当初においては、その外観の形状より古墳の性格を持つものと思われた。しかし調査の結果、本古墳群とは明らかに異なる性格を示す遺構となった。1号溝址は、この7号から8号集石址にかかる箇所において狭められており、さらに9号集石址を過ぎた地点で東側に急に折れ曲がる様相を呈している。また出土遺物から見ると、集石廃絶以降それほどの期間を経ずに溝の廃絶が起こったといえる。この相互関係より集石址と1号溝址が深く係わっていた可能性が持たれるのである。7号集石址出土の内黒の高環は須恵器の模倣品と思われ、7世紀～8世紀前半までの時期である。9号集石址の石組からは、砥石1点が組み込まれて認められた。構築時期を判定する資料として注目し値しよう。この砥石は砥面が一面のみで、一般的な多面体ではなく、また形状も大きく置砥石のタイプと思われる。砥面には二方向の溝を構成している様子が窺える。砥面を上面とし全長13.8cm、最大幅10.5cm、厚さ14.8cmを測る。各々の集石址は構築時には、まず掘り方を設けていることが共通する。またこの掘り方からすれば8号と9号に時期差はない。双方の巨礫の人為的なまとまりとそれを連絡する形状も同時性を示唆する判断材料といえる。このほか、獣骨は、各集石址で1号溝址側に沿った状態で確認されている。また、7号集石址からは銅製の耳環が1点出土している。耳環は、このほか1号墳と4号墳の付近からも出土している。



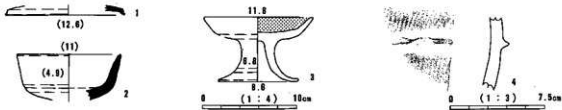
第3-39図 3・5・18号住居址出土古墳時代土器実測図



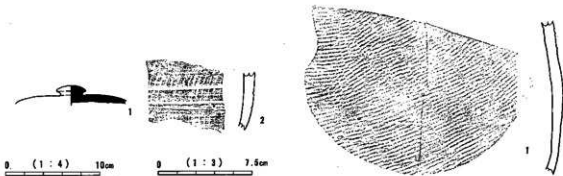
第3-40図 18号土坑・1号溝址出土古墳時代土器実測図



第3-41図 14号溝址出土土器実測図

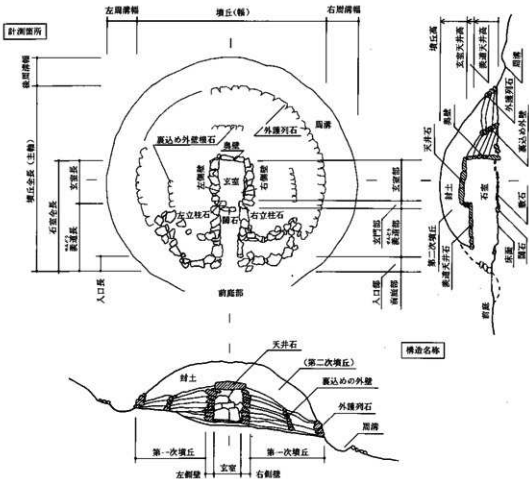


第3-42図 7号集石址出土土器実測・拓影図

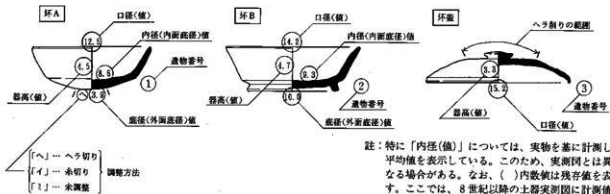


第3-43図 8号集石址出土土器実測・拓影図

第3-44図 1号墳出土土器拓影図



第3-45図 大穴古墳横穴式石室構造図



註：特に「内径(値)」については、実物を基に計測し平均値を表示している。このため、実測図とは異なる場合がある。なお、()内数値は残存値を表す。ここでは、8世紀以降の土器実測図に計測値を書き加えることとした。この標記法により土器の特徴が表現できるからである。

第3-46図 古墳出土須恵器の計測値標記法

2 古墳群

本調査区内の古墳は、高所の1号墳を筆頭にして、2号墳～6号墳が水田地帯に近付くようにして位置している。これらの古墳は、弥生時代と平安時代の集落址と同様にその遺存状態は後世の影響を強く受けている。墳丘の平面形を形造る裾の状態も必ずしも良好とはいえないが、外護列石根石が残存するものはその平面形と規模を推察することができた。また墳丘頂部は石室根石付近まで削平されているものもあり、天井部の様子は窺い知ることもできず、残存する石室を構成する石組にしても攪乱直下はその位置をまず疑ってかかる必要がある。本古墳群の遺存状態の共通性からすれば、畑地として墳丘封土が耕作により破壊された時点が最大の削平であり、石室天井石が取り除かれ、さらに攪乱が生じたことは確かなことである。石室の根石近くまでの削平後も本墳を覆う堆積層による影響は積石にかかる圧迫という形で各々の石組に現れている。このため、石室の形状や規模は構築時の基礎であり基本として考えられる床面と根石の接線を参考値として取ることにした。下記遺構所見では、現状に重点を置き、そこから窺い知ることのできる本古墳群における横穴式石室の構造等の特徴などについても若干踏み込んだものもある。その構造名称は便宜上第3～45図の「大穴遺跡横穴式石室構造図」に¹⁾、また古墳出土須恵器の計測値は第3～46図に従うものとする。

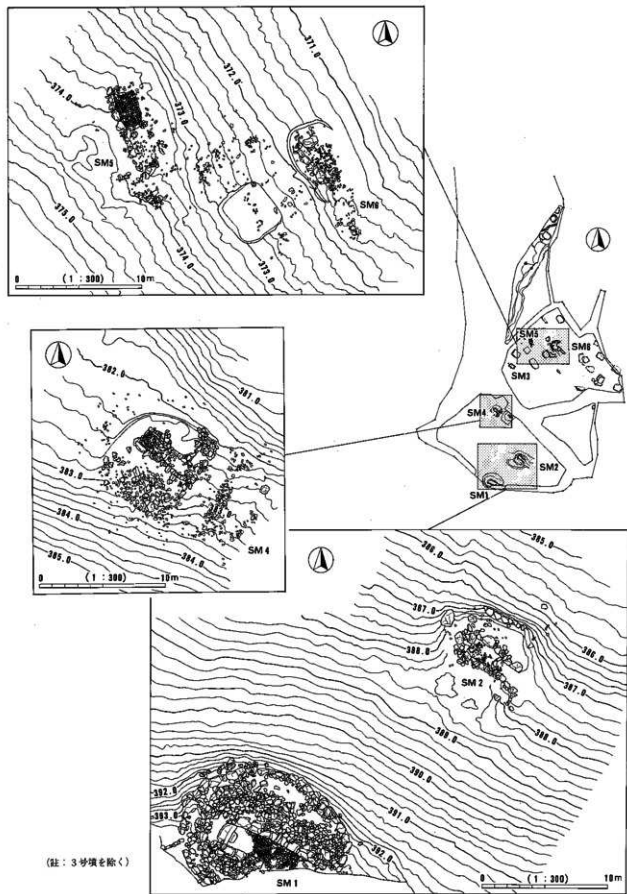
(1) 遺構

1号墳 (SM1、グリッドIIM-2・3・7・8・9・12) (第3-48～52・44・76・77図、巻頭図版2・図版1・7)

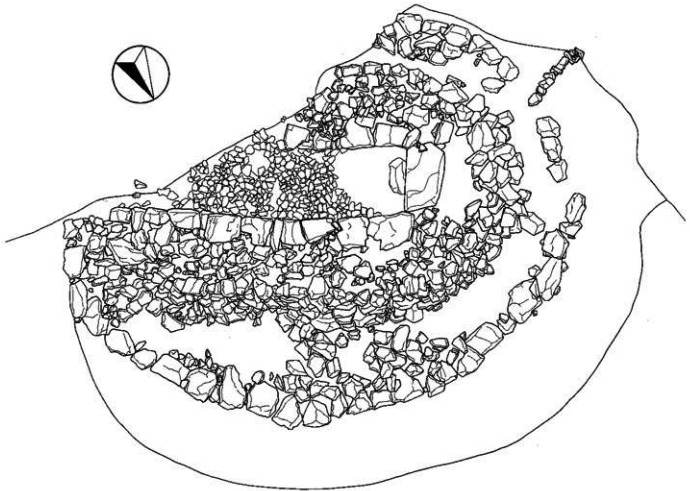
検出遺構

墳丘部：本墳はD地区南私有地との境、つまり調査区域内最南端に位置している。墳丘を形成する南側は現農道とそれに沿う産業廃棄物の廃棄場所として、石室までもその影響を受け攪乱を免れていない。左側壁の大半が削り取られた状態にあるのはそのためである。このように墳丘南側の大半は攪乱され削り取られているが、それ以外の石室外周には内外二重回りに礫が並び残存する。この外廻り根石が外護列石の根石として認められることより、墳形は石室主軸方向に長軸を取る楕円形を呈していたことがわかる。また墳丘の規模は主軸方向に13.30m、これと直交方向が11.12mと考えられる。墳丘を形成する封土は、石室天井部を覆う第二次墳丘は存在せず、第一次墳丘²⁾の状態にしても石室を形造る石組が根石付近まで削平されている現状のためその全容は不明である。外護列石根石とその内側の裏込め外壁の根石は、墳丘断面より石室外から裏込め外壁根石までが裏込めの礫を多用し、これより外護列石根石までは礫の混入が少ない盛土に区分できる。このことより、この基礎部分は築造工程の相違を成すものとして考えられる。周溝は認められていない。

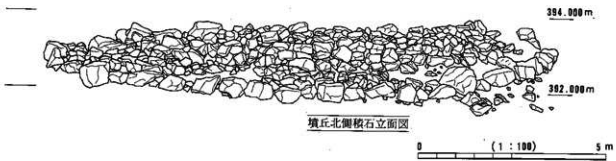
主体部：無袖型横穴式石室と推定すべき。石室の全長は9.16m。幅は奥壁沿いで1.70m、出入口で推定2.00mを測る。残存する奥壁は根石にあたり、巨礫一枚にて石室幅を持たせ壁面を加工している。側壁は右側壁が石室全長を残し、左側壁は入口部側より半分以上に攪乱を受ける。残存する側壁は両側ともほぼ根石のみの状態を呈する。敷石は奥壁側で取り除かれたような状態で、また入口側は左側壁の削平の延長上に攪乱を受けるため中央部にその様子をとどめていることになる。支門や袖の存在は玄室部と羨道部を確実に区分していることがわかる。が、無袖タイプの玄室部と羨道部の区分は、壁面により構成された平面形の輪郭(胴張り)や敷石などによる床面の状態等により推察されるとする。本墳の場合、右側壁面輪郭線と礫の変化をその表れと、入口部付近の石敷詰め途切れ方は後世の攪乱から免れていると見て取ればその境に相当する。その場合の石室内の寸法は玄室部として5.82m、羨道部として2.12mを測ることになる。石室の入口部付近は残存する右側壁を基に左右対称とすると、間口を広げアクセントを付けることで入口部を意識し側壁が石室側壁と連絡し、外側面に裏込め外壁根石と外護列石根石を接続させている



第3-47図 古墳群周辺地形図

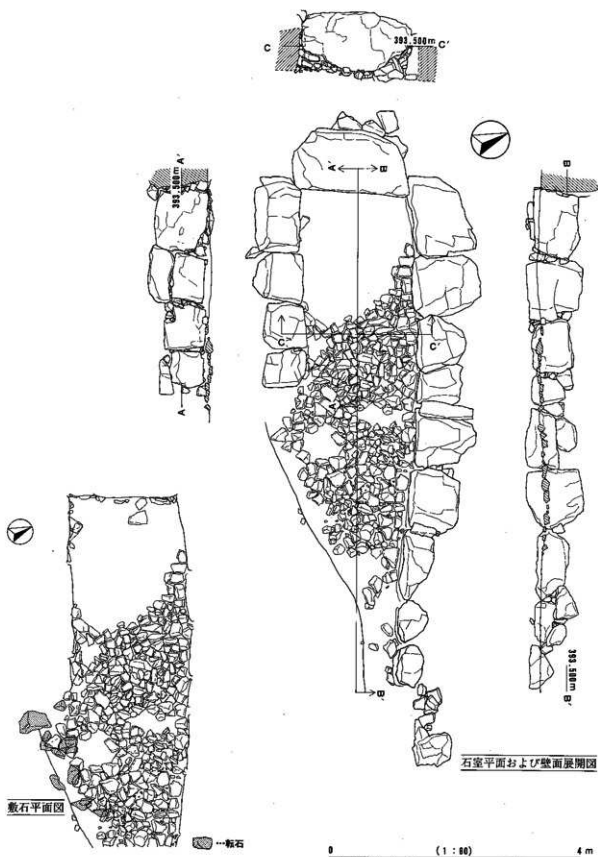


墳丘平面図

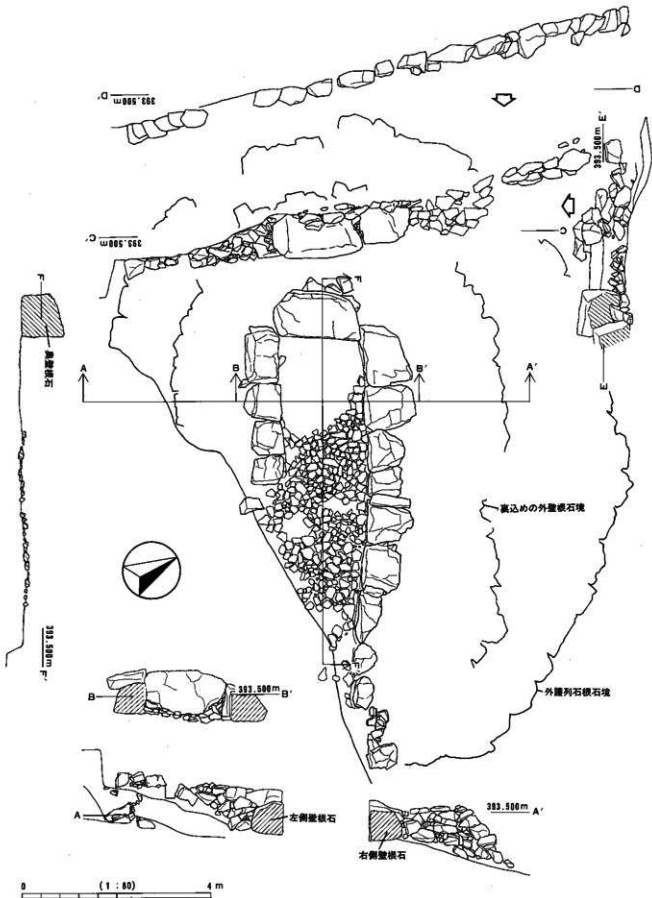


墳丘北側積石立面図

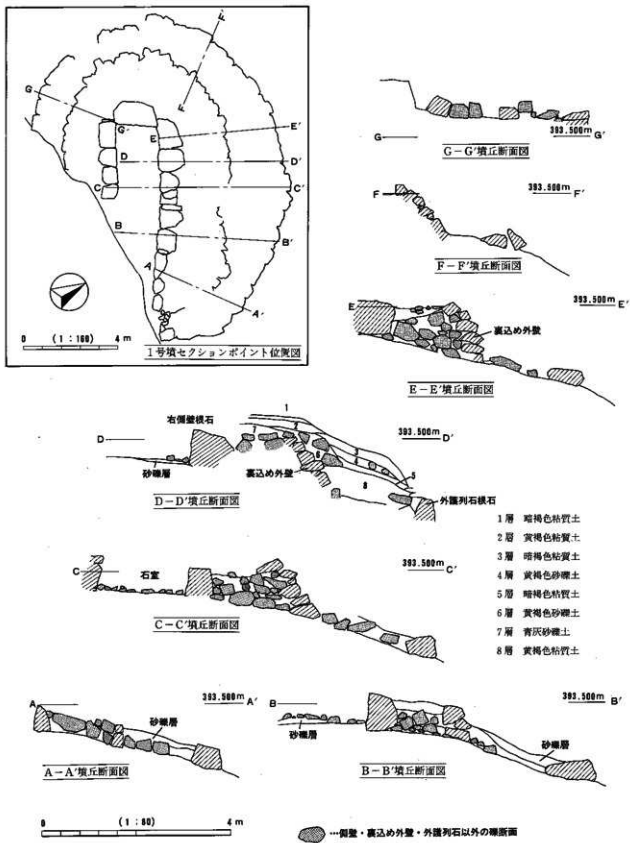
第3-48図 1号墳実測図(1)



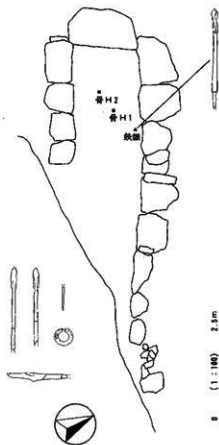
第3-49図 1号墳実測図(2)



第3-50図 1号墳実測図(3)



第3-51図 1号墳実測図(4)



第3-52図 1号墳遺物出土位置図

放射状に区切り、複数の単位に積まれていることがわかる。この単位は礎間の相互の噛み合わせによって墳丘中央を通して左右に線を結びそれを前後に分け、それより奥壁外側と入口側に向けて、また入口部は外側に各々進行させて、石室や墳形の基礎部を形造ったものと思われる。しかし、この工程が上部の天井石にまで同様に継続したとするには無理がある。なぜなら土木技術面からの工程を考慮すると、一単位で壁面を仕上げさらに次の一単位を仕上げる工程は余りにも危険であり、非効率的であるからである。ただし、側壁と全く性格の異なる奥壁の巨礫は移設時の労力を想定すれば場の確保が優先され、この点から奥壁の礫が常に優先され、基本としたことは想定できる。この場合、巨礫と接する両側壁の1・2の礫はほかの側壁を構成する礫との相違により奥壁の設置に深く関わっていたことが想像される。

なお、1号墳の消失する石室左側壁の復元については『県埋文センター年報10』では片袖式に復元されているが、残存する側壁を考慮し左右対称を原則に考えた。しかし、更埴市周辺の大型横穴式石室の状況を見ると、片袖式の可能性も十分に考えられる。今後の検討課題である¹⁶⁾。また、本墳の築造時期の検討については「成果と課題」の項を参照して頂きたい。

出土遺物

石室内：鉄製品は、石室内床面より鉄鍬3点と刀子1点、ほかに鉄釘先端部と思われるものが1点出土している（鉄製品については古墳群「出土遺物について」の項にまとめて記述した）。本墳に伴う出土遺物として断定できるものはこの鉄製品のみである。骨は石室床面上に極めて少量認められ、分析の結果人骨と判明している。また、近世陶磁器の破片が石室内より出土している。玉類の出土はない。

石室外：銅製品では耳環1点が墳丘盛土内より出土している。この耳環は一部に銀が鍍金された状態にある。

様子が窺える。推定される羨道部に閉塞石と思われる礫は認められない。

構造および構築工程：墳丘を形造る基礎部は、現状より裏込め外壁までの一回りとさらにその外回りの外護列石の一回りに大別される。この裏込め外壁および外護列石の根石列外面が形造る輪郭は、一周を幾つかに区切って構築している様子が窺える。この変化は、裏込め外壁の石積みの内傾にも表れる（外護列石は根石のみのため不明である）。礫の積み方¹⁷⁾は、裏込め外壁・外護列石とも小口面を多用し、裏込め利用の礫は乱積の範中である。その内容は20～40cm大の角礫斑岩で充填し、隙間には2～3cm大の泥岩細礫を詰めていた。これに対し、裏込め外壁外から外護列石の間は、裏込め外壁石積み後に細砂土により連結している。

石室は粘質硬化土上に細砂土層を設け、その上面に敷石を置く。この敷石は攪乱以外で小礫を均等に敷き詰めた様子が読み取れる。石室を形造る礫は割石とし、奥壁一石は壁面高と奥行き幅がほぼ等しく、またこの奥壁に接する左右の側壁礫四石も同様なことがいえる。これは上部に積む二石目以上の平積みを意識したもので、基礎を安定させる意図が読み取れる。他の側壁の礫は割石であるものの、奥壁側の二石とは異なり小型のものが利用され、工程上の時期を異にしていることが理解される。これら石室奥壁・側壁から外護列石までの構造体を関連付けると、墳丘中央部より

その他、出土位置不明遺物：本墳より須恵器坏口縁部が、また須恵器甕胴部破片1点が出土する。

2号墳 (SM2、グリッドI IH-24・25, IIM-4・5, II I-21, IIN-1) (第3-53~57・76図, 図版1・8)

検出遺構

墳丘部：本墳はD地区東寄りに位置している。第二次墳丘は残存しておらず、裏込めを含む第一次墳丘は石室根石付近まで削平されている。墳丘裾沿いには山側で周溝をとどめるものの、谷側は耕作地造営のため深く削平され、残存する端部はさらに坪境の土留め用の石積みにより攪乱された状況を呈していた。この坪境の積石には本墳の角礫が転用されて含まれている可能性がある。石室裏込めの礫は比較的少ないものの盛土は版築状の硬くしまった層が加わっていた。この盛土は、断面により積石の段ごとに盛り上げる工法を採用している。このことは本墳の築造法として注目される。墳形は残存する周溝の取り巻く形状より円墳が想定される。この周溝は地山の掘込みが緩やかなカーブを描く程度に浅く、削平は明らかである。なお、外護列石と裏込め外壁については、その根石の存在を裏付けるだけの礫による痕跡は認められていない。

主体部：両袖型横穴式石室。玄室部の全長は2.45mで幅1.47mを測る。羨道部は全長2.47m、幅1.05mである。石室は谷側に弧を描く湾曲した状態に特徴がある。側壁および奥壁は根石から2~4段積みまで残された状態にある。石室内の全容はほぼ明らかである。玄室内の全長と幅の比率は1.67である。敷石の状態は、小角礫が奥壁側から山側側壁沿いにかけて残存している。羨道は左側壁によりその全容がつかめる。玄門は左立柱石が根石より三段目で柱状石にて前後から挟み込み支える様子が窺えた。左右立柱石が若干玄室側に折れ、上部が狭まり「ハの字」型に傾いて立っている。これは削平や堆積層による圧迫の影響であろうか。玄門部の闕石はやや玄室側に入り込み玄門上に置かれた状態にある。また羨道部は立柱石と同様に左側壁が根石から内側に傾斜している。羨道内玄門側付近には閉塞石と思われる礫のまとまりが認められるが、量的に少ない。

構築および構築工程：基礎部は、石室直下まで地山斜面を段台状に造成する。石室を構成する奥壁と側壁の礫は、その直下の黄褐色土で硬くしまる地山上に直接固定している。石室壁面を構成する礫はいずれも割石を使用し、側壁から奥壁は平積を基本とする。右側壁が左側壁より比較的幅広いタイプの割石の設置を見るのは、軟弱な谷側を安定させるための配慮であろうか。

側壁の構築工程に関しては、左側壁を根石より2、3段積み上げた後、これに接する側の奥壁を2段積み、中央脇より別礫にて固定、続いて平並して礫を2段積み重ね右側壁側に進行させている様子が窺える。左側壁に利用される礫が石室内にやや内傾化するのは、垂直な右側壁からして後世の土圧などの影響といえる。なお、左立柱石は、両側から側壁礫により挟み込み支える様子が窺える。

裏込め石、裏込め外壁、外護列石は残存しておらず、これらの礫の情報を得ることができなかった。しかし右側壁外には黄褐色粘質土の硬い層を伴う裏込め的な層が認められている。石室床面は明瞭ではないものの、5~7cm大の泥岩礫と10cm大の斑岩を多量に含む層の上面であることが推定される。

出土遺物

石室内：玄室内および玄門部からの出土遺物はない。人骨は現状からは認められていない。

石室外：羨道入口部周辺より須恵器坏片と坏蓋が、また長頸壺の底部の破片が数点出土している。このほか、山側に残存する周溝内の底部より坏A・坏蓋、横瓶、短頸壺そして大甕がどれも砕けた破片として出土している。この内、坏Aは5点ありこれらはすべて8世紀前葉後半に属する。また須恵器の大甕は二個体分を認めたが、一個体分は本墳より離れており、胴部だけの破片にとどまっている。またもう一個体分の大甕は口縁部から胴部底部にかけて残存率は高く、その出土層位と出土範囲を考慮すると不動の位置

にある可能性がある。周溝内の土器は当初より石室外部に置かれたと想定されるこの大甕と極めて近接している。なお、前庭から遺物は認められていない。このほか、鉄製品は鉄鏃1点が墳丘封土中より出土する。鉄釘の出土は無い。

3号墳 (SM3、グリッドII C-9・14・15) (第3-58-59-65-76図、図版9)

検出遺構

墳丘部：本墳はB地区西側に位置している。石室天井部を覆う第二次墳丘は無く、裏込めを含む第一次のほとんどが削平されている。墳丘部の輪郭を示す外護列石等の手掛かりがないため墳形およびその規模を復元推定するだけの資料は得られず不明である。また、周溝は山側においても認められていないが、その存在を否定するまでには至れない。いずれにしろ遺存状態は極めて悪い。

主体部：両袖型横穴式石室。石室は支室の側壁の一部と羨道部のほとんどが根石ごと流失している状態にある。このため羨道部はその輪郭すら明らかではない。ただ、支室部と羨道部の区分は、闕石が置かれていることで支室部の存在を認める。この闕石を挟み支室を構成する左右立柱石は現存していない。しかし、支室から羨道へ繋がる側壁が形造る石室形状の輪郭の変化と闕石の位置よりこの両脇に左右立柱石が存在していることを示唆させる。このことより、闕石は左右立柱石を結んだ線上は羨道部側へ寄ると推定した。これらを基に石室内を区分し内法寸法を測ると、支室部の全長は2.35mで幅1.45mとなる。羨道部は現状の残存箇所幅1.10mとなる。奥壁根石はほかの石室根石に比べ巨礫を用い安定させている様子が窺える。支室左側壁の輪郭は、弧を描くようにして外側に張り出す。これに対面する右側壁は現状より直線的なライン上に置かれている。支室床面直上の巨礫は側壁の崩れによるものかは不明であるが、その直下に敷石は残されていなかった。羨道は支室側にしか残存しないためその全容は不明であるが、閉塞石と思われる礫が認められ、一部は闕石に重なる状態であった。また、推定される羨道の位置には小礫のまわりを認めたが、その性格は不明である。その他、石室外の状況は裏込めを含めて不明瞭である。

構造および構築工程：基礎部分は地山の斜面を段台状に造成し、石室直下に版築状の層3枚を踏み固め、基礎を造る。この上に石室石組根石を固定し、その内側に敷石を載せている。石室裏込め礫は少なく、裏込め外壁や外護列石は残存せず不明である。石室を構成する壁礫は、奥壁とそれに接する左側壁の一石は平積にするが、支室部は横積にしている。構築工程は、石室側壁奥壁を一辺ずつ完成させることはせず、石室根石一段目から数段をほぼ均等に積み上げ盛り上げる。さらにその上部は推測であるが、互い違いとしこの繰り返しにより天井部を形造る。これは奥壁が鏡石一枚というタイプではないことに起因し、支室内側壁と奥壁との噛み合わせが床面と接する根石部の段階とその上部の段階とは異なることによる。また第一次墳丘は版築状の層などに分層されることから、石室を構成する石積みと相互関係を生じさせていることが認められるからである。

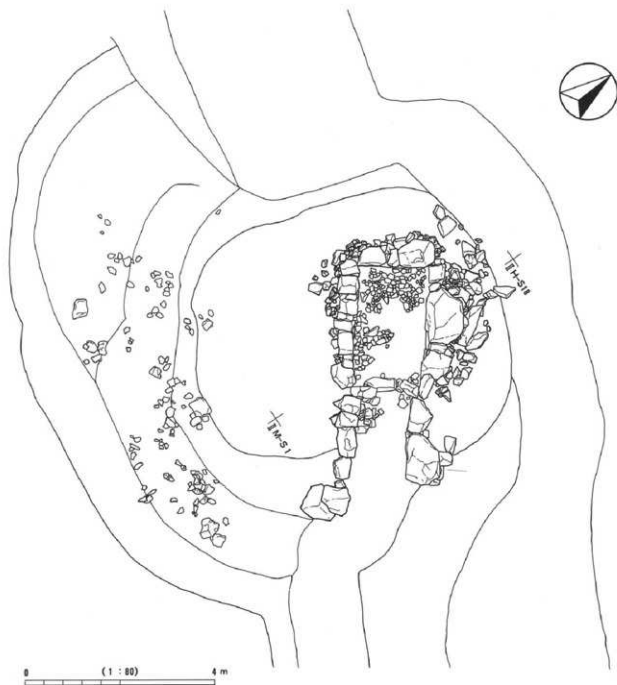
出土遺物

石室内：支室内より長頸瓶(8世紀前半～中頃)が頸部を除き、また須恵器蓋と特殊な器形の須恵器鉢が出土している。この内、特筆されるものは須恵器蓋と鉢がセットになると思われる点である。この鉢と蓋は石室内奥壁側より砕けた状態で出土している。支室部からの出土は認められていない。

このほか、人骨は支室床面上より認められた。この人骨は頭蓋骨が中心で、床面とする敷石上より骨片として散在しており、敷石の礫と礫の隙間にもほとんどボロボロになり付着した状態であった。

石室外：周溝からは須恵器環A・環Bのほか弥生式土器および縄文時代前期諸磯C式土器の破片が認められた。この須恵器環はともに8世紀前葉～中葉の範囲内と思われる。

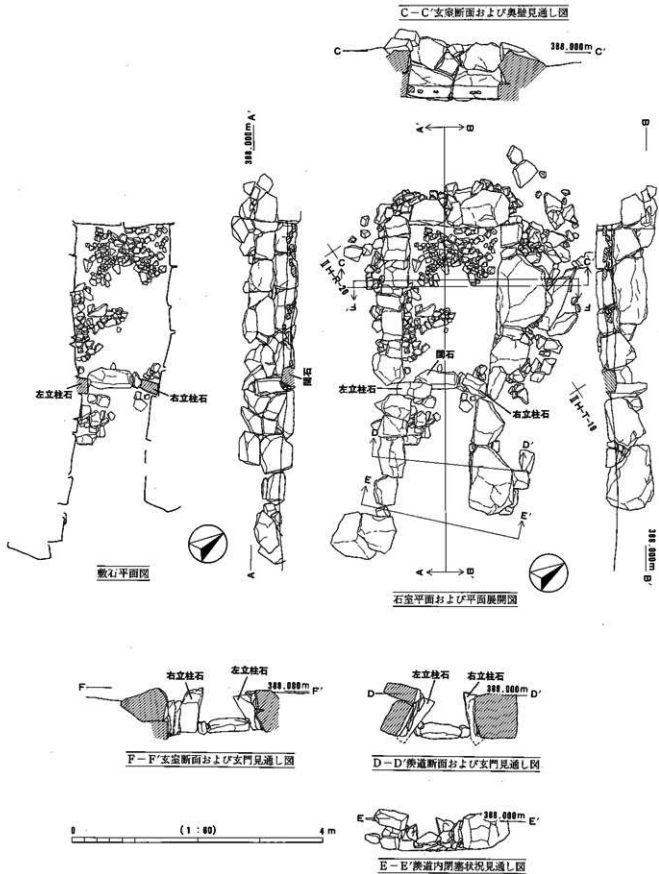
鉄製品は、鉄釘1点が前庭の集石部より出土している。この鉄釘は、折れ曲がった状態にあった。



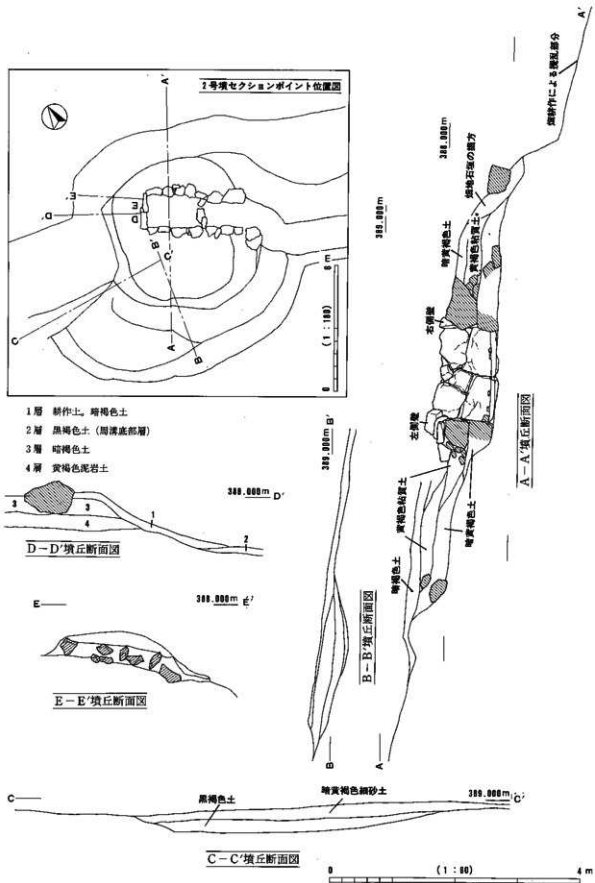
第3-53図 2号墳平面図



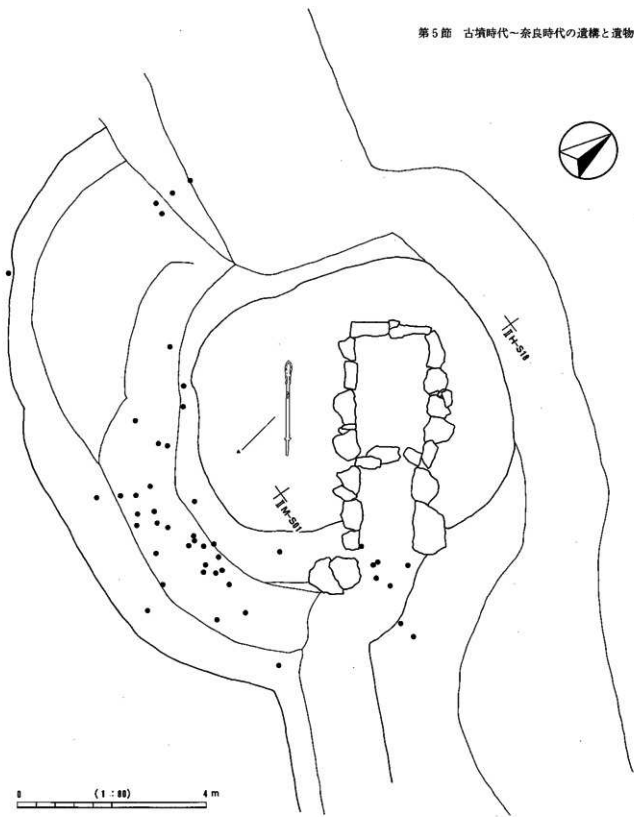
2号墳大壘出土状況



第3-54図 2号墳実測図(1)

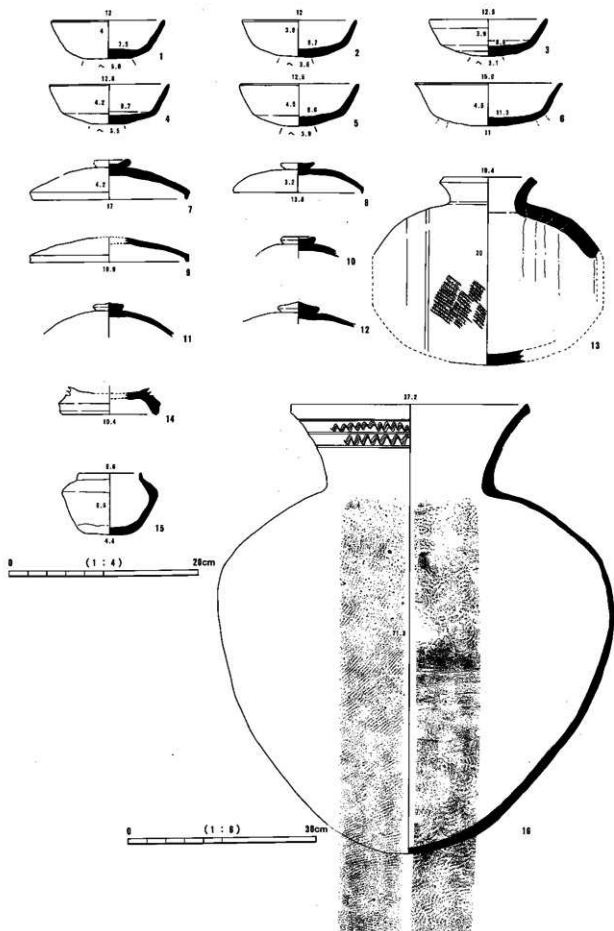


第3-55図 2号墳実測図(2)

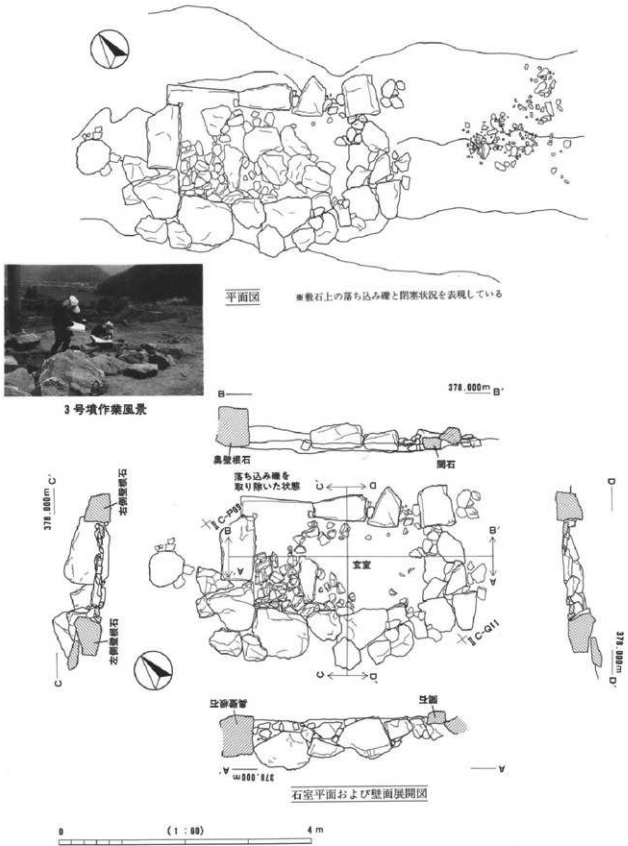


第3-56図 2号墳遺物出土位置図

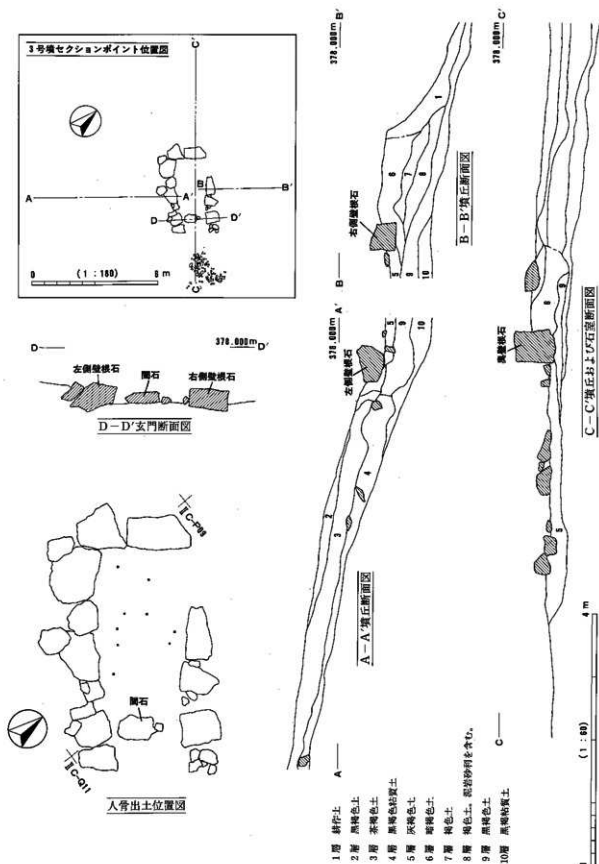
第3章 大穴遺跡



第3-57图 2号墳出土土器実測図



第3—58図 3号墳実測図(1)



第3-58図 3号墳実測図(2)

4号墳 (SM4、グリッドIIH-3・4・8・9) (第3-60-64・66・77図、図版1・10)

検出遺構

墳丘部：本墳はD地区の北側に位置している。第二次墳丘は残存しておらず墳丘高は不明である。第一次墳丘も石室根石付近まで削平された状態にある。墳丘範囲は正面前庭部に外護列石根石が残存するため明らかであるが、他方は墳丘裾の痕跡もろとも流失した状態にあるため不明である。このため墳形が円形を呈するという確証は持てない。現状より規模は主軸方向に12.0m、これと直交方向に14.8mと考えられる。なお、前庭部のさらに外側には巨礫のまとまる10号土坑が位置する。この遺構に関しては、東側に石英斑岩片が積石状を呈し人為的な痕跡と認めるもののその性格と本墳との関連は不明である。

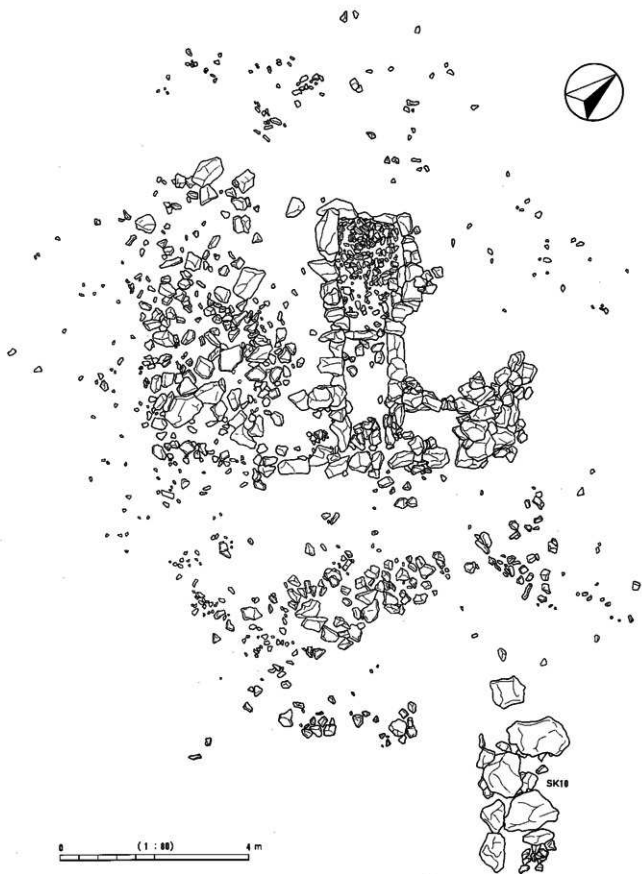
主体部：両袖型横穴式石室。支室部の全長は2.05mで幅1.37mを測る。支室内の全長と幅の比率は比較的短い。羨道部は全長2.50m、幅0.90mである。支室部と羨道部の境は明瞭で、左右立柱石は支室部側壁と羨道部側壁により前後を挟み込み固定し玄門を形造る様子が読み取れる。この立柱石は「ハの字」型の上すばまりの状態で立ち、後世の影響を無視すれば支室はより閉鎖的な空間であったことが想像される。隅石は羨道部側に残される。支室内床面は平坦ではない。敷石は石材の石質とその形態によって2種類に分類される。その内容は大きさにまとまりのある粒揃いの角礫泥岩とこれに対しやや大ぶりで不揃いの角礫石英斑岩に分けられる。双方の石材の状況に関連性は認められず、石英斑岩により当初より敷き詰められた泥岩の擾乱が考慮されるが、上下関係は必ずしもそうとは断定できない。羨道内は入口付近より支室側方向への緩やかな傾斜が読み取れる。この羨道内入口側付近には閉塞石と思われる礫がまとまり、この閉塞石は埋土と混じりあった状態にある。

構造および構築工程：基礎部は、基盤層の斜面を段台状に造成している。石室石組根石はこの造成面上の泥岩細粒砂土の混じる硬くしまった層上に固定されている。これら石室壁面を構成する礫は、いずれも割石を使用している。奥壁は横積であるが、側壁は支室部から羨道部までは横積でほぼ統一されている。ただ左右立柱石は平らに割られた礫の最大面を支室部と羨道部双方に向けて仕切るように立ち上げ、玄門を形造っている。この左右立柱石はその設置上横積の奥壁石と同様に比較的早期の設置と推定される。またそれを裏付けるように側壁は立柱石側から奥壁に、あるいは羨道部入口側に向かって順序よく横積されている様子が窺えた。支室内の敷石は第3-64図「石質分類図」に示すとおり比較的大きな石英斑岩とそれより小粒な泥岩を敷き詰めている様子がわかる。双方の礫の重なり方より、これらは同一時期と解釈される。墳丘部は石室構築後のもので、裏込め礫は盛土中の混入程度と少ない。裏込め外壁は羨道部右外側に残存している様相は横積で、石室方向の積み上げが窺えた。この裏込め外壁は、石室壁を構成する横積の一段ごとに盛土により連結されている。また外護列石は、基本とする根石に巨礫を使用しているが、裏込め外壁との間は狭く乱積によって上部も積まれている可能性は高い。

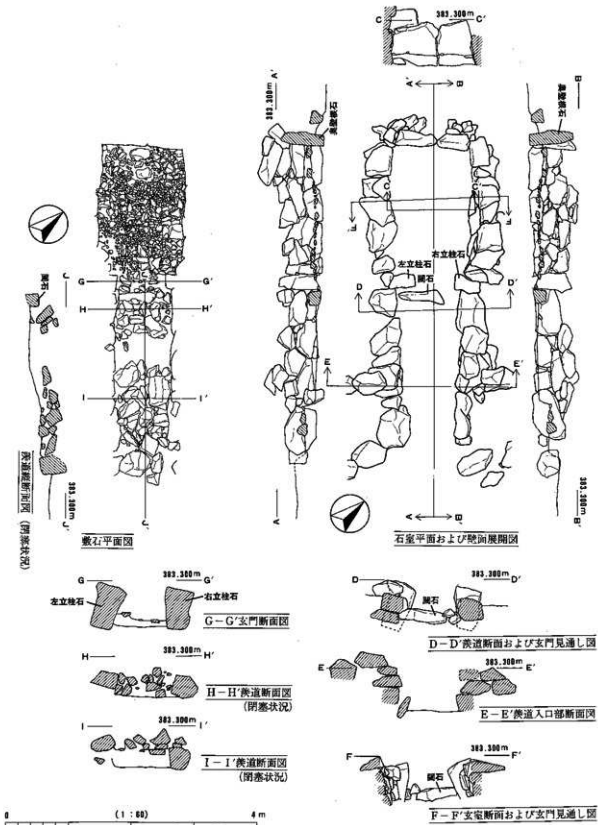
なお、前庭右寄りの巨礫の集石については、一部に石英斑岩5～30cm大の礫が含まれている。この礫は、割石で平たく加工が施されており、本墳に伴うものとするれば後世、人為的な跡ということになる。

出土遺物

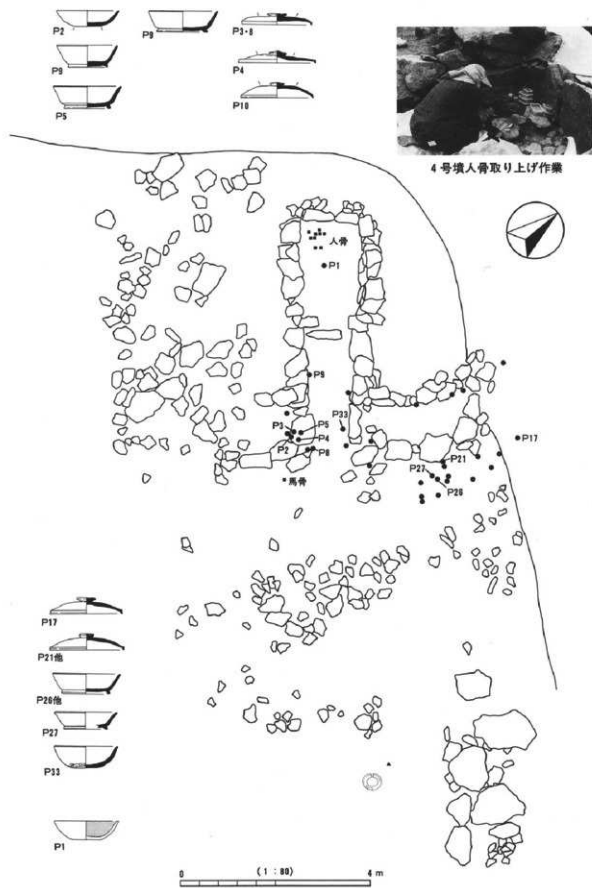
石室内：支室内出土土器は須恵器坏口縁部小破片、大甕胴部の破片や摩耗が甚だしい土師器など極めて少量である。また、支室内敷石床面上70cm上の覆土中より内黒環1点(9世紀中頃以降)が出土している。この点については、築造年代を下るもので、追葬の根拠を示す遺物として決定的な根拠を示すには乏しく、後世の混入遺物として判断した。むしろ、築造後1世紀を経過した時点で支室内の状態を示すものとして注目されよう。玄門部から遺物は認められていない。羨道部出土の床直遺物は歪みの大きな須恵器坏蓋、須恵器坏A、その他須恵器の小破片と弥生式土器片が数点出土している。支室内奥壁側左寄り敷石面上10cmのほぼ隅石を覆うレベルの覆土層上面に人骨がまとめられた状態で出土する。その中には歯骨が8



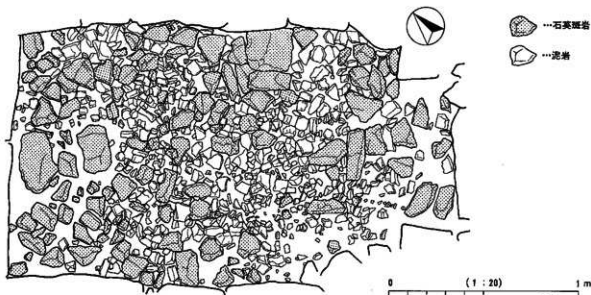
第3-60図 4号墳平面図



第3-51図 4号墳実測図(1)



第3-63図 4号墳遺物出土位置図



第3-64図 4号支室内石質分類図

点ほど含まれるが、散乱した状態にある。このため、埋葬後の行為が示唆される。このほか羨道入口付近より馬骨と思われる骨片が出土している。

石室外：羨道部入口部付近と前庭部から正面に沿った状態で内外回り根石上、あるいは付近に集中して土器が出土する。この周辺一帯にかけては須恵器蓋5点、須恵器環Aと環Bとその他須恵器小破片が、また混入遺物として弥生式土器片が含まれる。これらの出土土器は後世の人為的な行為による石室内からの副葬遺物の移動とするならば、本墳における破壊が石室根石周辺まで至った時点以降が考えられる。墳丘盛土からは須恵器環蓋、環Aと環B、その他弥生式土器破片と近世陶磁器が出土している。

また、銅製の耳環1点が前庭外側の10号集石址周辺より出土している。

5号墳 (SM5、グリッドIID-1) (第3-67~69・74・76図、図版11)

検出遺構

墳丘部：本墳はB地区北西寄りに位置している。墳丘を形造る第二次墳丘はすでになく、第一次墳丘も墳丘裾に至るまでは削平されている状態にある。しかし等高線に表われる墳丘範囲は明瞭ではないものの、主軸方向に墳丘全長約12.0mの推定値を測る。また前庭部は若干の溝状を呈しており、その墳丘境が読み取れる。なお、石室羨道部より谷間に焼土と炭化物の影響を受けた痕跡およびピットを認める。これは墳丘内側に含まれるものと推定されることから、本墳構築に伴うほかの遺構の削平として判断した。

主体部：両袖型横穴式石室。石室は左側壁の根石が支室から羨道にかけて残存する。これに対し右側壁は石室根石のすべてが失われている状態にある。このためその全容は不明と言わざるを得ない。しかし、この失われた左側壁根石に接する敷石の状態が比較的良好なため、この接線は石室形状の輪郭として推測可能である。それによれば、支室側壁の形状は支門に接続する部分で内側に折れ、また羨道側壁も支門部において内側に折れ曲る。これらより支門部の開口幅は非常に狭まった状態を呈する。さらに立柱石は左側壁側に残存し内側に傾いた状態にあった。隅石はこの支門上に置かれており傾いた立柱石が寄り掛かる。羨道部は左側壁根石が残存するものの入口部はその痕跡すらとどめておらず不明である。

構造および構築工程：基礎部は、地山の斜面を緩やかに削平している。石室石組下部層は、2cm以下の泥岩小破片を多量に含む厚さ30cm前後の薄い土層を幾重にも重ね硬化させている。特に、敷石直下にあたる土は、泥岩をさらに細かくした5cm角ほどのものが多量に含まれていた。支室床面の敷石はその石材により2種類に大別される。それは角礫の一部を除いてほぼ均等に敷き詰め、敷石の礫と礫の間の目地には

細角礫を埋めるようにしている。これが本墳の構築時に係わる1工程なのかは明らかにはできないが、少なくとも閉鎖後にある程度の期間をおいたものでないことは確かなところであろう。羨道部の床面上には敷石は認められていない。石室壁を構成する礫は左側壁根石のみ残存する。この根石は、いずれも割石で幅広いタイプであるものの、礫上面の様子より二段目以上は平積を基本としていると推定される。裏込めから外護列石までは残存しておらず不明である。

出土遺物

石室内：玄室部からは須恵器環Aと環Bが4点、須恵器環蓋4点ほどとほかに長頸甕が出土している。玄門部からは遺物は出土していない。

そのほかの遺物としては、鉄製品は鉄鍔1点と刀子1点が玄室内より出土している。この内、刀子は鞘の部分に木質が残存し刃先との境には鉄製刀装具が付属している状態にある。人骨は石室内床面の敷石上より出土した。出土位置は大別すると2箇所にとまとめられ、1箇所左側壁側部では骨片約26本ほどが積まれた集骨状態で認められた。現場段階の所見によれば「左側壁側に寄せられたような感じで重なり重なっていた。」ということ、この中には歯骨が含まれていた。

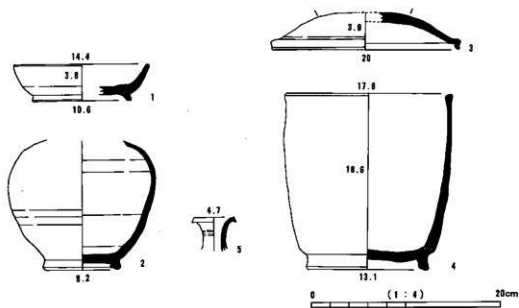
石室外：石室正面前庭部（地形図からは若干の溝状を呈している箇所）からの出土遺物量は他の地点より比較的多い。ここからは、特に須恵器壺Bが目目される。また須恵器環蓋がある。そのほか、須恵器環小破片や弥生式土器が少量出土している。

6号墳（SM6、グリッドIX-22, IID-2・3・7・8・9）（第3-70-73-75-76図、図版12）

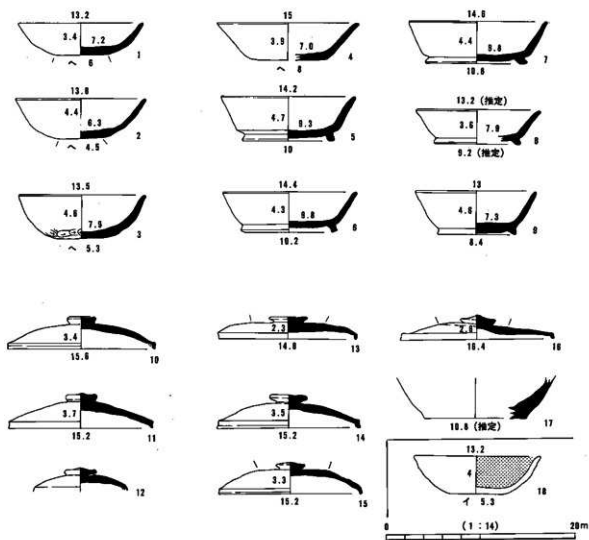
検出遺構

墳丘部：本墳はB地区中央北寄りに位置している。墳丘部は第二次墳丘から第一次墳丘に至るまで削平され、地山（基盤層）の人為的な掘り込みが露出した状態にある。この掘り込みは、石室を南北2条に取り巻く溝と、さらにその付近の4箇所土坑が位置している。これらは石室に近接して位置しており、盛土に含まれ墳丘掘外周沿いに設けられる周溝とは考え難い。このため墳丘の規模はこれら掘り込みを含むものと解釈すれば15×12m以上と推定される。この石室周囲の溝および土坑内覆土は黒褐色や炭化物混じりの暗褐色土で、16号土坑からは本墳の裏込め使用の礫と同形。同質の類似する礫が十数点ほど含まれ、その中にはクサビ痕跡をとどめた礫も含まれていた。これらが本墳の構成石材とすると、畑地造成時の転用か抜き取りが指摘される。いずれにしろほかの古墳には類似例がないため、本墳に伴う施設あるいはほかの遺構に係るものであるかは断定できなかった。なお、山側の溝址は23号住居址（平安時代）によって切り込まれる関係にある。

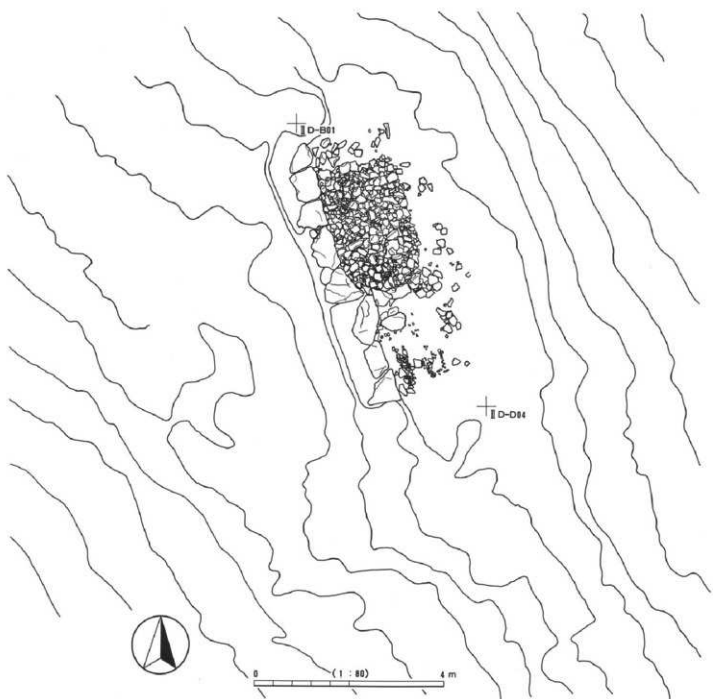
主体部：両袖型横穴式石室と推定される。石室は左側壁の根石が玄室から羨道にかかる部分が残存する。これに対し右側壁は5号墳同様にすべて失われている状態にある。このためその全容は不明である。しかし、失われた根石に接する敷石の状態からこの接線により右側壁の輪郭は左側壁に対称とするものと判断した。石室平面形状は、玄門から羨道に掛ける輪郭線の流れが内側に折れ入口部に向き先細りしている。玄室左側壁根石直下からは10～20cm程度の平たい礫を所々に埋め込み根石を固定させている様子が窺えた。玄室内床面の敷石は、所々抜けているため完全な状態ではない。石材は石英斑岩と泥岩の角礫を主体としては均等に敷き詰められていた。5号墳と比較して一回り小さい角礫を使用している。この敷石直下は褐色の硬い土で、版築層を形成していると思われる。玄門部は両側ともに立柱石は現存していない。が、左側壁と闕石が置かれる間にその抜き取り痕跡としての隙間が生じていると判断する。このことより両袖型と判断している。闕石はこの玄門上より若干玄室側に置かれる。羨道部は左側壁根石が玄室側にわずかに接続した状態で残存するのみで、羨道入口部はその痕跡すらとどめておらず不明である。しかしわず



第3-65図 3号墳出土土器実測図



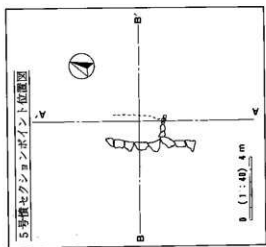
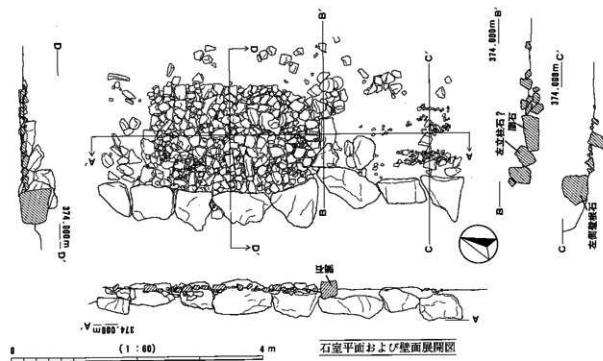
第3-66図 4号墳出土土器実測図



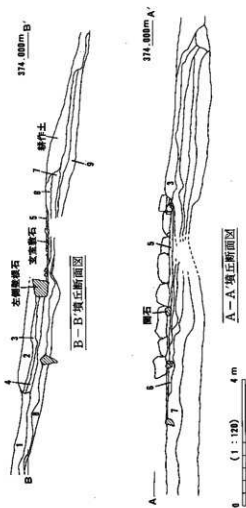
第3-07图 5号墳平面图



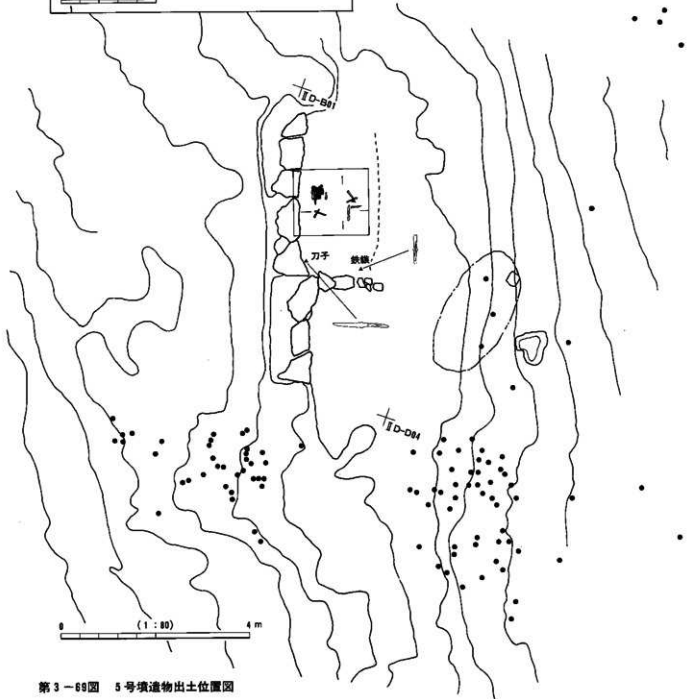
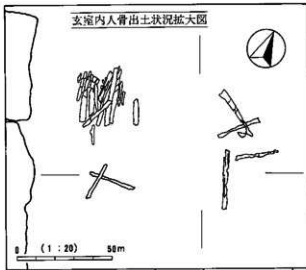
5号墳発掘風景



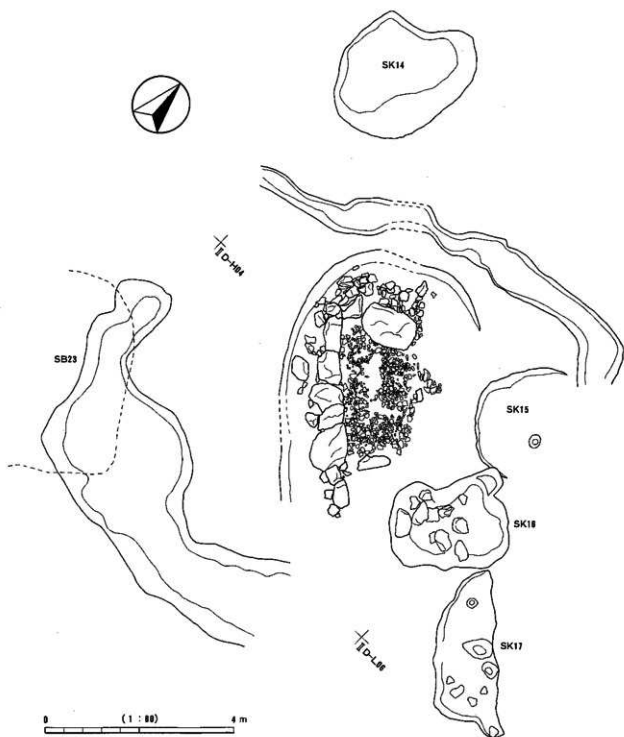
- 1層 暗褐色土
- 2層 暗褐色土、灰岩を含む
- 3層 茶褐色粘質土
- 4層 茶褐色土、礫を含む
- 5層 灰褐色土、灰岩を含む
- 6層 褐色土
- 7層 茶褐色粘質土
- 8層 褐色粘質土
- 9層 暗褐色土、砂岩と灰岩を含む



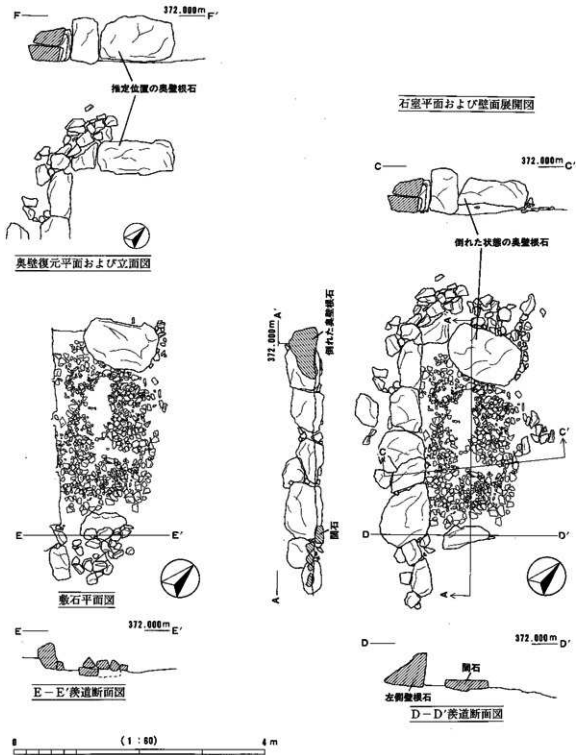
第3-68図 5号墳実測図



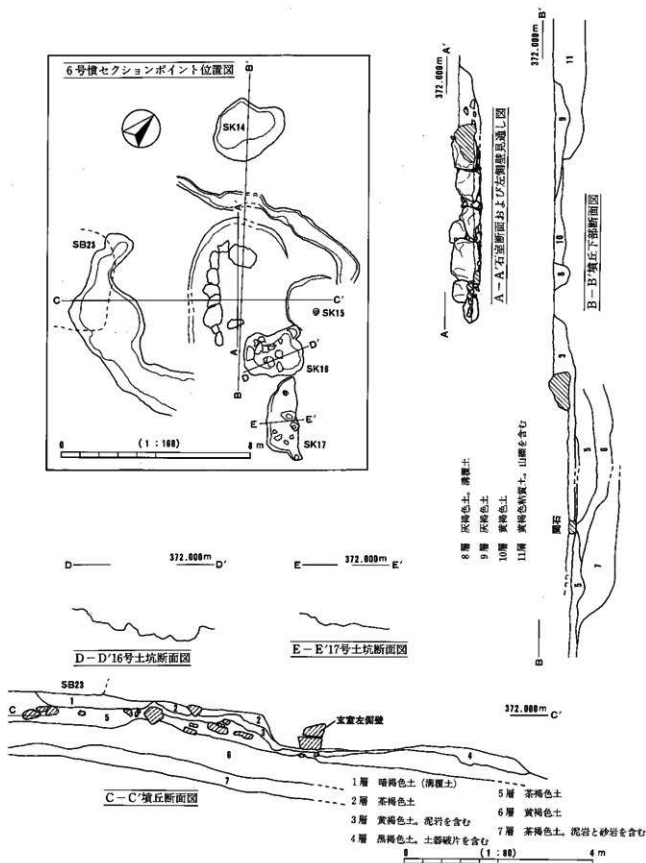
第3-69図 5号墳遺物出土位置図



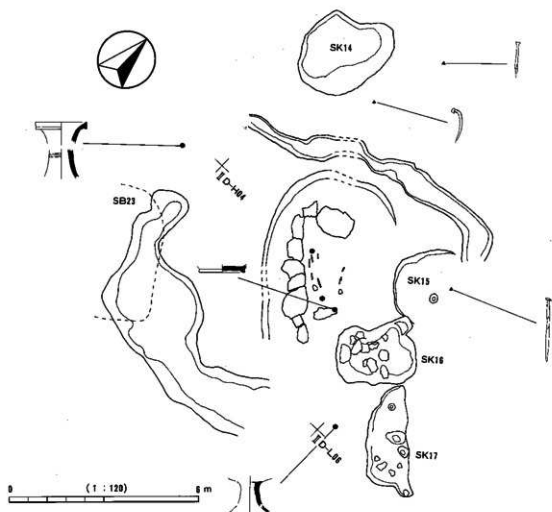
第3-70図 6号墳実測図(1)



第3-71図 6号墳実測図(2)



第3-72図 6号墳実測図(3)



第3-73図 6号墳遺物出土位置図

かな羨道部においても閉塞石と思われる礎が10点ほど残されていた。

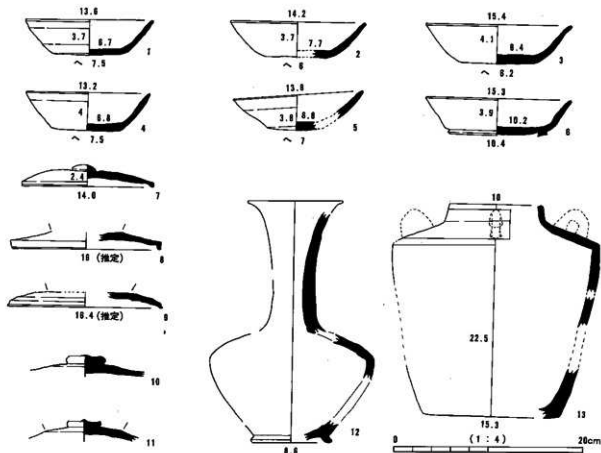
構造および構築工程：基礎部は、地山の斜面を緩やかに削平している。この削平面上には5cm前後の斑岩や5～10cmの泥岩が細粒砂土に混じり込むブロック状の層を伴うなど荒い整地が成されている。この層を「土台」とし、石室および墳丘を形造る。石室石組下部層にあたる層は、3cm角の泥岩が多量に混入し、硬く版築されたような状況が複数層で認められる。石室壁を構成する礎は、この上面に10～20cm大の平石を挟み込み固定している。奥壁の根石は平積と解釈される。しかし、左側壁を構成する根石はいずれも割石で、幅広いタイプであるもの礎上面の様子より二段目以上は平積を基本としていると推定される。ただ、一部に横積の状態をとどめていることも確かである。裏込め石・裏込め外壁・外護列石は残存しておらず、不明である。が、その下部より14号～17号土坑や溝状の落ち込みに初期造成の過程が読み取れる。

なお、石室奥壁一部を構成する巨礎が玄室内に崩れ落ちそれに伴う裏込め石が倒壊する。この状態については、後世に耕作のための落とし込みが考慮される。ただ、敷石とこの巨礎との間に堆積土はほとんど見られないため、天井石が削平された後比較的早期に生じたものと判断される。が、あくまで推測の域はでない。巨礎は、クサビ痕が数箇所みとめられており、石室構築時の加工痕と判断された。

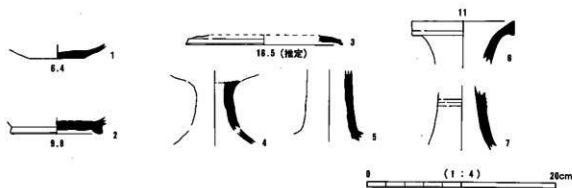
出土遺物

石室内：玄室内土器は床面より環Bの破片が出土する。この環は高台器形より7～8世紀前葉までの時間幅を持つ。羨道部からは須恵器環蓋の小破片が出土している。

第3章 大穴遺跡



第3-74図 5号墳出土土器実測図

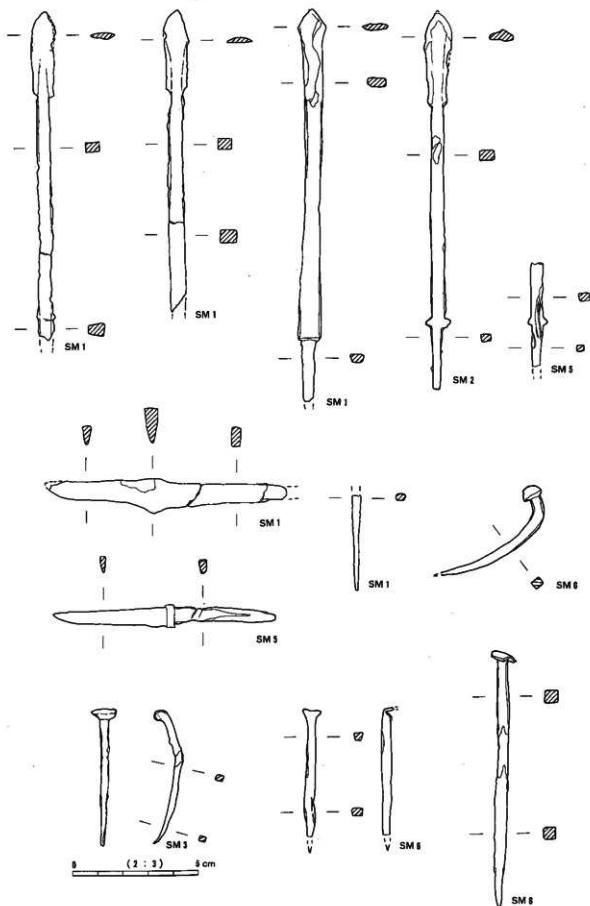


第3-75図 6号墳出土土器実測図

このほか、人骨は骨片として散乱したり腐食した状態として確認されている。この腐食した箇所の骨の残存状況は極めて悪いものの円形状を呈していることなどから頭蓋骨に相当するとの所見を得ている。このことが確かならばこの頭蓋骨は玄室内において羨道部側に位置していることになる。

石室外：想定される墳丘部からは摩滅した弥生式土器の破片のみ出土している。前庭からは坏蓋片と高坏頸部破片が出土する。ともに8世紀前葉まで限定される。また本墳南側の住居址との間より8世紀代の長頸瓶破片が出土している。出土遺物として弥生式土器の混入の割合が比較的が多い。これらは時期として弥生時代中期のものが中心で、本墳の構築以前にはここに弥生時代中期に属する遺構が存在した可能性が考えられる。石室周辺の溝および土坑の中には摩滅した弥生式土器小破片などの遺物が出土する16・17号土坑があるものの、時代は特定できなかった。

土器以外の遺物としては、鉄製品は鉄釘2点が奥壁裏面より、また鉄釘1点が北側より出土している。



第3-76図 古墳出土鉄製品実測図

これらの遺存状態は1点は折れ曲がっており、2点は直状でその内1点は先端が欠けている。これら鉄釘はいずれも石室外より出土したことになる。

(2) 出土遺物について (図版19~23・25)

遺物の出土状況は玄室部からの出土は極めて少なく、古墳前庭部側に比較的集中する傾向にある。特に2号墳の前庭部側より溝溝にかけては多く出土している。また、4号墳においては残存する羨道部側壁にかかった状態のものもあり後世の影響を感じさせる。各古墳の出土土器は須恵器が占め、須恵器坏蓋を例に取れば古墳時代から完全に脱却した器形を示す⁹⁾。この須恵器坏蓋と坏A・坏Bは、その成形と調整により分類できる。須恵器坏蓋は器形が上部から押しつぶされたようなタイプと、一見して丸身をおびるタイプに分類される。それはさらに端部の成形に加え、摘部周囲に稜線が付く粗い削り痕と丁寧に仕上げた調整に大別できた。これを丁寧に仕上げるA類、粗い削りを残すB類に分類する。また、須恵器坏A・坏Bは、底部寛削りに粗い最終調整は共通するが、各古墳別に比較すると「器高÷口径」と「器高÷(口径-内径)」の法量分布に相違が顕著に表れる(第3-3表「2・4・5号墳出土須恵器坏法量分布表」)。これらより、A類の出土比率が高い2号墳、A類にB類が混ざる4号墳、B類の出土を見る5号墳に分けられる。

なお、これらは屋代遺跡群の木簡出土の溝址より出土する細分化された土器資料と対比できる。しかし、更埴市屋代遺跡群は現在整理段階であり本報告書上においてはそれらとの比較は避けている¹⁰⁾。屋代遺跡群の報告書中に大穴古墳出土須恵器との比較を交えて詳細に記述する予定であるので参照願いたい。

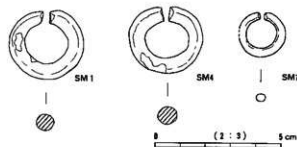
このほか、2号墳の大甕は器高71.8cm、胴部最大径は63.3cmを測る。内側は成形による青海波文が残される。また横瓶・短頸壺は古墳唯一の出土品である。3号墳玄室内出土の須恵器蓋と鉢は復元により一組の可能性が指摘される。5号墳出土の長頸瓶は古墳からのタイプで、壺Bは岩崎41号窯式に器形が類似する。これらはいずれも古墳の築造の時間幅に納まる。人骨は、2号墳を除き確認されている。その遺存状態は、良好ではないがいずれも玄室内からのものであった。

銅製品は、耳環が1号墳と4号墳の周辺部より出土している。いずれも古墳石室内からのものではない。この耳環は最大径が2.7cmで共通し、1号墳のものは鍍銀を認める。なお、7号集石址より出土した耳環は鍍金が一部に残存している。最大径は1.7cmと前述の耳環のものと規模が異なる。

鉄製品は、鎌・刀子・釘が出土している。鉄鎌は1号墳より3点、2号墳より1点、5号墳より1点出土している。身部から篋被部にかけての形状により2種のタイプが認められる。切先から基部端をとどめるものは全長15cmを測る。刀子は1号墳より1点、5号墳より1点出土している。5号墳のものは、鉤元に銀製刀装具が付き、茎部には木質が残存する。全長9.1cmで、身部5cm、茎部4.1cmを測る。また鉄釘は、3号墳より1点、6号墳より3点出土している。断面角形、頭は造り出して布状としたものを折り曲げる。6号墳のものは全長10.4cmを測る。ただ、いずれも石室内から出土したものではない(土器以外の出土遺物については第3-2表「大穴古墳内容表」の出土遺物の欄を参照)。

馬具と太刀は、本古墳群内においては認められていない。また、勾玉・管玉など玉類は土囊640袋を篩にかけたが1点も認められていない。

このほか遺構外遺物として、縄文式土器・弥生式土器が混入品として出土している。この内、3号墳の盛土中の弥生式土器は個体として良好な遺存状態を保っており、これらは古墳構築以前の遺



第3-17図 耳環実測図

構の存在を強く示唆する資料といえる。

なお、4号墳玄室覆土中より内黒の坏1点の出土を見るが追葬の根拠を示す遺物として処理していない。

(3) 小 結

調査区内の大穴古墳群はまばらな状態を呈しているものの、いずれの古墳も奥壁を森將軍塚側に配置させ、石室全長を主軸とした主軸方向に共通性がある。1号墳の石室全長は9.16mを測り、2号墳から6号墳はおおよそ5～6mの範囲内に納まるものと思われる(第3-1表「石室計測表」)。墳形は1号墳の楕円形や2号墳の円形が基本形といえる。周溝は2号墳に認められ1号墳には無いが、そのほかは判断材料に乏しい。墳丘を形成する基礎部は石室直下まで地山斜面を段台状に削平し、版築状の堅い層を幾重にも重ね造成する。石室外は裏込め外壁が廻り、その外側を外護列石が回る構造は共通する。全体的に右側壁側で大型礫の利用比率を高め、軟弱な谷側を安定させる配慮が窺える。この点は、石室石組根石に使用した礫に対してもあてはまる。1号墳は裏込め礫に角礫による乱積みを見るが、それ以外は盛土中心で裏込め礫は極端にその使用を避けている。この点が周溝の有無に関係する構造の相違かはわからない。

石室の構造面では1号墳以外の2号墳から6号墳は両袖型横穴式石室の形式で、玄門部は1号墳以外で明瞭である。闕石は1号墳以外で認められ、玄室側に2号・6号墳、羨道側に3号・4号墳、玄門左右立柱石中心を結んだ線上に5号墳が位置している(第3-2表「大穴古墳内容表」)。入口付近に羨門部がないため、扉石はなく、羨道部中に石塊を詰め込んで内外空間を仕切り閉ざす。

石室の基盤は、2号墳では黄褐色土の硬い地山上に直接固定している。が、ほかでは泥岩細粒砂土の混じりあるいは幾重にも重ね硬化させ版築状に踏み堅めた層上に石室石組根石を設置している。石室奥壁、側壁の礫には割石を使用し、側壁から奥壁は平積を基本とする。敷石は石英斑岩と泥岩により構成される。

なお、本古墳群の築造時期、ほかの古墳との比較については「成果と課題」の項でふれている。

註

- (1) 横穴式石室の構造名称については統一名称とし、奥壁に向かって「左・右」を付けることで便宜をはかることとした。この構造は基本的には〔宇賀神祇司 1995 「寄山古墳の調査」〔寄山〕佐久市教育委員会〕にしたがっている。石室内を「玄室部」と「羨道部」とに区分し、その境の左右玄門で挟まれた空間を「玄門部」としてあえて独立させた。このほか、石室内寸法は内法寸法として処理している。石室上層部は後世の削平や上層の土圧などの影響を受けているため不動の位置とは言い切れず、石室構築時の基礎に近い根石と床面(敷石)の接線を基にして測定した数値を基礎算定値として使用している。玄室と羨道の対称性については、闕石は玄室側と羨道側あるいは玄門上に位置し、また後世の移動を示唆する事例もあるため、玄門左右立柱石中心点を結んだ線を境として分けている。
- (2) 「第一次墳丘」とは、石室構築工程と同段階に含める。その目的は、石室を守るためのものである。これに対し「第二次墳丘」とは、墳丘外観の仕上げを目的とし、第一次墳丘の盛土を覆うためのものとされる。本誌では〔泉藤 1983 「封土の積み方と葺石の敷き方」 季刊「考古学」第3号 雄山閣出版〕ほかを参考としている。
- (3) 礫の積み方などの名称については、〔尾崎喜左雄 1977 「上野国の古墳と文化」 尾崎先生著書刊行会 朝日印刷工業〕に従った。
- (4) 長野県立歴史館フォーラムを参考としている。資料集は下記のとおり。
小林秀夫 1995 「最新発掘調査成果 大穴古墳群・屋代遺跡群」〔第1回 シナノクニから科野・信濃国へ 資料集〕 主催：更田市教育委員会ほか
- (5) 西山克己ほか 1995 「信州の6世紀・7世紀の土器様相」〔東国土器研究〕第4号 東国土器研究会
- (6) 鳥羽美穂 1996 「各水田面対応層出土の土器」 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書23〔長野県屋代遺跡群出土木簡〕 助長野県埋蔵文化財センター

主要参考文献

- 助長野県埋蔵文化財センター 1994 「大穴遺跡」〔長野県埋蔵文化財センター年報10 1993〕

第3-1表 石室計測表 (m)

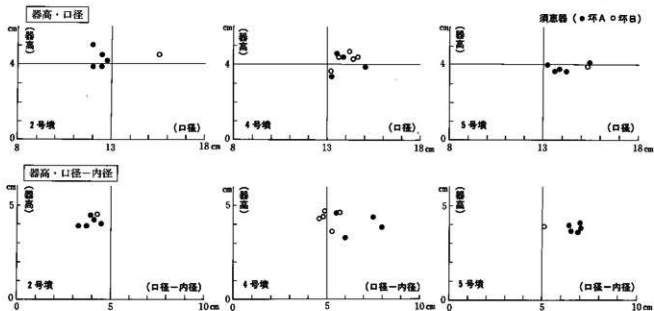
古墳 番号	石室全長			玄室部			玄門部			羨道部			入口部			石室全長比 玄室長/羨道長					
	長	幅	高	長	幅	高	長	幅	高	長	幅	高	長	幅	高						
1号	9.16	7.86	1.70	(1.00)	/			/			1.30	(2.00)	—	/							
2号	5.34	2.45	1.47	(1.92)							0.20	0.84	(0.70)		2.47	1.05	(0.70)	0.22	—	—	2.64/2.70
3号	(3.60)	2.35	1.45	(0.64)							(0.30)	—	—		(0.90)	(1.10)	(0.40)	—	—	—	2.50/—
4号	5.35	2.05	1.37	(0.80)							0.23	0.78	(0.54)		2.50	0.90	(0.80)	0.57	1.20	—	2.22/3.13
5号	(5.83)	3.50	1.70	(0.42)							0.40	0.85	(0.38)		(2.06)	—	(0.50)	—	—	—	3.66/—
6号	(4.20)	3.08	(1.80)	(0.70)							0.30	—	—		(0.80)	—	(0.45)	—	—	—	3.20/—

石室全長比以外は内法(うちのり)寸法。()内は現存最大値を表す。〔 〕は推定。—は測定不能。

第3-2表 大穴古墳内容表

古墳 番号	墳丘部		石室部		出土遺物(土器以外)		
	墳形	周溝	型式	玄門腐石	石室内	石室外	
1号	楕円形	無し	無袖型横穴式石室 と推定すべきか	/	鉄鏃3点・刀子1点・不 明鉄製製品1点・人骨	耳環1点	
2号	円墳	有り	両袖型横穴式石室		玄門玄室側	無し	鉄鏃1点
3号	不明	不明	両袖型横穴式石室		羨道側	人骨	鉄釘1点
4号	不明	不明	両袖型横穴式石室		羨道側	人骨	耳環1点・馬骨
5号	不明	不明	両袖型横穴式石室		玄門上	鉄鏃1点・刀子1点・人 骨	無し
6号	不明	不明	両袖型横穴式石室		玄室側	人骨	鉄釘3点

第3-3表 2・4・5号墳出土須恵器坏流量分布表



第3-4表 大穴古墳分類表

	1号墳	2号墳	4号墳	3号墳	5号墳	6号墳
石室形態 (S=1/20)						
出土土器						
出土鉄製品・銅製品						

第6節 平安時代の遺構と遺物

1 遺構

(1) 竪穴住居址

1号住居址 (SB1、グリッドI X-18・19) (第3-9図, 図版13)

検出遺構: 本址はB地区北端の緩斜面中位に位置している。検出当初、南壁にカマドの石組みが露出した一軒の竪穴住居址と思われた。しかし調査の結果、三軒の住居址が重なり合い、本址が10号住居址(弥生時代)と9号住居址(平安時代9世紀後半)を切る最も新しい住居址であることが判明した。プランはほかの二軒と重なるものの、9号住居址とは南西側に40~60cmほどずれて位置している。検出時に露出していたカマドの石組は本址のもので、両脇の袖部は残るものの、支柱石はない。カマド周辺からは、華大を含めた礫三十数個が出土した。いずれも石質は花崗岩である。焼土や炭化物も明瞭に残される。覆土は褐色土で、2~3cm大の礫を含む。

出土遺物: 覆土中より灰輪陶器皿と羽釜が出土している。ほかに釘と思われる鉄製品1点、炭化物、わら炭が出土している。

3号住居址 (SB3、グリッドII E-6, II D-10・15) (第3-8図, 図版2)

検出遺構: 本址はB地区中央やや東寄りに位置する。グリッドII D-T08をほぼ中心とした一辺3.6mの規模の竪穴住居址であり、その西側外回りの輪郭の不整形な遺構が遺構番号を設けていない弥生時代の住居址である。床は全面的に堅い。カマドは検出されていない。壁はやや傾斜して立ち上がっているが、遺構の東側壁は削平される所がある。主柱穴と思われるピットが3箇所(P8~10)、そのほかに5箇所検出されている。いずれにも柱痕はない。これらのピットは遺物等資料に乏しく、その性格は不明と言わざるを得ない。なおP11は出土遺物より弥生時代の住居址に属するものとして処理した。

出土遺物: 覆土中出土の土師器環、甕が時代決定資料である。また獣骨としてウマの歯骨が出土する。その他、P13付近から埴が、また覆土中より高坏の脚部が3個体分出土しているが、古墳時代の土器が混入したものと思われる。ほかに、軽石の出土を見る。

11号住居址 (SB8、グリッドI S-3) (第3-78図, 図版13)

検出遺構: 本址はA地区北端部、つまり調査区最北端に近い緩斜面下部に位置する。遺存状態は南西部が後世の影響によりやや崩されている。隅丸の正方形に近い3.2×2.8mの小規模の竪穴住居址である。重複関係は、13号住居址の覆土をくり抜く状態で切り込む。覆土は暗褐色(7.5YR3/3)土一層で、礫の混入が多く、ブロック堆積が見られず自然埋没と解釈した。床は13号住居址と同レベルに位置する。その床面は全面的に堅く、地山が露出し貼り床ではない。壁は13号住居址の覆土中を掘り込むため脆く、南西隅は崩落した様相を示し不明瞭である。カマドは北側の壁沿いに石組の痕跡があり、周辺より焼土も検出されている。なお、柱穴や周溝等ほかの施設は検出されていない。

出土遺物: 全体的に出土数量は多い。カマド跡からは土師器環、須恵器小瓶、黒色土器碗などが、またカマド脇より砥石1点が出土している。ほかに、覆土中より灰輪陶器(高台のみ)と羽釜口縁部が出土している。そのほか、鉄製品では釘3本と鐙と思われるものが1点出土している。

9号住居址 (SB9、グリッドI X-18・19) (第3-9図, 図版13)

検出遺構：本址はB地区北端の緩斜面中位に位置している。三軒が重複関係にあり、10号住居址（弥生時代）を切り、1号住居址（平安時代）に切られる。平面形状はこの重複関係のため、明瞭には確定できていない。覆土は上部を切る1号住居址の影響が考えられるが、褐色土で土器片を多く含んでいた。カマドは遺構の南端にそれと推定される形跡が認められ、炭化物が伴っていた。

出土遺物：覆土中より灰釉陶器と内黒土器が少量出土している。床面上の木炭の間から刀子が1点、南西部より鉄製紡錘車が1点、それぞれ出土している。

12号住居址（SB12、グリッドII C-5・9・10）（第3-78図、図版13）

検出遺構：本址はB地区西側の緩斜面中位に位置する。重複関係にはないが、本址のほぼ中央のカマド寄りの3箇所、近年の耕作による擾乱の影響が見られた。谷側方向の北東部は後世削平され、遺存状態はよくない。残存率の高い山側の一边は約5mを測り、その形状より隅丸方形の竪穴住居址と推定される。覆土は暗褐色土一層で、小礫が混じる軟質土の自然埋没である。床は地山が露出し堅く、貼り床は認められない。床面の所々に炭化物が混入していた。壁は谷側方向の北東部を除いて明確で、緩やかに立ち上がる。カマドは南西隅の壁沿いに位置し、石組カマドの痕跡をとどめている。焼土・炭化物も伴出している。特にカマド中心部に位置する焼土は、赤橙色の粘土と灰褐色土と黄褐色土が混ざり、その下部層には5-10cmの厚みで硬化した焼土が一部に青灰色の部分を残して確認されている。床上にビットは7基検出されている。P2・P3・P4・P5・P7の平面形は不整形で、深さはそれぞれ12・6・9・10・12cmである。また、本址中央よりやや西のP1の規模は平面約110×50cmで、床面からの深さは21cmであった。P1の覆土の上部は炭化物と小礫混じりの灰褐色土で、下部は粒子が粗く締まりのない黄褐色土であった。ほかのビットとは明らかに性格が異なるものと思われるがその用途は不明である。また、西隅壁沿いのP6はP1につく規模で、深さは同じく21cmを測る。その覆土は炭化物混じりの暗褐色土で、これといった遺物はなく性格は不明である。これらのビットは平面形に柱穴としての規則性はなく、またいずれのビットからも柱痕は認められていない。周溝はカマド脇から南西壁沿い北西壁沿いにかけて巡らされていた。南西壁沿いの周溝内には小礫が多く含まれていた。

出土遺物：全体的に極めて少量である。カマド内より羽釜と土師器片が出土している。そのほかの遺物では、鉄製の紡錘車の軸が床面直上より1点出土している。また、獣骨としてウシの歯骨が出土する。

13号住居址（SB13、グリッドI S-3）（第3-78図、図版14）

検出遺構：本址はA地区北端部に位置している。規模は約4.4×4.0mの隅丸方形の竪穴住居址である。重複関係は、8号住居址により覆土の大半が切り込まれる。残存する覆土は暗褐色（7.5YR3/3）土一層で、8号住居址と同質の覆土を基調とし、礫の混じりが少量な点に相違があり、分層することができた。床は全面的に堅く、地山が露出している。壁は全面にわたり明確で、ほぼ垂直に立ち上がる。カマドは、西隅コーナーの壁沿いに位置し、石組カマドとして確認した。焼土はカマドの前庭と東隅コーナー近くの床面から検出されている。周溝はカマド脇の北西側壁沿いで検出されているが、ほかの壁沿いには認められなかった。柱穴およびビットはなかった。

出土遺物：覆土中からの土器破片の出土が多い。主なものとして土師器環、灰釉陶器、ロクロ小型壺がある。ほかには、鉄製刀子が1点と炭化物が出土している。

16号住居址（SB16、グリッドII C-5・10、II D-1・6）（第3-78図）

検出遺構：本址はB地区西側の緩斜面中位に位置している。重複関係はない。本址の遺存状態は後世の

畑耕作の名残と見られる黄褐色土の畝に伴う跡が南北に3本走っていることから削平が明らかで、壁はその姿をとどめず床面も不明確である。このため、覆土は耕作土により攪乱される。しかし、周囲の地山との土色の相違とその北西境にカマドの焼土が検出されており、床面が4.0×3.6mの隅丸長方形の竪穴住居址を想定した。石組などは残存せずピット・壁・周溝は検出されなかった。

出土遺物：遺物量は極めて少ない。覆土中より須恵器坏底部片が出土している。このほか、縄文・弥生時代の土器もわずかに出土しているが混入と思われる。

17号住居址 (SB17、グリッドII E-16-17) (第3-11図、図版14)

検出遺構：本址はB地区東側の緩斜面中位に位置している。本住居址は4号住居址(弥生時代)の南壁沿いに本址の床断面を認めたことにより調査におよんだ遺構である。このため、本址南側と東側を残し五分の四程度を失った。重複関係は南に近接する18号住居址(弥生時代)とこの4号住居址を切り込むことになる。平面形状は残存する部分から隅丸方形の竪穴住居址であると想定される。覆土は自然埋没で暗褐色土一層であり、拳大の礫を少量含んでいた。床は全面的に堅いが貼り床ではなかった。南壁沿いの床面上から炭化物がまとまって出土している。壁は明瞭で、緩やかに立ち上がっていた。カマドは、南東隅壁沿いに石組カマドとして焼土とともに検出された。ピットは南壁沿いに2基検出された。P1は60×40cmの規模の楕円形で床面からの深さは9cm、P2は35cmほどの細長い窪みであった。いずれもその性格は不明である。周溝などの施設は検出されていない。

出土遺物：土師器坏、須恵器甕が出土している。遺物量は少ない。カマドの中の床面直上より炭化物が出土している。

20号住居址 (SB20、グリッドII J-1) (第3-78図、図版14)

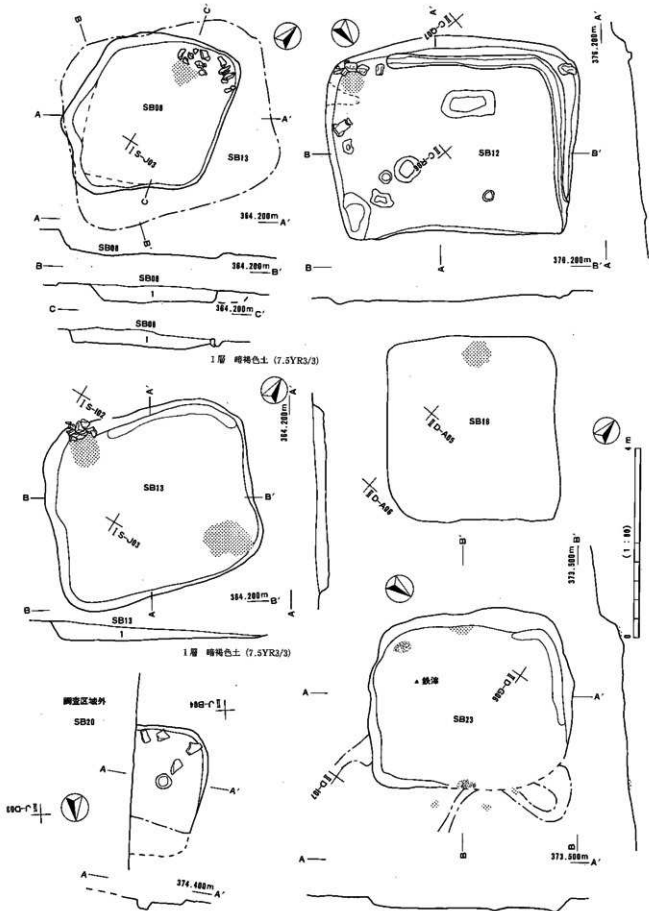
検出遺構：本址はC地区北東端部に位置している。本址の東側は調査区域外へ延びるため、また北側は削平のためその全容は不明である。残存部から隅丸方形プランの竪穴住居址と推定される。重複関係はない。覆土は、黒褐色土一層であった。床は貼り床ではなく、全面堅い。床面上には炭化物の粒が所々飛び散った状態で検出された。壁は西側と南側に見られほぼ垂直に立ち上がる。カマドは、床面上に焼土は見られず、南壁沿いの石英斑岩質の角礫に火床が見られることからこの近辺に存在したものと推定した。ピットは残存する床面の中央からI基検出された。直径30cmほどの円形で、床面からの深さは約20cm、柱穴と思われるが柱痕はない。周溝など、ほかの施設は検出されていない。

出土遺物：出土土器の量は極めて少ない。内黒土器片1点が時期決定の資料となった。

23号住居址 (SB23、グリッドII D-7) (第3-78図、図版14)

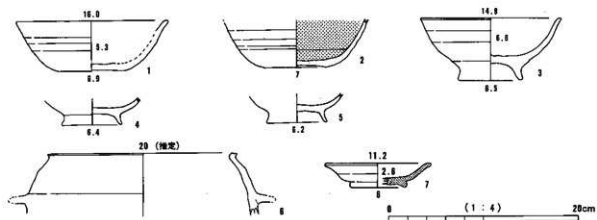
検出遺構：本址はB地区中央やや北西寄りの緩やかな崖斜面の中ほどに位置している。平面形状は約4.3×3.7mの隅丸方形の竪穴住居址である。北東側(谷側)は6号墳に伴う溝を切っている。覆土は暗褐色土一層で、焼土炭化物が散見し、人頭大の礫6個が出土している。床は全面的に堅く、貼り床ではない。壁は北隅から北東壁の一部にかけて削平されているものの、ほかの住居址に比べ比較的遺存状態は良好である。この壁面は緩やかに立ち上がる。カマドは南西壁沿い中央の焼土によりその位置を認める。また南隅に広がる炭化物・焼土の範囲は、このカマド利用時についた炭出しの痕跡と解釈した。さらにこれと反対側壁沿いにも焼土および炭化物の痕跡を認めたが、これをカマドとすれば、前者と2箇所にかマドが存在していたことになる。周溝は北西壁から西隅沿いにかけて見られた。ピットは検出されなかった。

出土遺物：土器の出土量は多い方である。主なものは土師器坏・内黒土器・土師器甕・灰輪陶器片など

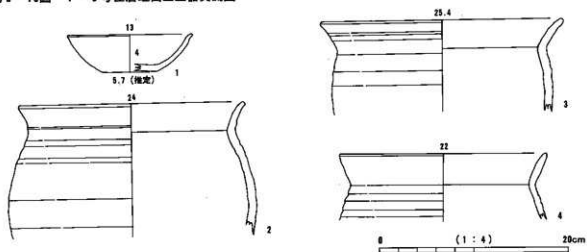


第3-78図 住居址平面およびセクション図(6)

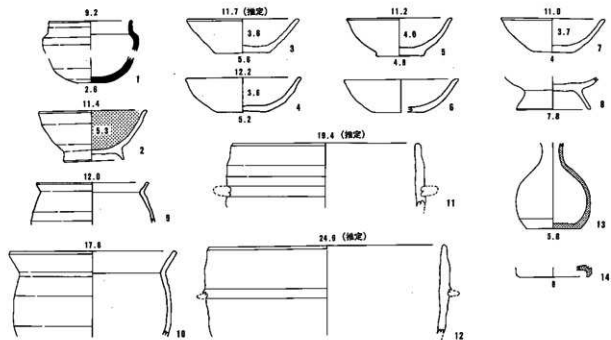
第3章 大穴遺跡



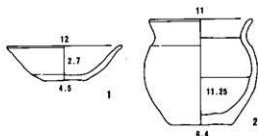
第3-79図 1・9号住居址出土土器実測図



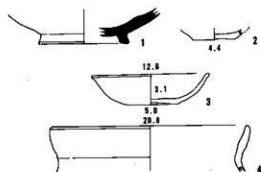
第3-80図 3号住居址出土土器実測図



第3-81図 8号住居址出土土器実測図



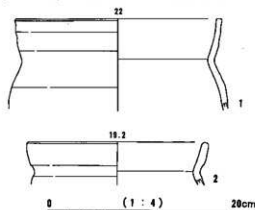
第3-82図 13号住居址出土土器実測図



第3-83図 17号住居址出土土器実測図



第3-84図 20号住居址出土土器実測図



第3-85図 23号住居址出土土器実測図

である。弥生式土器の細頸壺の底部が混入する。また本址の床面直上中央南東寄りから鉄滓が1点出土している。

2 遺物

(1) 出土土器について (第3-79~85図, 図版23・24)

平安時代に属する遺構より出土した土器はそれほど多いものとはいえなかった。これは傾斜地に立地することと環境にも起因するものと思われる。出土遺物により各遺構の時代を総合的に判定すると、9号住居址は内黒土器により9世紀後半に位置付けられ、この住居址と重複する1号住居址は丸石2号窯式の灰釉陶器皿と羽釜により10世紀後葉以降に属する。また重複する8号・13号住居址により10世紀前半にも重複がある。これら以外の遺構は出土遺物より平安時代に比定されるものの、より絞り込むには出土資料に乏しい。

(2) そのほかの出土遺物について

石製品等 (第3-86図, 図版24)

砥石：8号住居址より出土している。石質は砂岩で、二面に砥面を持っている。ともに面構成とする小型砥面を上にし全長12.4cm、最大幅6cm、厚さ6.2cmを測る。

軽石：3号住居址の覆土中より出土している。表裏二面に敲打部(凹部)が一面あり剃面部が欠損している。

用途不明の石製品：6号墳より変朽安山岩(プロビライト)が出土している。混入品と解釈している。この石製品の全長は15.2cm、最大幅6.2cmを測る。欠き

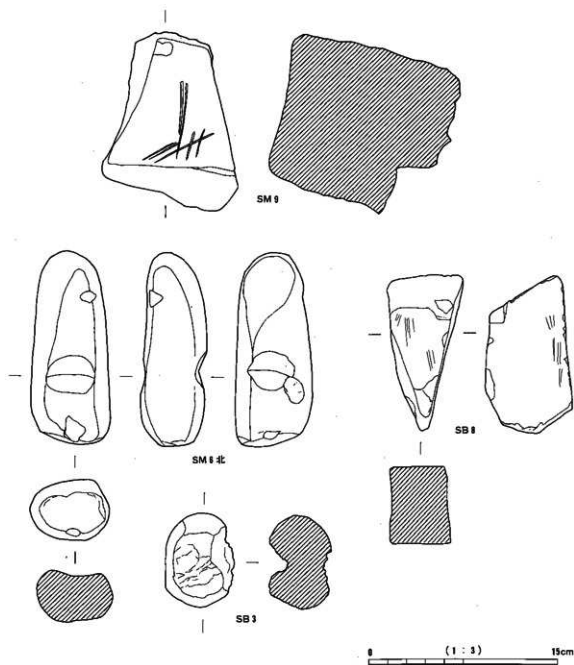
込み側の面を下面とした石槌であろうか。なお、対称とする二面の内部への深い欠き込みは、装着部位であろうか。

鉄製品等 (第3-87図, 図版25)

刀子：10号・13号住居址の覆土中より確認されている。双方とも刃部側寄りの柄部より二分割されている状態にある。この内、10号住居址のものは、身部に木質部が残存する。また、13号住居址のものは、身部切先から基部端部までほぼ残り、全長13.4cm(内、身部6.1cm)を測る。

紡織具：9号・12号住居址より出土している。9号住居址のものは2個一連となるが、紡錘車(紡輪)まで残存している。紡錘車の最大径は4.3cmを測る。また12号住居址のものは、軸部(紡茎)のみで紡錘車は欠損している。双方とも完形品ではない。

鉄釘：1号住居址より変形した状態の鉄釘が1点、また8号住居址覆土中より3点出土している。



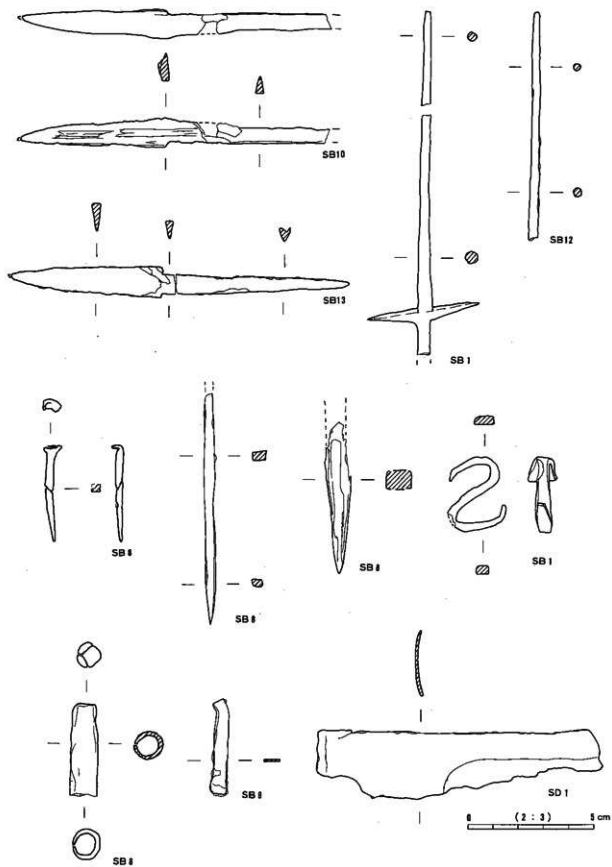
第3-86図 奈良・平安時代の石製品実測図

用途不明鉄製品：8号住居址覆土中より出土したものは、1枚の鉄板を巻きくめサック状にしたもので、銅類には該当しないかもしれない。形状寸法は全長3.2cm、上端部径0.9cm、下端部径1.15cmを測る。また、11号住居址と1号溝址より板状のものが出土している。11号住居址のものは混入品と思われ全長4cm、幅0.65cmを測る。1号墳のものは全長11.2cmで幅2.8cm、湾曲した凸面に層状の押し跡がある。いずれも用途は不明である。

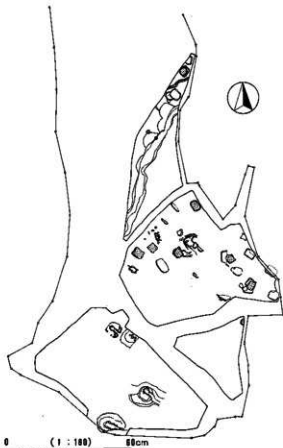
鉄針：23号住居址床面直上より1点出土する。ほかからは確認されていない。

3 小 結

平安時代の住居址の存在は、古墳の構築が終了して以来150年ほど経て、再びこの地域に集落が営まれたことを示す。その集落は、出土遺物より9世紀後半から11世紀初めころにわたり営まれていたことになる。集落は弥生時代と同様に標高375m以上には遺構として検出されておらず、住居址10軒のうち7軒は



第 3-87 图 集落城出土铁制品实测图



第3-88図 平安時代遺構分布図(網掛け遺構)

炭化物を伴うことが多かった。カマドに伴う土器は、8号住居址と12号住居址で見られるが数量はわずかである。床面にピットが検出された例は4例。それが柱穴と明らかになったのは3号と20号住居址であったが柱痕はない。なお、12号住居址のピット7基は、その性格を明らかにできなかった。周溝が検出された例は3例である。この内、12号・13号住居址ではともにカマド脇の壁沿いに周溝が巡る。

この集落と歴史的環境を結び付けるものは、888年(仁和4年)の千曲川大洪水である。同年5月8日、原因不明の山津波から千曲川があふれ大洪水が発生し、田畑はもとより官舎や民家をも飲み込み、被害は佐久・小県・更科・埴科・高井・水内の6部に及んだ¹⁾。当時は仁和の大洪水以外にも千曲川は荒れていて、たびたび水害を引き起こしていた²⁾。眼下に展開していた後背湿地の水田地帯(更埴系遺跡)とそれに付随していた平坦地の集落が水に沈んだことは考古学的調査によりすでに明らかである。しかし、大穴遺跡の集落との関連性をどのように位置付けるかは今後の課題といえよう。

註

- 1) 長野県史刊行会 1989『長野県史 通史編 第一巻 原始・古代』p.766
- 2) 前掲書のp.768には「一般に9～10世紀は天候不順が多く、県下各地で洪水や氾濫が繰り返されていたことが考古学の上からも知られる。」とある。さらに、「[信州の4億年]編集委員会編 1994『大地が語る信濃の4億年』郷土出版社)所収の塚原弘昭『善光寺地震はまた起こるか』によると、887年に八ヶ岳の水蒸気爆発により千曲川がせき止められ、その後大洪水が発生したとある(p.98)。

B地区(緩斜面中部)、2軒はA地区(緩斜面下部)、1軒はC地区(B地区と農道を隔てた北側緩斜面)から検出されている。平安時代の住居址同士の重複は2例があり、B地区の住居址は弥生時代の住居址とも切り合っていた。それらの住居址は17号住居址以外はみな等高線沿いに長軸を持ち「北西-南東」方向の隅丸方形を呈していた。住居の規模はおおむね4.5m×3～4mで、最大は12号住居址の5×4.5m、最小は8号住居址の3.2×2.8mを測る。覆土はA地区の8号住居址と13号住居址では暗褐色(7.5YR3/3)土一層である。B地区でも12号・17号・23号住居址は暗褐色土一層であった。B地区の1号・9号住居址の覆土はともに褐色土で、C地区の20号住居址は黒褐色土一層であった。

カマドは3号住居址を除く9軒から検出できた。カマドの位置は住居の南東隅(3例)、南西隅、南壁沿い、北西壁沿い、西隅壁沿い、北側壁沿いにより統一性はない。カマドの石組みが多少なりとも残っていた例は6軒で、焼土や

第7節 近世の遺構と遺物および時代不明遺構

1 中世以降の遺構と遺物

本遺跡の調査範囲内において存在する中世以降の遺構としては、2号・3号土坑であった。いずれもA地区に位置する。その内容は下記のとおりである。

2号土坑 (SK 2、グリッド I R-20, I S-16・21) (第3-89図)

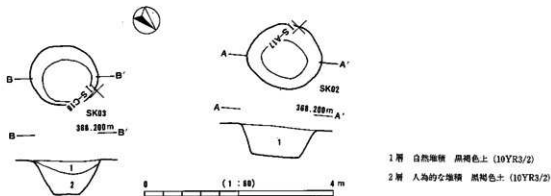
検出遺構：平面形は楕円形で、深さは検出面 (III層上面) より約65cm。全体として摺鉢状を呈する。本址と同時期の3号土坑が南東側約3m離れ隣接して位置する。双方ともほかの遺構覆土とは全く異なり、7号集石址と1号溝址の埋没以降に構築されている重複関係にある。

出土遺物：本址に伴う遺物は、腐食の度合が極めて強い缶詰1個体分のみである。このほか、混入の摩滅した弥生時代の土器小破片が少量出土した。

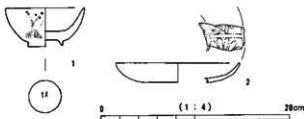
3号土坑 (SK 3、グリッド I S-21) (第3-89図)

検出遺構：本址は、2号土坑とその形状が同様で、また覆土も類似しており同時期の遺構と判断した。深さは72cmほどと2号土坑よりやや深い。

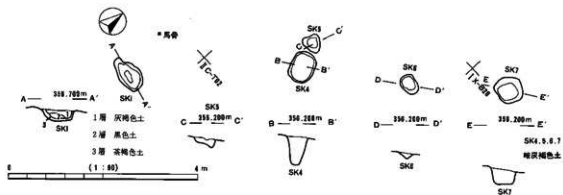
出土遺物：本址に伴う遺物は出土していない。混入遺物として弥生時代土器の小破片が少量出土する。



第3-89図 2・3号土坑平面およびセクション図



第3-90図 遺構外出土近世陶磁器実測図



第3-91図 1号・4～7号土坑平面およびセクション図

〈遺構外出土遺物〉(第3-90図)

遺構外からの出土遺物として確認されたものは下記のとおりである。

近世陶磁器として伊万里焼などが6号墳北側より表採されている。また、幕末以降の陶磁器の皿破片が1号墳床面より出土している。このほか、11号・26号住居址の検出面より近世陶磁器の小破片が出土しているが、いずれも極めてその遺存状態が悪くその存在を示すにとどめる。

2 時期不明遺構

1号・4号～7号土坑 (SK1・4～7、第3-91図)

検出遺構：これらの土坑は櫛列の集合体と判断した。

出土遺物：4号と6号土坑より少量の弥生式土器破片が出土しているが、時期を決定できる資料ではない。

第8節 成果と課題

1 集落域

遺構の現状

大穴遺跡は、緩斜面上に立地する。近年は畑地として造成がなされ、所によりこの耕土層（基本層序I層）がII層を掘り抜きIII層にまで達する。それは地表下基盤層まで平均30cm前後と浅いことによる。検出された竪穴住居址などは、その谷側（北側）が全般的に削り取られる遺存状態にあり、この環境が起因したものと見える。

（縄文時代）

このような状況にあっても本調査区域内では、縄文時代の早期・前期・中期中葉・晩期の土器や石器、さらに条痕文土器の散布をわずかながら確認している。しかし弥生時代中期以前の遺構は一切検出されておらず、これらに伴う遺構が調査区域外に存在することを示唆する資料に過ぎない。なお、1号溝址出土の縄文時代早期の土器は、混入と解釈している。

（弥生時代）

本調査区域内に人為的痕跡が印されるのは、弥生時代中期の集落が最初である。この弥生時代中期の集落は大集落ではないものの、新たな集落址として位置付けられる。

水と遺構

この大穴遺跡の立地は、扇状地として水利が考えられ、大穴古墳築造前後にあたる1号溝址やそれ以前の14号溝址はその影響を考慮すべき遺構である。古墳時代はこの14号溝址のみ存在する。この溝址は出土遺物より祭祀的な性格が推察でき興味深い。また、1号溝址に重複する7号・8号・9号集石址は、路線用地内西側の尾根（発掘調査時は農道及び採石場）伝いに沿う沢を意識した1号溝址との関連性が持たれる特異な遺構である。また、集石址より出土した獣骨はいずれも1号溝址側に位置し、相互の関連性が指摘される。この獣骨は馬の生骨と鑑定される。今後の類例の発見および確認に期待したい。なお、7号集石址より銅製の耳環が1点出土している。この点については、1号墳と4号墳の周辺より出土した銅製耳環との関連性が持たれる。

（平安時代）

平安時代の集落址は、弥生時代の集落と同様に小規模にまとまる。検出された竪穴住居址は、おおむね9世紀後半～10世紀に納められる。土器以外の出土遺物は、刀子・鉄釘・紡錘車などの鉄製品が比較的に多い。

（中世以降）

また、中世以降は畑地化が進み居住域としての痕跡は認められていない。遺構は近世期のゴミ穴と思われるもの2基のみで、遺物は近世陶磁器がわずかに散布する程度である。

2 古墳群

古墳の立地

調査区内における大穴古墳群の所在は、時代を追って山手より下る傾向にあり、各古墳の主軸方向は等高線に沿い地形上の制約が作用したといえる。

古墳の形態と時期

石室全長が9mを超える大穴1号墳は大型横穴式石室の範疇にあるものと思われ、2号墳以下とは区別される。その石室形態は、無袖型または片袖型横穴式石室と推定される1号墳と、両袖型横穴式石室の2号墳～6号墳に分類され

る(第3-2表「大穴古墳内容表」)。1号墳は時期を断定する遺物には乏しいが、2号墳以下と異なる石室形態は7世紀後半の築造と推定される。これに対し2号墳以下の古墳は、相互に類似する両袖型横穴式石室の形態を持ち、玄室の全長と幅の「玄室比率による時期的傾向」^[1]によっても大差ない(第3-1表「石室計測表」の玄室部の欄参照)。これらの築造時期は、出土遺物より8世紀以降に相次いで構築された可能性が指摘される。その時期区分には、須恵器環蓋・環の成形と調整の特徴を比較し分類したものを編年資料とし、A類の2号墳、A類とB類が共存する3号墳・4号墳、B類の5号墳に分け大穴古墳における石室形態の時期的な序列化を試みた。これらの土器は各古墳別の「器高÷口径」と「器高÷(口径-内径)」の法量分布表からもその傾向が表れ、2号墳と5号墳は明瞭に区分されることが分かった(前述の「古墳群、出土遺物について」の項参照)。第3-4表「大穴古墳分類表」は、これを基に左側の1号墳から右側へ2号、4号、3号、5号、6号墳の順に新しくなる新旧関係を想定し位置付けたものである。

石室全長が9m以上の大型横穴式石室は、長野県内でも8世紀代に築造された例はない。また、石室形態に加え墳丘構造の相違は、2号墳より下らないことを示している。このため、大穴1号墳の築造年代はどんなに下っても7世紀末となる。2号墳以下の石室形態については、玄室部側壁が3号墳までの胴張りから、5号墳の玄門部での極端な折れ曲がり、6号墳の直線的へと変化を見せる。また、5号墳・6号墳に見る玄室の大型化と、5号墳の玄門部に見る側壁の突出による立柱石の退化などが認められる。これらは大穴古墳における石室形態の系統的な変遷過程として捉えられる。しかし、構築工程については3号墳・5号墳・6号墳の遺存状態から構造形式の情報を得るには限界があり、その分析は難しい。ただ、基礎部は5号墳・6号墳に関して、地山の斜面を緩やかに削平し石室石組み下部層は、硬く版築された複数層を認めるが、それ以前はわりと粗く整地している様子が窺える。

攪乱・盗掘

このように大穴古墳群の現状は、石室は天井部が失われ根石付近まで削平されており壊滅的な状態を呈している。これらの様相は、平安時代の集落の廃絶後に自然風化し崩壊したものではなく、畑地化が最大原因と思われる。

また、石室内の副葬品については、やはり盗掘を無視できない状況にある。例えば1号墳からの出土土器は皆無である。また、2号墳は南側周溝内に混入弥生式土器を除く一括土器が集中し出土する。が、石室内では入口部付近に若干土器の集中を見る程度で、玄室からの出土は1点もない。同様に、4号墳は石室入口部から前庭右側にかけて土器が集中し、現状の羨道石組および裏込めの外壁根石上からも出土するが、玄室内の出土はこの比ではない。さらに、4号墳の玄室内覆土中より出土した内黒の環1点は、外部からのもので、後世の人為的行為を裏付ける資料といえる。つまり、その存在によってこの古墳が、その土器の示す時期にはすでに密閉された状態になかったことになる。

盗掘は『阿不幾乃山陵記』のごとく、善光寺平では『信濃奇勝録』に現・長野市篠ノ井石川の川柳將軍塚における江戸時代の盗掘の様子が記載される^[2]。こ

のような行為はそれ以前より頻繁であったことは確かで、本古墳群も遺物出土状況等からもそのことを推察すべきであろう。

埋葬内容

前述では本古墳群の2号～6号墳に伴う土器は、8世紀前葉から中葉の前半に納められ、それをさらにA類・AB類・B類に分類した。そしてこの土器分類を基に石室形態の系統的なつながりを探り、1号墳を除く各古墳の時代的な変遷過程を位置付けた。ここではなおかつ各古墳より認められた骨の分析鑑定結果（付章参照）を踏まえ、系統付けた石室形態が埋葬方法と被葬者の様相の比較の上にかなる結び付きを持ち得たのかの判断材料とする。発掘調査により玄室内より遺骸が認められたものは2号墳以外の5つの古墳からである。それらの骨の分析鑑定の結果、1号墳からはわずかな出土量であり人骨としての確証が得られていない。が、そのほかの古墳からのものは確実に人骨として認められている。その内訳は、4号墳からは年齢15歳の男性の1体が、5号墳からは成人男性1体と成人女性1体および性別不明の成人2体の合計4体分が認められている。また、3号墳・6号墳からは頭蓋骨が主体で、これらは焼骨として鑑定される。

追葬は古墳時代後期の特徴とされる。5号墳の4体分の複葬は、その行為を強く示唆するもので、追葬古墳の存在を裏付ける。しかし、本墳の出土土器からすれば、極めて限定された期間内に追葬されたか、あるいは副葬品を伴わずに埋葬した人骨が含まれていることになる。しかし、遺存状態からは、何に起因したかは結論付けられない。これに対し3号墳・4号墳・6号墳は1体を認め、追葬を示す根拠はない。これら単葬の存在は、本古墳群内においてどのような性格のものだろうか、そして双方の埋葬形態の混在はなぜだろうか。

また、3号墳・6号墳玄室内より認められた焼骨は、火葬という行為を経た骨と推定される。とすると、3号墳の特殊な器形鉢と須恵器蓋のセットや頸部が欠落した長頸瓶と焼骨との関連性はいかかなものか。同じく焼骨を認める6号墳は、石室内外から良好な遺物は無く、3号墳のようなセット品は出土していないのはなぜか。それは後世の盗掘の影響か。これら焼骨の認められた3号墳・6号墳に対して、生骨は1号・4号・5号墳からである。ここでは特に5号墳の4体すべてが生骨であること、また焼骨と生骨が玄室内に混在した古墳がないことが注目される。



3号墳出土土器



5号墳出土土器

第3-5表 長野県内の8世紀代築造古墳

番号	古墳名称	所在地	備考
1	安塚古墳群3号墳	松本市	
2	秋葉原古墳群1号墳	松本市	
3	秋葉原古墳群2号墳	松本市	
4	三子塚遺跡群内4号墳	小諸市	骨室内も焼骨で火葬の可能性 ⁽¹⁾
5	郷土古墳群内古墳	小諸市	生骨 ⁽²⁾
6	大屋尻古墳	佐久市	
7	蛇塚A遺跡群内蛇塚古墳群内古墳	佐久市	平成6年度佐久市教育委員会調査の1基
8	英田地畑古墳	南佐久郡白田町	
9	五雲西拾貳号古墳	南佐久郡白田町	焼骨の出土
10	蛇塚古墳	南佐久郡白田町	焼骨の出土
11	大穴遺跡2号墳	更埴市	
12	大穴遺跡3号墳	更埴市	
13	大穴遺跡4号墳	更埴市	
14	大穴遺跡5号墳	更埴市	
15	大穴遺跡6号墳	更埴市	
その他：8世紀代に築造された可能性がある古墳			
	長峯古墳群内5・8号墳	佐久市	「墓前祭祀」か。「佐久市志」歴史編(一) ⁽³⁾
	一本松古墳群内1～3号墳	佐久市	詳細については未定
	下伴助A遺跡内古墳	佐久市	「佐久市志」歴史編(一)

表中の註

- (1) 宇賀神祇司氏による。三子塚遺跡群内古墳は平成10年度報告書刊行予定。また、長野県内における8世紀築造古墳の資料提供及び助言は氏によるところが大きい。
- (2) 桜井秀雄氏による。平成11年度報告書刊行予定。
- (3) 羽毛田卓也 1995 「古墳の築造」『佐久市志』歴史編(一) 原始古代 佐久市志編纂委員会

3号墳・6号墳からは鉄釘の出土がある。いずれも石室内から出土したのではないが、当初は木棺の存在を示す遺物と考えた。また玄室内の敷石は、石英斑岩と泥岩により安定した面を構成しており、木棺の設置を考慮したものと解釈した。

大 要

2号墳からは人骨は認められず、この点より被葬者の性格を窺うことはできない。しかし本墳周溝内からは大穴古墳の他の古墳に例を見ない須恵器大甕が出土する。この大甕は、出土状況から古墳構築に伴う埋葬時の利用で、復元作業時の状況から人為的に割られているものと推測される⁽³⁾。

他遺構との比較

大穴2号墳～6号墳は、出土した土器の分析からほぼ8世紀前半の時期に納まる。このため、長野県内における8世紀以降の築造を強く示唆する横穴式石室を持つ古墳と、この時期に構築された古代墓を下記に取り上げ比較する。第3-5表「長野県内の8世紀代築造古墳」には構築年代が8世紀代と読み取れる古墳を掲載した。松本市安塚・秋葉原古墳群は、終末期古墳から古代墓への移行が読み取れる複合遺跡である。事例は全国的にも極めて少ないが、終末期古墳群から古代墓群への移行期にあって、双方が重複する遺跡は存在する。このほか、古代墓の性格とする大久保B遺跡1号墳墓・2号墳墓(岡谷市)は、横穴式石室の形態である。大久保2号墳墓の遺骸は火葬とされ、木製あるいは袋などの容器に納骨したことを指摘している。この墳墓は出土した瑞雲双鸞八花鏡により8世紀前半頃の構築としている⁽⁴⁾。この墳墓の石室形態は、石室内の空間から見て遺体は納まらず明らかに火葬骨の埋葬を意図したものであって、古

墳のそれとは区別できる。ここに古墳との機能の相違が指摘される。

清水1号墳と大穴1号墳

前章の更埴市森の清水製鉄遺跡の清水1号墳と大穴1号墳はともに7世紀後半の築造と位置付けられる。石室形態はともに大型横穴式石室である。副葬品について見ると、大穴1号墳からの土器資料は皆無に等しく、清水1号墳と対比することはできない。清水1号墳の詳細は前章のとおりであるが、屋代遺跡群の溝址出土土器資料の比較からは、須恵器坏A・坏蓋の調整によりこの古墳の構築年代は前後する時期に相当する可能性がある。この古墳は玉類の出土に著しいものがあり、また直刀などの武具の出土も多い。これに対し大穴1号墳は、副葬品の中で土器が清水1号墳と同時代に属するかは不明であるが、玉類はその存在を否定することがむしろ自然である。それは石室内の堆積土や敷石上下層の土を篩にかけたが玉類は1点も確認されておらず、このことは当初より玉類が副葬品として含まれていなかったことを示唆するものといえるからである。ここに清水1号墳との相違が生じる。つまり、双方はともに終末期古墳として位置付けるが、大穴1号墳は清水1号墳において重要視された玉類の副葬を削除し、副葬品に変化がおよんでいることになる。

註

- (1) 更埴市教育委員会 1992 「史跡森將軍塚古墳」
- (2) 『阿不我乃山陵記』と『信濃奇勝録』はともに下記を参照としている。
斎藤 忠 1976 「日本古代遺跡の研究」文献編下 吉川弘文館
- (3) 接合状態を観察すると頸部より脇腹部がほぼ水平に張る箇所の特徴が特に酷いことがわかった。石器という打点を示す部分も認められ、これを人為的行為の痕跡と解釈する。
- (4) 助長野県埋蔵文化財センター 1987 「大久保B遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』1

主要参考文献

- ・助長野県埋蔵文化財センター 1993 「三子塚遺跡群」、「清水製鉄遺跡」、「大穴遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報9 1992』
- ・助長野県埋蔵文化財センター 1991 「大星尻古墳」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2 佐久市内その2』
- ・岡林孝作 1992 「長野県北部における横穴式石室の編年と系譜」『史跡森將軍塚古墳保存整備事業発掘調査報告書』
- ・遠藤藤麻呂 1984 「中部・北陸」『新版仏教考古学講座』第7巻墳墓 雄山閣出版
- ・前園実知雄 1984 「律令官人の墓」『季刊考古学』第9号 雄山閣出版
- ・玉利 勲 1992 平凡社選書142『墓盗人と贗物づくり』平凡社
- ・原 明芳 1995 「長野県の奈良・平安時代の墓制について」『東日本における奈良・平安時代の墓制』第Ⅲ分冊 東海・北陸・中部・近畿の一部 東日本埋蔵文化財研究会
- ・助長野県史刊行会 「安塚古墳群」『長野県史』考古資料編 全一巻(中)1主要遺跡(中信)
- ・南佐久郡白田町教育委員会 1988 白田町埋蔵文化財調査報告書第3集『五雲西拾貳号古墳』
- ・佐久市教育委員会 1995 「市内遺跡発掘調査報告書 1993」
- ・佐久市教育委員会 1995 「佐久市埋蔵文化財年報3 平成5年度」
- ・吉澤 悟 1995 「櫃の末々 日本における火葬の導入と展開過程に寄せる想念」『東国火葬事始』全面展図録 栃木県立博物館

付 大穴遺跡（長野県）出土の人骨と獣骨

京都大学霊長類研究所

茂原 信生

1 はじめに

大穴遺跡は長野県更埴市大字森に所在する遺跡で、平成5年度に長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査された。この遺跡は集落址と古墳群に大別される。集落址は弥生時代中期と平安時代に位置付き、古墳は1号墳が7世紀後半に、2～6号墳が8世紀前半に属すると考えられている。本稿はその際に出土した人骨と獣骨に関するものである。

人骨の計測はマルチン（馬場：1994）に従い、歯の計測は藤田（1947）に従った。馬歯、ならびに牛歯の計測はDriesch（1971）に従った。

2 出土状況

人骨は古墳の玄室内から出土したものである。保存状態は悪く、完形のものではなく断片的な出土である。

3 出土骨の特徴

(1) 古墳出土の人骨

1号墳：種別不明の細片がわずかに出土しているにすぎない。焼けていない。

3号墳：ヒトの焼けた頭蓋骨が出土している。量的には少ないが、頭頂骨、側頭骨、頬骨が確認できる。形態的な特徴は不明である。

4号墳：右の下顎体から正中にかけてと歯が9本出土している。すべて同一個体のものである。オトガイ隆起はやや発達し、オトガイ結節もやや発達しているためオトガイ三角が比較的明瞭である。下顎体は厚い。歯槽から判断して左側切歯から右の前歯にかけては抜歯はない。下顎大白歯の咬頭と溝の型は、第一大白歯が+5型、第二大白歯は右がX5型、左がX4型であり、第三大白歯は退化形である。

歯の大きさは、第二大白歯の近遠心径を除けばすべて、現代日本人男性の平均値より大きい。したがって、この人骨は男性である可能性が高い。歯の咬耗は少なく、第三大白歯はまったく咬耗していない。第二大白歯は左のみがごくわずかに咬耗しているだけで右は咬耗しておらず、左も象牙質は露出してない。第一大白歯の象牙質の露出もごくわずかであるから、この個体は15歳程度の年齢と推測される。

この墓には1体分が埋葬されていたと考えられ、男性で年齢は15歳前後の少年である。形態的に特記すべきことはない。

5号墳：この玄室には大きく分けて二つの部分にまとまった骨が出土している（仮に、骨の多い方の集団をグループA、少ない方の集団をグループBとする）。後述のように、別個体と考えられる大腿骨が同一箇所にもまとめられていることから考えると、新たな埋葬（グループB）のために今まで埋葬されていたもの（グループA）が一箇所に集められたものと考えられる。残っているものでは大腿骨が多い。

グループA

大腿骨が6本、他に上腕骨片、脛骨などが残っている。上腕骨片（標本番号43、以下同じ）、脛骨（43）などが残っている。右脛骨上半部の外側面から後面にかけてが残っており、ヒラメ筋線が認められる。骨は厚く頑丈である。

大腿骨は7本（33、37、39、42（2）、43（2））が残っているが、いずれも子供ではないと考え

られるものである。後面の粗線部が残っているものは、1本は太く頑丈な大腿骨の一部(37)であり、比較的厚く頑丈で、成人には達しているものと思われるが粗線はあまり発達していないもの(39)、細片だが粗線の残りのよいもの2本(43)、比較的残りのよいもの2本(42)などが見られる。形態的に問題になるのは最後の2本である。これらは、それぞれ左と右の大腿骨であるが、太さは異なっており、別個体のものである。右の大腿骨は細く、上部外側の殿筋隆起が発達しており、その内側にある転子下窩は溝状に深い。粗線は独立してはいないが後方に張り出している。骨体上横径は25.9mm、骨体上矢状径は21.8mmで扁平示数は84.1で扁平大腿骨に属している。骨体中央横径は22.1mm、骨体中央矢状径は25.7mmで横断示数は116.3であり柱状性は高い。女性的な大腿骨である。成人には達していると考えられる。一方左の大腿骨は骨幹中央よりやや遠位部で、骨はかなり厚い。右の大腿骨よりかなり太く、比較的頑丈である。粗線の発達は普通である。男性的である。

細片ながら大腿骨後面が出土しており、その粗線は幅のある稜状のものである(43)。

形態的に考えると、このAグループには少なくとも3種の太さや粗線を持つ大腿骨があり、少なくとも3個体分が埋葬されていたと推測される。

グループB

大腿骨が1片、脛骨が2片残っている。脛骨は共に骨幹の前縁部であるが、片方(40)はやや太めであり、全周が残っているわけではないが扁平ではないと思われる。もう一方(34)は左右は不明である。この脛骨は、前縁からの広がり狭く、前述の脛骨より細めであろうと思われる。ほかは部位不明の数cm程度の細片だけである。

グループBに属するの人骨が後から埋葬されたと考え、先の3体にさらに1体分が加わることになる。

5号墳からは、大腿骨の太さや粗線の発達状態、あるいは骨の厚さなどの条件を比較すると、少なくとも4体分の大腿骨があると判断される。内訳は、成人の男性1体、成人女性1体、および成人であろうが性別不明の2体の計4体が出土している。病変は認められない。

埋葬体数のごとくは、グループAの取り上げ時に確認された長骨数が26本であるという。一体分の人骨の四肢長骨の数は指の骨などを除くと合計12本であり、26本というのは3体分にあたることから3体という推定の妥当性が裏付けられる。

6号墳：ヒトの側頭骨縁部と思われる破片と、獣骨と思われる細片、さらに焼骨の細片が出土している。焼骨は四肢骨片で内面の形態から判断して獣骨であろう。

(2) 住居址から出土した獣骨

3号住居址：ウマの上顎歯片が出土しているが歯種は不明である。

12号住居址：ウシの下顎左第三大臼歯が出土している。比較的若い個体のものであろう。

(3) 溝から出土した獣骨(付-2表)

1号溝址：ウマの左右の下顎骨体部とそれに植立した臼歯が出土している。左右とも臼歯はすべて、すなわち第二小臼歯から第三大臼歯までの6本ずつが残っている。異常磨耗等は見られない。第三大臼歯まで咬耗が見られるものの、歯冠が長いので比較的若い個体であろう。

現生のウマの歯の大きさ(林田：1978、岡部：1953)と比較して判断すると、トカラウマの様な小型ウマではなく、木曾馬や御崎馬の様な中型の馬に属するものである。

4 まとめ

大穴遺跡から出土した人骨は、いずれも断片的であった。3号墳からは焼けた頭蓋骨が出土している。4号墳からは15歳程度の男性が、5号墳からは成人男性および女性とそれ以外の2体の計4体分が確認された。6号墳からは性別ならびに年齢不明の1体が認められた。したがってこの遺跡からは全体で7体が出土したことになる。脛骨が扁平ではない。

獣骨ではウマとウシが確認され、ウマは中型馬である。

参考文献

- 馬場悠男 1991 人類学講座別巻1『人骨計測法』、江藤盛治集；159-358、人骨計測法。
 Driesch, A. von den 1976: A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites. Peabody Mus. Bull, 1: 1-137
 藤田恒太郎 1947 『人類学雑誌』61: 1-6、歯の計測基準について。
 権田和良 1959 『類学雑誌』43(1): 151-163、歯の大きさの性差について。
 林田重幸 1978 『日本中央競馬会』P.180、日本在来馬の系統に関する研究。
 岡部利雄・松本久喜・三村 一 1953 『日本学術振興会』P.209、日本在来馬に関する研究。

付一1表 大穴遺跡出土骨の層別リスト (種別の記載のないものはヒトである。)

グリット	標本番号	補番	種別	骨名	部位	上下	左右	状態	コメント
SM 1									
SM 3	41			M 2 ?		下	左		第2大臼歯?
SM 3	38	1		M 1		下	左		第1大臼歯
SM 3	38	2		d p 2		下	右		第2乳臼歯
SM 3	38	3		M 1		下	右		第1大臼歯
SM 3	39			大脳骨			不明		後面粗線あり
SM 3	35			大脳骨			不明		後面粗線あり
SM 4	36			不明					
SM 4	40			脛骨			右		骨幹中央付近前縁部
SM 4	33			大脳骨?			不明		
SM 4	34			脛骨?			不明		前縁部、35とは別個体?
SM 5	37			大脳骨			不明		後面粗線部あり
SM 5	42	1		大脳骨			右		骨幹上半部
SM 5	42	2		大脳骨			左		骨幹中央付近
SM 5	42	3		不明					
SM 5	43	1		脛骨			右		骨幹上半部
SM 5	43	2		大脳骨			右		骨幹中央付近
SM 5	43	3		大脳骨			不明		骨幹中央付近
SM 5	43	4		上腕骨?			不明		
SM 5	22			下顎骨					右1M1あり
SM 5	17		不明	不明					
SM 5	19		不明	不明					
SM 5	11		ウマ?	大脳骨?					
SM 5	10		不明	不明					
SM 5	45			頭蓋骨	側頭骨		不明	焼骨	錐体部

SM5	46		不明				焼骨	
SM5	47		獣骨 不明				焼骨	
SM5	44		獣骨? 不明					
SM5	14		不明 四肢骨片				焼骨	
SM5	13		頭蓋骨片、不明				焼骨	
SM6	15		頭蓋骨片、不明				焼骨	
SM6	12	1	頭蓋骨 側頭骨			左	焼骨	錐体部
SM6	12	2	頭蓋骨 頬骨			右	焼骨	前頭突起部、眼窩外側部
SM6	16		頭蓋骨 頭頂骨			右	焼骨	アステリオン部
SB3	1		ウマ 歯		上		不明	
SB12	2		ウシ 歯 M3		下		左	第3大白歯
SD1	7		ウマ 歯		下		左右	P2-M3
SD1	3		ウマ 四肢骨片				不明	
SD1	4		ウマ 四肢骨片				不明	
SD1	5		ウマ 四肢骨片				不明	
SD1	6		ウマ 四肢骨片				不明	

付-2表 大穴遺跡出土の馬歯の計測値

	下顎歯	右	左	平均値
P2	近遠心径		32.5	32.5
	頬舌径		14.3	14.3
P3	近遠心径	30.2	30.2	30.2
	頬舌径	15.9	15.9	15.9
P4	近遠心径	28.0	27.8	27.9
	頬舌径	13.4	12.9	13.2
M1	近遠心径	27.0	27.0	27.0
	頬舌径		14.4	14.4
M2	近遠心径	27.9	27.1	27.5
	頬舌径	14.1	14.2	14.2
M3	近遠心径	27.4	26.4	26.9
	頬舌径	11.8	10.6	11.2